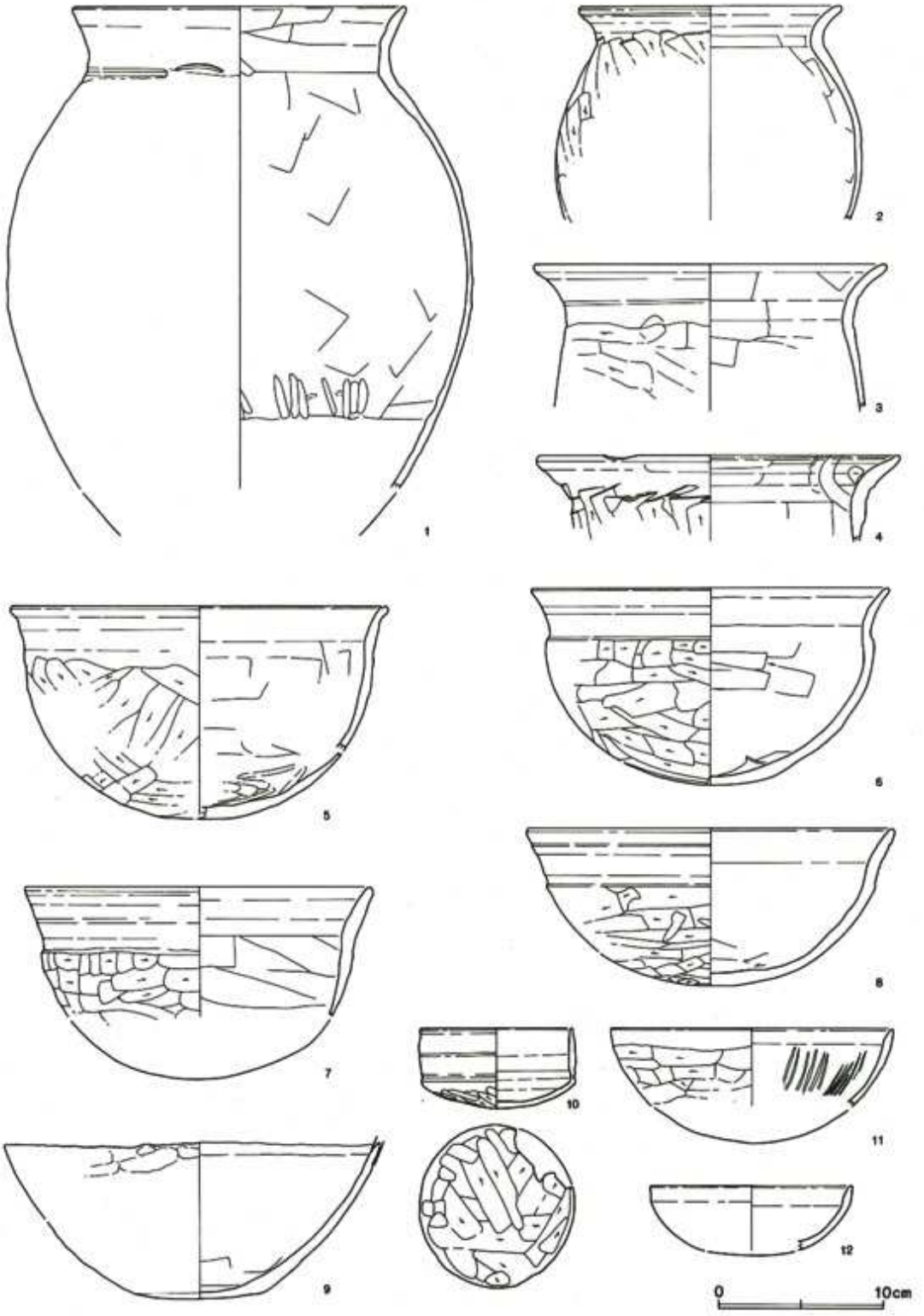
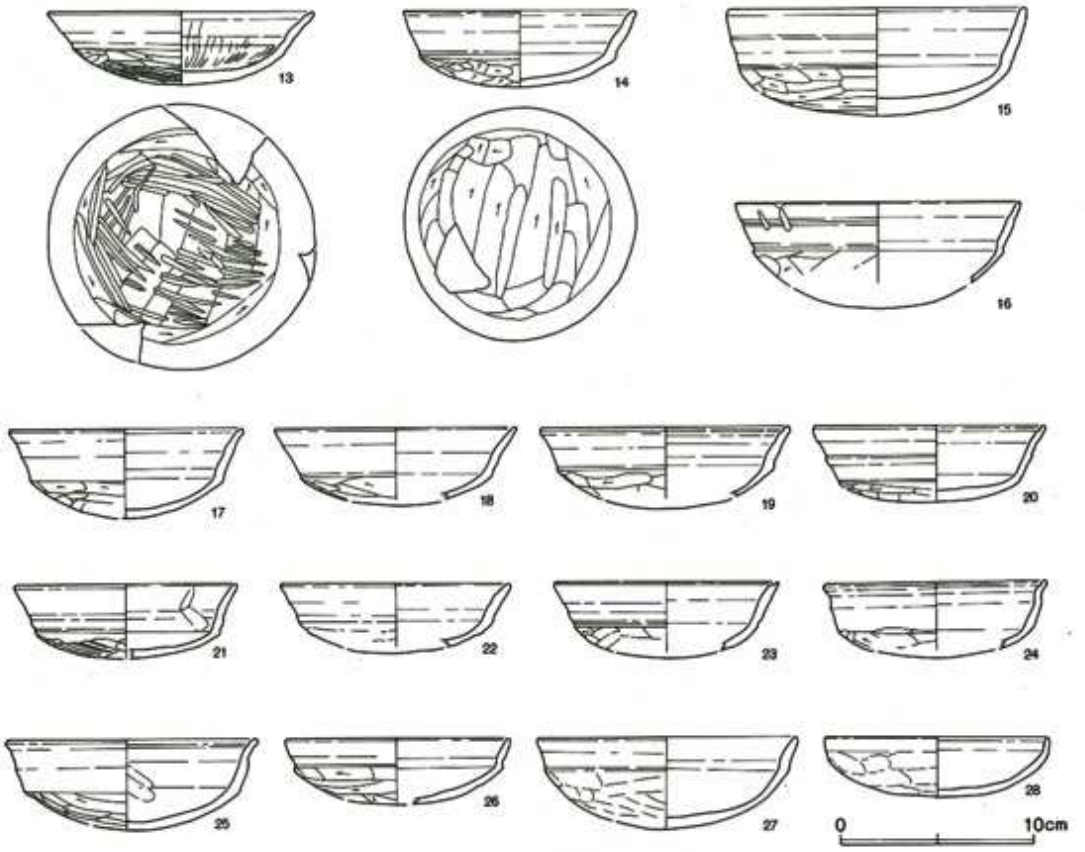


第289図　第90号住居跡出土遺物(1)



第290図　第90号住居跡出土遺物(2)

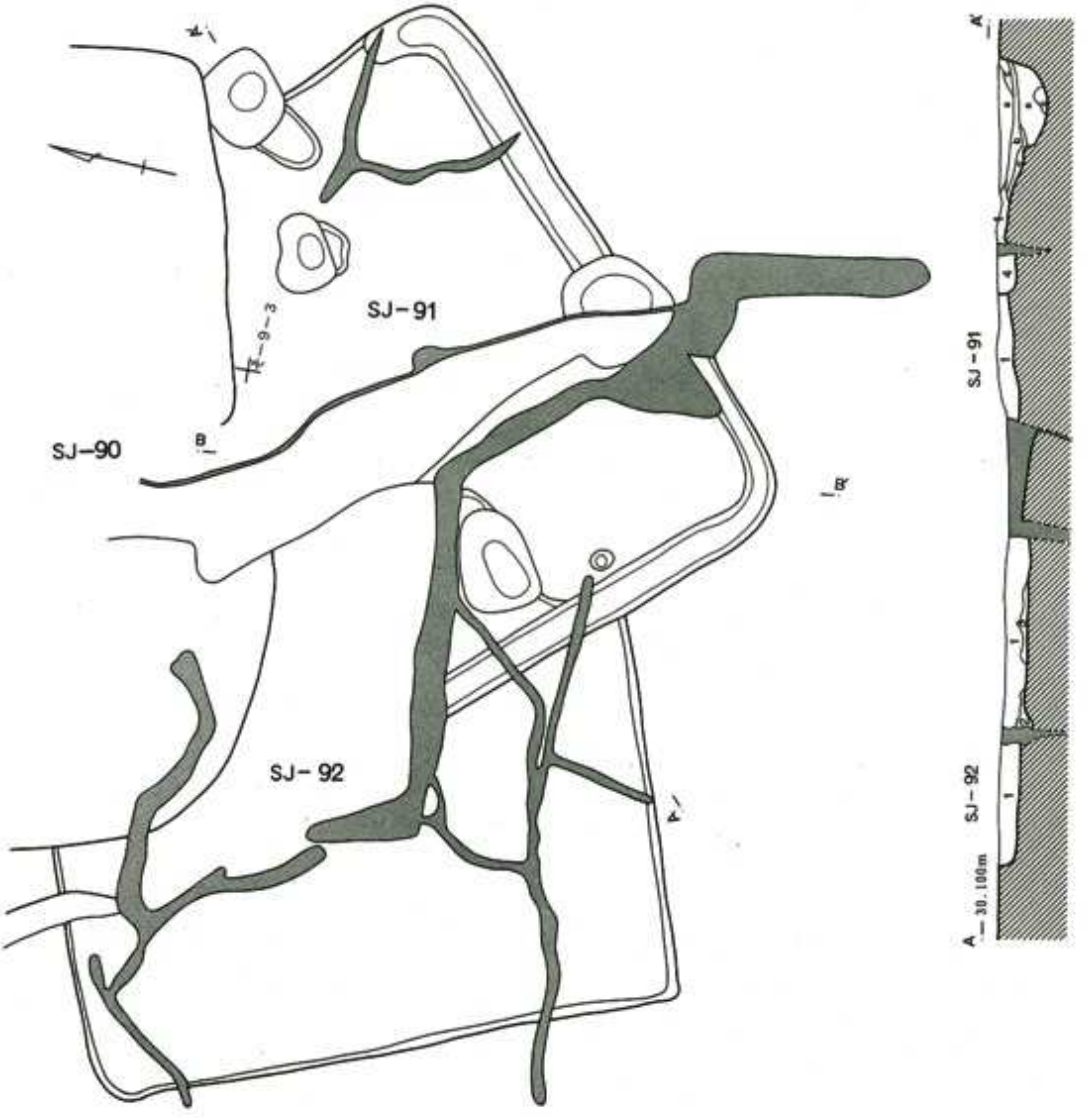
ることを考慮すれば、粘質土などで構築されていたのかもしれない。燃焼部は径90cm×70cmほどの楕円形を呈している。火床面は床より5cmほど低く、軟質だが赤くよく焼けている。煙道は長さ120cmを測るV字状で、底面は強い傾斜で立ち上がる。

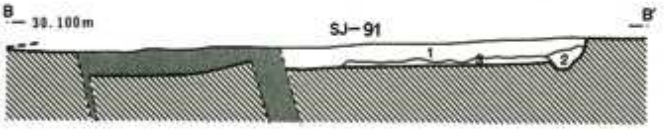
貯蔵穴と思しきものは北東隅部に存在する。径約70cm×50cmの楕円形の掘り込みである。深さは約30cmで、全体的には大きな窪みといった印象である。ゆえに、貯蔵穴とするにはやや疑問が残る。

第91号住居跡(第291図)

せ—9—22グリッドを中心に位置する。第90・92号住居跡を切り込みながらも、削平によって北半部は完全に失っている。現状から推せば全体は方形になるものと思われ、主軸長は約4.8m、その方向はおよそN—48°—Eとなる。

本跡の北半部は地震によって隆起したために削平を受けたが、残存部でもかなりの隆起ないしは陥没が生じている。噴砂も覆土と床面の間を吹き抜けた部分があり、そこには大量の砂が堆積していた。加えて、南東の壁は噴砂を境に20cmほどズレている。遺構確認面から床までの深さは、南隅部で最大で20cmである。壁溝はカマド部分を除き、検出範囲内では全周している。幅約35cm、床からの深さ約6cmを測る。





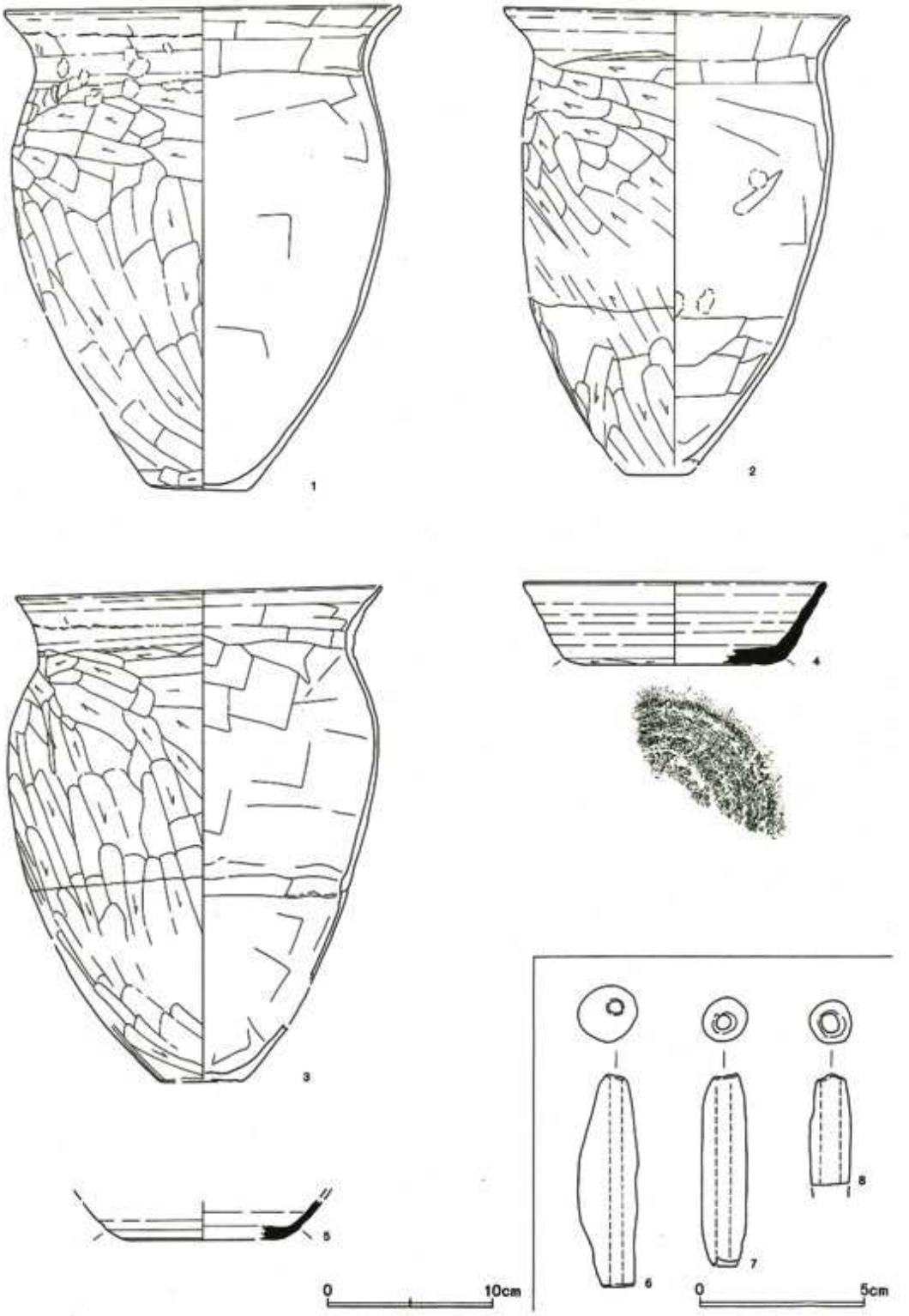
第91号住居跡土層説明
1．10YR3/2　黒色土　L，B・C粒多。
2．10YR2/3　黒褐色土　1に準ずるが含有物少。
3．10YR3/2　黒色土　BC粒少。L粒多。
4．10YR2/1　黒色土（灰）＋10YR5/1　褐灰色土の互層。

第92号住居跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　L・Bブロック少。しまり強い。

第91号住居跡カマド土層説明
a．10YR3/3　暗褐色土　B粒多。C粒・灰少。
b．10YR2/3　黒褐色土　B・C粒多。灰層。
c．10YR3/3　暗褐色土　基本はa。Bブロック多。

0　2m

第291図　第91・92号住居跡



第292図　第91号住居跡出土遺物

カマドは北東壁(中央？)に設けられている。燃焼部のみの検出で、袖や煙道は確認されなかった。燃焼部は70cm×60cmほどの長方形を呈し、大部分は壁外へ突出している。焚き口にあたると思われる部分は、床から強く傾斜している。火床面はかなり深く、そこには厚く灰が堆積している。

カマドの覆土上位からは、押し潰された状態で甕(1・3)が検出されている。他の遺物はすべて覆土中からの出土である。

第91号住居跡出土遺物(第292図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	(23.1)× 29.4 × 6.4	70%	W+W′多+粗R+B′	明赤褐	色調境界線あり
2	〃	21.0 × 27.0 × —	70%	W+(W′+R)多+B′微	Ⓔ明赤褐Ⓕ橙	色調境界線あり、作成時、胎土の相異か
3	〃	22.0 ×(29.8)× 5.3	60%	細(W+W′+B′)	明赤褐	色調境界線あり
4	坏(須恵)	(18.4)×(4.9)×(11.6)	40%	粗W多+W′	黄灰	
5	〃(〃)	— ×(2.5)× 9.8	胴部片～底部	粗(W+B)+W′	灰白	

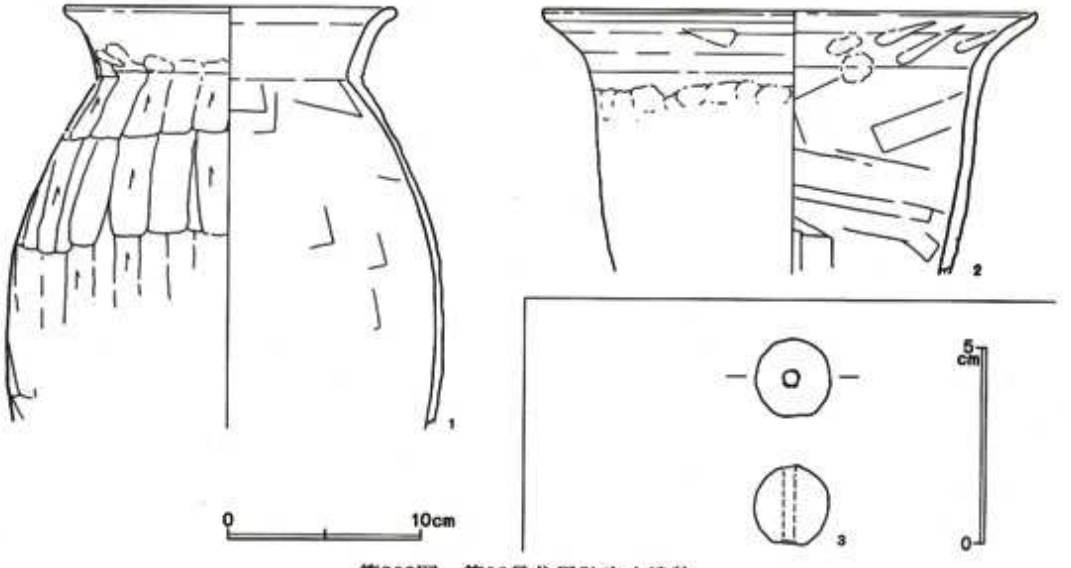
第92号住居跡(第291図)

せ—9—23グリッドを中心に位置する。第90・91号住居跡による切断と後世の削平により、北東部はまったく遺存していない。また、西隅部には第89号住居跡が乗っている。南北の軸長は約4.7mを測り、全体は(長)方形を呈するものと推定される。

残存部の床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは約16cmを有する。一部に硬化した面が見られるものの、地震の影響であろうか、大部分は軟質となっている。

カマドや貯蔵穴などは確認できなかった。

遺物の出土も少なく、わずかに覆土中から甕(1)や甑(2)の破片、土玉(3)が見いだされているにすぎない。



第293図　第92号住居跡出土遺物

第92号住居跡出土遺物（第293図）

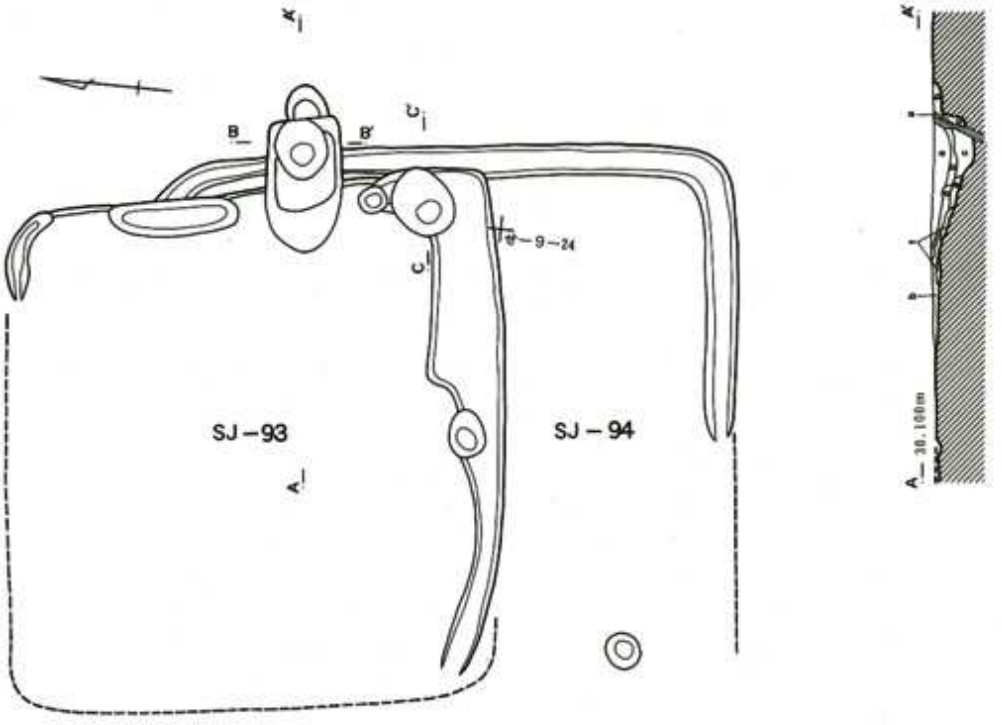
No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	17.2 ×(21.7)× —	30%	W＋粗W′多＋R＋B′	にぶい橙	
2	甑	(26.0)×(13.5)× —	口縁片	W＋W′＋B′	橙	外面ヘラ→ナデ

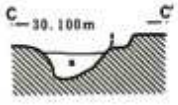
第93号住居跡（第294図）

せ－9－24グリッドを中心に位置する。南半部で第94号住居跡を切断している。本跡自身は激しい削平と耕作による攪乱を受け、西側半分を失っている。全体は方形を呈し、軸長各3.8m、面積14.4m²ほどになるものと推定される。主軸の方向はおよそN－84°－Eを指す。

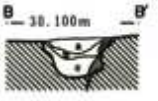
覆土がほとんど残っていないにもかかわらず、床面は非常に硬くしまっており、検出は容易であった。壁溝は部分的に途切れ、かつ南壁ではだらだらと広がっている。

カマドは東壁の南寄りに設けられている。燃焼部は74cm×60cmの長方形で、壁外へ大きく突出している。焚き口部では丸みを有し、底面はかなり傾斜している。壁際は直径40cmほどがさらに深く掘られている。ただし、その底面は焼けていないため、火床面としては灰の乗るC層上面が考えら





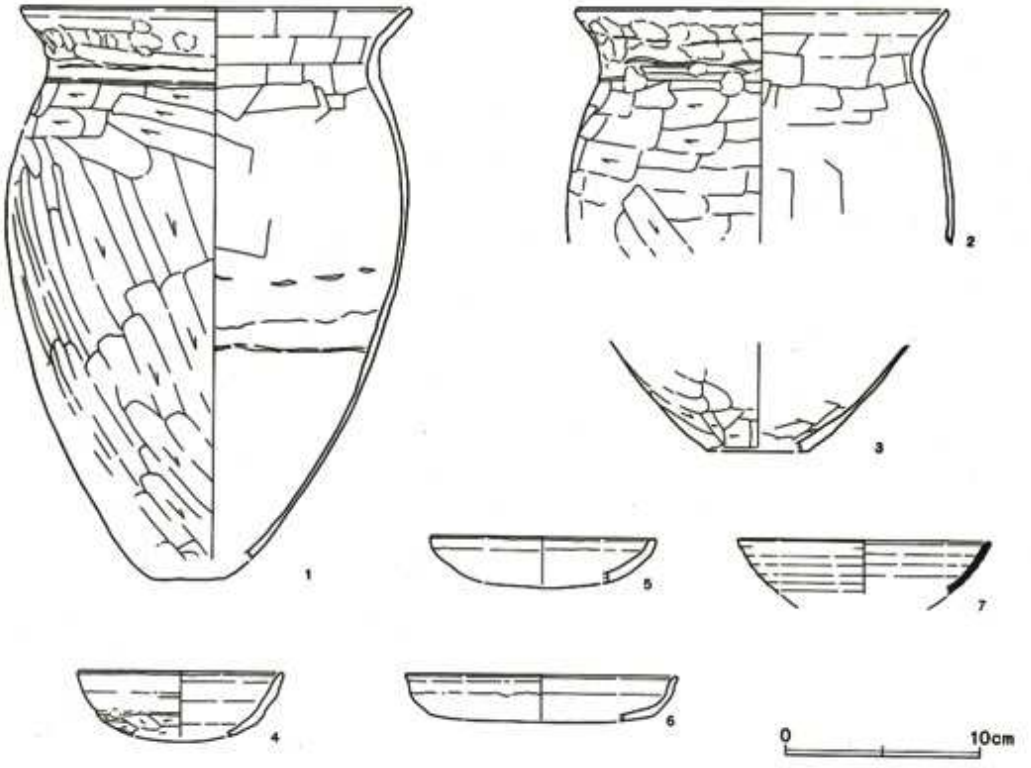
第93号住居跡貯蔵穴土層説明
a．10YR3/4　暗褐色土　L．B・C粒微。



第93号住居跡カマド土層説明
a．10YR3/4　暗褐色土　L．B粒を含む。
b．2.5YR2/4　極暗赤褐色　主にBブロックからなる。天井・壁部崩落土層。
c．10YR2/3　黒褐色土　L．Bブロック多。
d．10YR3/1　黒褐色土　B・C粒を含む灰層。
e．10YR3/3　暗褐色土　L．cに準ずる。
f．10YR3/4　暗褐色土　L．床部の焼軟化層。

0　2m

第294図　第93・94号住居跡



第295図　第93号住居跡出土遺物

れる。覆土最上層より甕(1)と坏(4・5)の破片が出土している。煙道は燃焼部から半円状に延びており、急角度で立ち上がるようである。

貯蔵穴は南東隅部、カマドの右脇に検出された。上面は径54cm×44cmほどの楕円形を呈し、深さは約24cmを測る。

前記以外の遺物も、遺構確認時にカマド周辺から出土している。

第93号住居跡出土遺物(第295図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	20.1 ×(28.2)× —	50%	W+(W′+B′)多+R	橙	
2	〃	(19.2)×(12.2)× —	破片	W+W′多+粗R少+B′微	〃	
3	〃	— ×(5.3)×(5.2)	〃	W+W′多+粗R+B′	にぶい褐	
4	坏	(10.6)×(3.3)× —	〃	W′+B+B′微	にぶい黄橙	
5	〃	(11.6)×(2.3)× —	〃	粗W多+W′+B′	にぶい橙	
6	〃	(14.0)×(2.3)× —	〃	W多+W′	橙	
7	〃(須恵)	(13.0)×(2.7)× —	〃	W+針	灰	

第94号住居跡(第294図)

せ—9—24グリッドを中心に位置する。北半部を第93号住居跡に切られるほか、全面的な削平を受けている。そのため覆土や床面、カマドは完全に失われてしまい、遺存するのは東と南の一部を巡る壁溝のみである。平面は方形ないしは長方形と思われるが、規模については明らかとしえない。

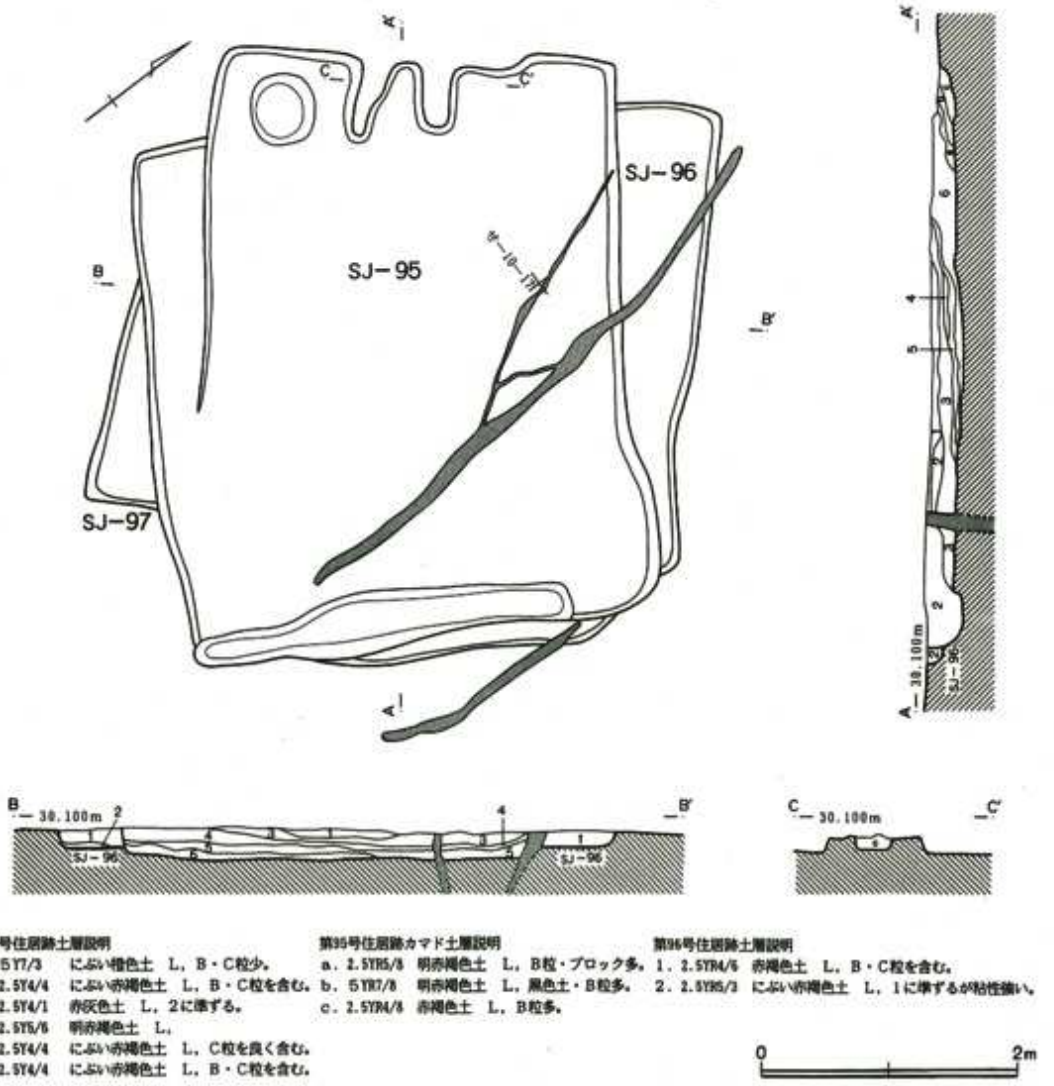
北東部における壁溝の状態を見れば、南北方向の軸長は5.2m程度となろうか。現状での壁溝は幅約24cm、深さ約6cmとなっている。

遺物はなんら出土していない。

第95号住居跡(第296図)

せ—10—12グリッドを中心に位置する。軸長4.55m×3.22m、面積約14.7m²を測る長方形の住居跡で、第96・97号住居跡を切断して営まれる。主軸方向はほぼN—50°—Wを指す。

覆土は地山の粘質土を主体とし、耕作による塡圧で硬くしまっている。遺構確認面から床までは約20cmで、壁の立ち上がりは概ね急である。床面はやや軟質となり、中央部に向けてわずかに窪んでいる。壁溝としてはやや疑問であるが、南東壁下には幅25cm～48cm、深さ8cmほどの溝が存在している。



第95号住居跡土層説明
1. 5Y7/3 にぶい橙色土 L, B・C粒少。
2. 2.5Y4/4 にぶい赤褐色土 L, B・C粒を含む。
3. 2.5Y4/1 赤灰色土 L, 2に準ずる。
4. 2.5Y5/6 明赤褐色土 L,
5. 2.5Y4/4 にぶい赤褐色土 L, C粒を良く含む。
6. 2.5Y4/4 にぶい赤褐色土 L, B・C粒を含む。

第95号住居跡カマド土層説明
a. 2.5YR5/8 明赤褐色土 L, B粒・ブロック多。
b. 5YR7/8 明赤褐色土 L, 黒色土・B粒多。
c. 2.5YR4/8 赤褐色土 L, B粒多。

第96号住居跡土層説明
1. 2.5YR4/6 赤褐色土 L, B・C粒を含む。
2. 2.5YR5/3 にぶい赤褐色土 L, 1に準ずるが粘性強い。

0 2m

第296図 第95～97号住居跡

カマドは北西壁の中央部に設けられている。袖はW字状に65cmほどが削り出され、焚き口部での開口幅は約50cmとなる。燃焼部は楕円形で、火床面は壁へ向かって緩く傾斜している。

貯蔵穴は住居跡の西隅、カマド左脇に備わる。上面は径55cm×50cmほどの円形を呈し、深さは約12cmを測る。印象としては皿状の浅い窪みといったところで、貯蔵穴と断定するのは危険かもしれない。

遺物はすべて覆土中からの出土である。

第96号住居跡(第296図)

せ—10—12グリッドを中心に位置する。第97号住居跡の大部分を切断し、逆に第95号住居跡にはその大半を切り取られる。北東壁がやや長いため、全体は台形に近い形となっている。軸長は4.32m×4.18m、面積約18.1m²を測る。

覆土はほとんど地山そのものであり、壁や床との識別も困難なほどであった。また、カマドや貯蔵穴、遺物は検出されていない。

本跡は一応住居跡として扱ったものの、上記のような事実から再度検討すれば、その可能性は低いかもしれない。

第97号住居跡(第296図)

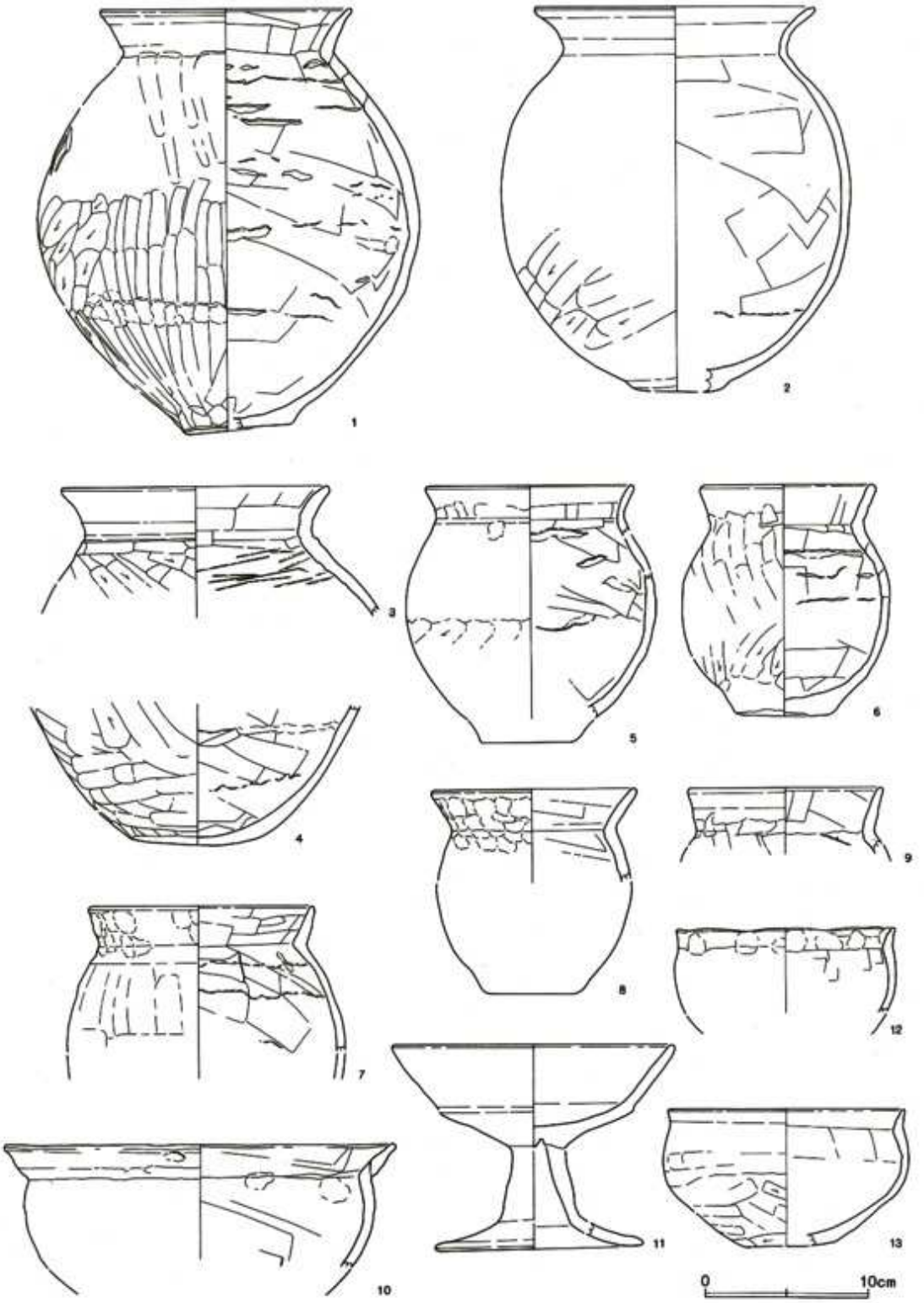
せ—10—12グリッドを中心に位置する。第95・96号住居跡の重複により、その大部分は失われている。わずかに南の隅部らしきところが残存するにすぎない。このため、規模や全体の形状はまったく不明である。

第96号住居跡と同様、覆土はほとんど地山との区別がなく、やはり壁や床との識別は困難であった。カマドや貯蔵穴、遺物はともに検出されていない。

本跡も調査担当者の所見を尊重し、住居跡の一部としてここに掲載した。しかし、これもその可能性はかなり低いものと思われる。

第95号住居跡出土遺物(第297図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	15.6 × 25.6 ×(7.0)	70%	W+W′+R+B+B′多	橙	
2	〃	(17.1)×(22.7)×(5.6)	30%	粗(W′多+R)+B′	にぶい赤褐	
3	〃	17.1 ×(8.4)× —	口縁～肩部片	W+W′微+粗R多+B′	にぶい黄橙	口縁歪む
4	〃	— ×(8.5)× 8.1	胴部～底部	W′+B′	浅黄橙	
5	小型甕	12.8 ×(14.5)× —	35%	(W+W′+R)少+B多+B′	にぶい黄橙	外面ヘラ削り→ヘラナデ
6	小型壺	(12.2)× 13.9 × 6.0	60%	W+W′+R+B′	にぶい赤褐	
7	〃	(14.4)×(10.6)× —	口縁～胴部片	W+W′+R多+B′微	赤褐	歪みが強い
8	〃	(12.6)×(5.9)× —	破片	W+W′+粗R微+B	橙	
9	〃	(12.0)×(4.0)× —	口縁½	W+B+B′多	明赤褐	
10	鉢	(24.0)×(7.6)× —	破片	W+B+B′	〃	
11	高坏 脚 坏	—　×(1.7)×(13.2) 17.4 ×(6.5)× —	70% 70%	}微細(W+B+B′)	〃	器表剥落著しい
12	甕	(13.4)×(5.1)× —	破片	W+B+B′多	赤褐	
13	〃	14.6 ×(9.0)× 5.3	60%	W多+(W′+B′)少+粗R	〃	外面—ヘラ削り→ナデ

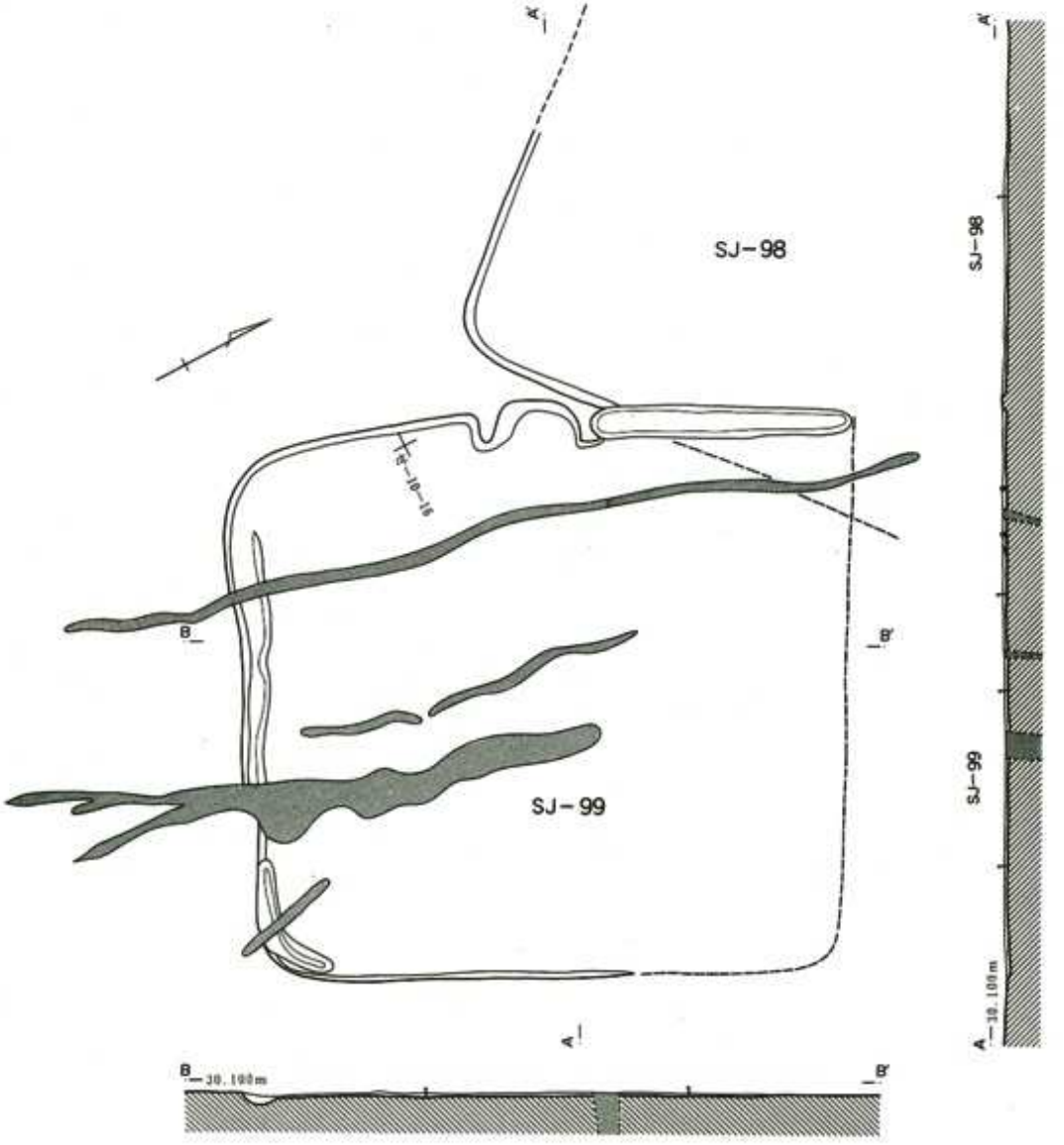


第297図　第95号住居跡出土遺物

第98号住居跡(第298図)

せ—10—16グリッドを中心に位置する。住居跡の南隅が確認されたのみで、他はすべてが完全に削平されている。遺構確認時の観察では、第99号住居跡の壁がごくわずかに残った本跡覆土を切っていた。規模や形状はまったく不明である。

薄皮状に残存する覆土を剝ぐと、比較的良好な床面が現れた。検出範囲内は概ね平坦で、硬くしまっている。カマドや貯蔵穴などの施設、および遺物は検出されていない。



第298図 第98・99号住居跡

第99号住居跡(第298図)

せ－9－15グリッドを中心に位置し、第98号住居跡を切断している。削平は床面の一部にまで及ぶが、おおよその規模と形状は窺い知ることができる。遺構確認時の所見を援用すれば、全体は軸長4.38m×4.71mの長方形を呈し、面積は約20.6m²を測る。主軸の方向はおよそN－63°－Wを指す。

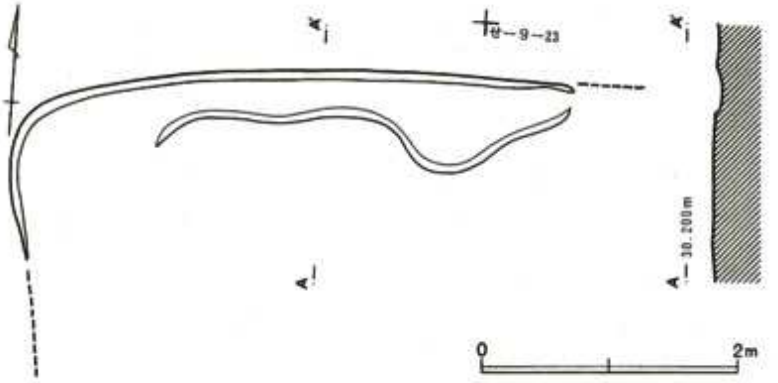
遺構確認面から床までは最大でも3cmにすぎず、覆土はほとんど一掻きで取り除けた。床面は平坦で硬くしまっている。壁溝は幅約20cm、深さ約5cmで部分的に巡る。

カマドは北西壁の中央部に検出された。削出された袖の突出は短い。燃焼部は奥行き約53cm、幅約68cmの箱形で、火床面は床とほぼ同じ高さとなっている。

貯蔵穴などの施設、および遺物の出土は見られなかった。

第100号住居跡(第299図)

せ－9－18グリッドを中心に位置する。北壁部の壁溝をわずかに残すのみで、既にそのほとんどは削平されてしまっている。床面も失われているが、削平は直下であったらしく、壁溝の南側には硬化した部分が観察された。カマドや貯蔵穴などの施設は検出はできなかった。



第299図　第100号住居跡

遺物は坏の細片が少量出土しているものの、図示することはできなかった。

第101号住居跡(第300・301図)

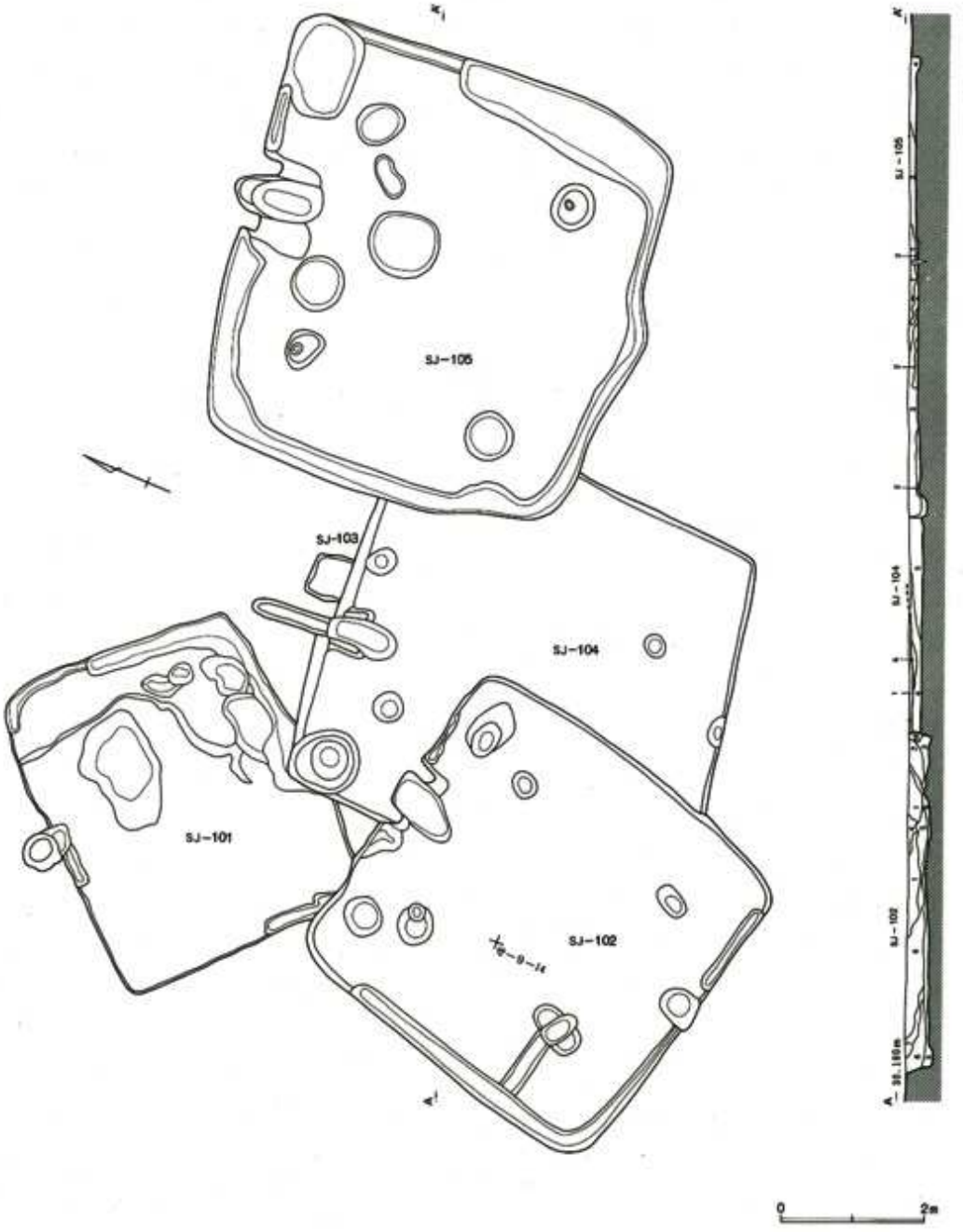
せ－9－13グリッドを中心に位置する。本跡から第105号住居跡までの5軒は、次のに示す新旧関係で重複している。第104号住居跡(古)→第102号住居跡第101号住居跡(新)、第104号住居跡(古)→第105号住居跡(新)、第102号住居跡(古)→第103号住居跡(新)。

第101号住居跡の平面は軸長3.75m×4.51mの長方形で、面積は約16.9m²を測る。主軸の方向はおよそN－45°－Wを指す。床面以上は削平されているため、掘り方のみの検出となっている。

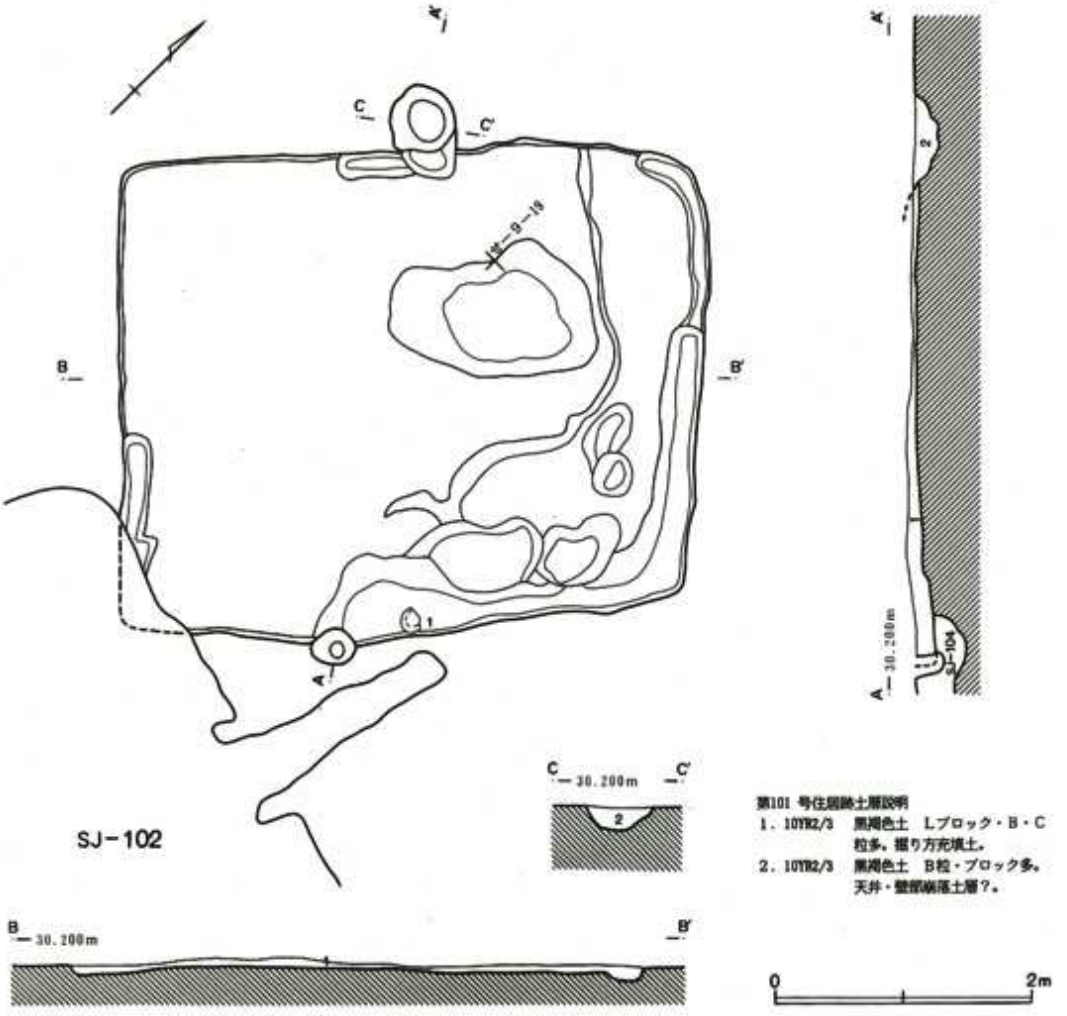
覆土は北部がしまりの弱い黒色土、南部が硬くしまった地山の粘質土を主体にしている。掘り方も北部が深くでこぼこであるのに対し、南部は平坦となっている。このことから、北部は貼り床面も削平されてしまったものと思われる。

カマドは北西壁の中央部に位置する。確認されたのは直径約80cmの燃焼部で、ほぼ壁外に突出している。遺構確認面から火床面までは約18cmの深さ有し、内部には多量の焼土が堆積している。

遺物は充塡土中より暗文を施された坏(1)などが少量出土している。



第300図　第101～105号住居跡



第301図　第101号住居跡

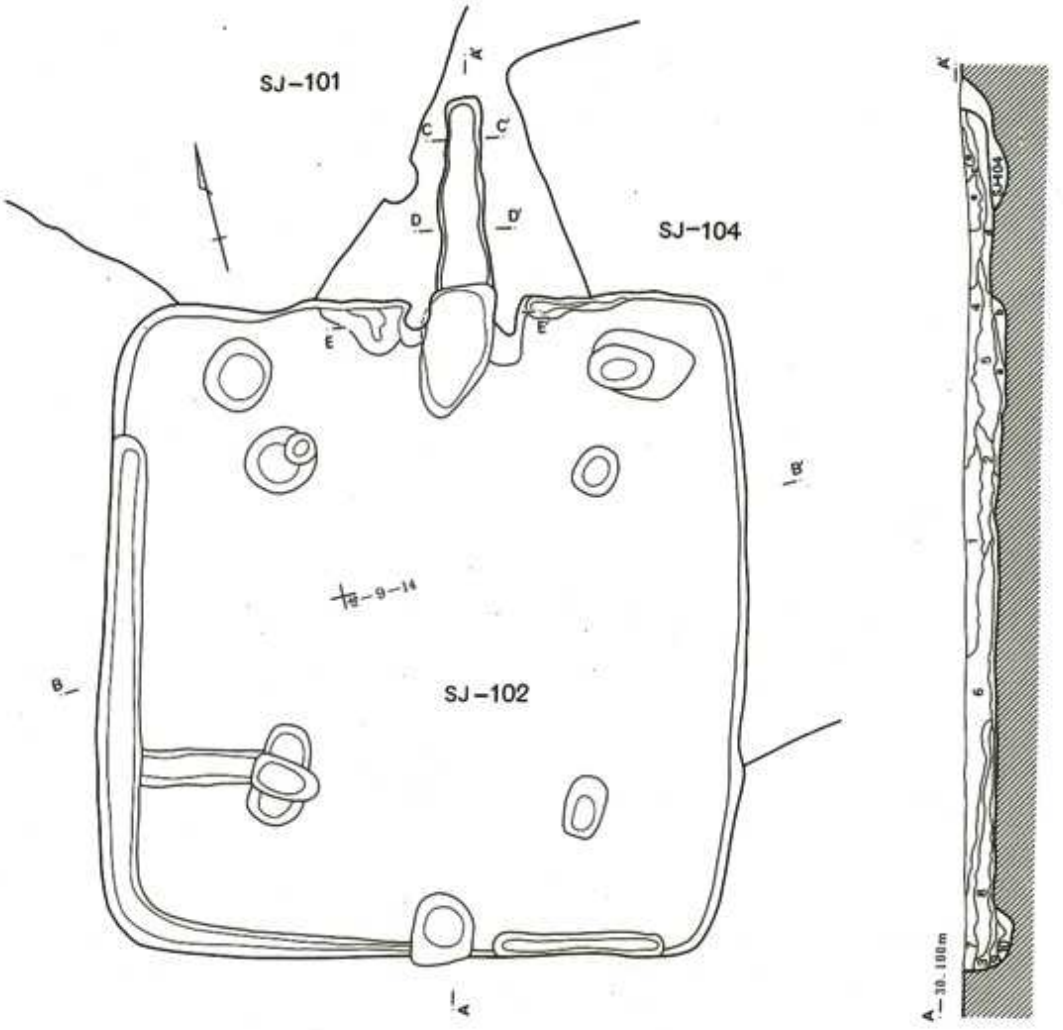
第102号住居跡(第300・302図)

せ－9－8グリッドを中心に位置する。第104号住居跡を切断して営まれ、壁と覆土の一部を第101・103号住居跡に切られる。各住居跡との重複に意識的な様子は観察されず、いずれも先行住居跡の埋没後に掘り込まれている。全体は5.13m×5.02mの方形を呈し、面積は約25.8m²を測る。主軸の方向はおよそN－17°－Eである。

遺構確認面から床までの深さは約30cmで、軟質な床面は中央部がやや膨らみを有してている。壁溝は西・南の壁下に幅約30cm、深さ約6cmで巡っている。

柱穴は住居跡の対角線上に4本検出されている。径は40cm前後で、深さは西側2穴が13cm、東側2穴が6cmとなっている。南西の柱穴からは西壁に向け、間仕切状の溝が延びている。また、南壁中央には径約43cm、深さ約36cmのピットが穿たれている。出入口に関する施設であろうか。

カマドは北壁中央部に設けられる。短い袖は壁より削り出されたもので、燃焼部を箱形に区画している。ただし燃焼部を全体的に見れば、その平面は100cm×55cmほどの楕円状となる。火床面は床面から2cm程度低く、概ね平坦で灰が堆積している。煙道底面の基部は火床面より10cmほど高く、



第102 号住居跡カマド土層説明

a．10YR3/4　暗褐色土　Bブロックからなる。C＋灰の薄層を挟む。天井・壁部崩落土層。
b．10YR3/1　黒褐色土　B・C粒を含む単純灰層。
c．5YR3/4　暗赤褐色土　ほとんどB。煙道部崩落土層。
d．10YR2/3　黒褐色土　B・C・灰からなる。
e．10YR4/4　褐色土　cの非焼土化部。

第102 号住居跡土層説明

1．10YR2/3　黒褐色土　L，B・C粒多。
2．10YR2/3　黒褐色土　基本は1．大型Lブロック多。
3．10YR2/3　黒褐色土　G粒を含むが概ね単一的。
4．10YR3/4　暗褐色土　Lブロックからなる。C粒微。
5．10YR3/3　暗褐色土　基本は1．Lブロックを含む。
6．10YR3/4　暗褐色土　基本は1．Lブロックを含む。
7．10YR3/4　暗褐色土　基本は1．C粒微。
8．10YR3/3　暗褐色土　Lブロック多。C粒微。
9．10YR3/4　暗褐色土　L・Gからなる。粘性強い。
10．地山Lブロック。

0　2m

第302図　第102号住居跡

壁外へ緩やかに立ち上がっていく。幅は約35cm、長さは約146cmを測る。

貯蔵穴は北東隅部に備わる。上面は径84cm×53cmの楕円形を呈し、床面より64cmの深さを有する。北西隅部にも直径約50cmの掘り込みが見られる。深さ約20cmの浅い皿状の窪みである。

遺物は極めて少なく、しかもすべて小さな破片である。

第103号住居跡(第300・303図)

せ－9－13グリッドに位置する。第102・103号住居跡の覆土上に営まれ、削平のため多くは失われている。そのため、全体の規模や第105号住居跡との関係は不明である。主軸方向はおよそN－6°－Wを指す。

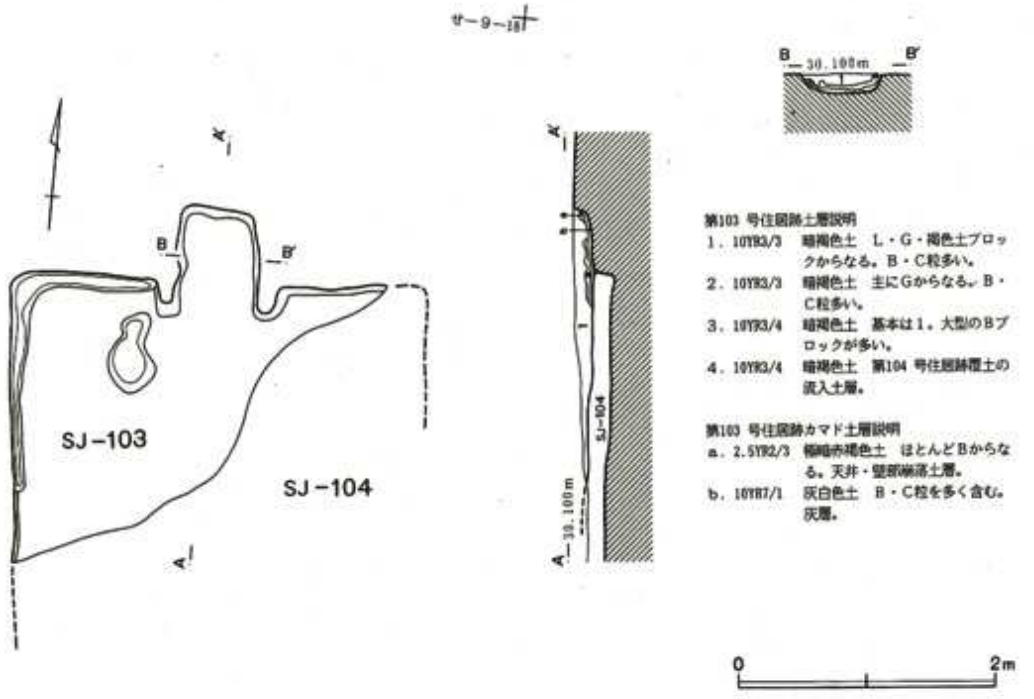
確認面から床までは、最も深い北西隅部で約15cmである。床面は比較的硬く踏みしまっており、第104号住居跡の覆土中にありながらも、特に貼られた様子は窺われなかった。壁溝は北西隅部に幅約13cm、深さ約5cmで巡っている。

カマドは北壁(中央?)に設けられている。袖は削出された25cmほどが確認されたにすぎない。燃焼部は90cm×64cmの長方形を呈し、壁外に大きく突出している。火床面は床面と同一の深さで、壁外へ緩やかに立ち上がっている。

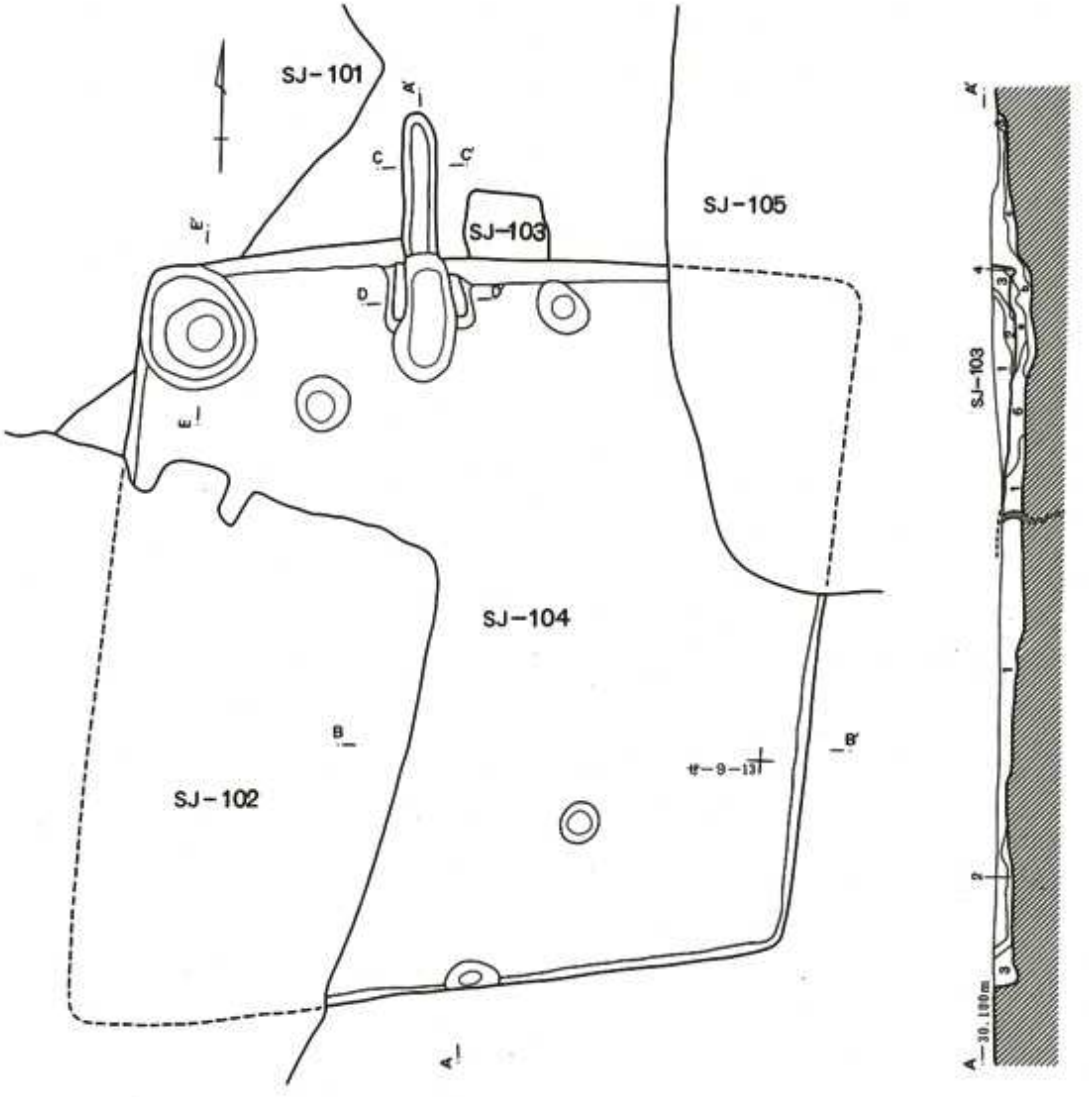
遺物はカマドの手前側から土錘がまとまって出土している。

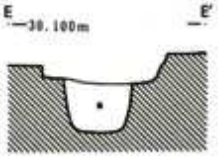
第104号住居跡(第300・304図)

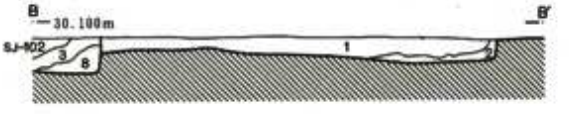
せ－9－13グリッドを中心に位置する。第102号住居跡に南西部を、第105号住居跡に北東部をそれぞれ切断される。さらに、覆土上には第101・102号住居跡が乗っている。全体は台形(平行四辺形)状となり、軸長5.8m×5.3m、面積約30.7m²を測る。主軸方向はおよそN－4°－Wを指す。

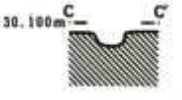


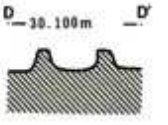
第303図　第103号住居跡











第104 号住居跡土層説明
1．10YR3/3　暗褐色土　L・G・褐色土粒からなる。B・C粒微。
2．10YR3/2　黒褐色土　L粒少。しまり弱い。
3．10YR3/4　暗褐色土　ほとんどL。
4．10YR2/3　黒褐色土　L・B・C粒多。
5．10YR3/4　暗褐色土　C粒多。B粒・ブロック少。
6．10YR3/2　黒褐色土　B・C粒多。

第104 号住居跡カマド土層説明
a．10YR4/3　にぶい黄褐色土　L・Bブロックからなる。天井・壁部崩落土層。
b．10YR3/4　暗褐色土　大型Bブロック多。C粒・灰を含む。
c．10YR4/3　にぶい黄褐色土　B粒微。粘性強い。

第104 号住居跡貯蔵穴土層説明
a．10YR3/4　暗褐色土　G多。B・C粒微。

第304図　第104号住居跡

壁はほぼ垂直を保っており、遺構確認面から床までは約16cmの高さを有する。床面はやや起伏が多く、中央部の南側が高くなっている。

カマドは北壁、中央からわずかに西へ寄っている。袖は壁の中位から「ハ」字状に、55cmほどが削り出されている。燃焼部は長さ約100cm、幅約40cmの楕円形で、火床面は床より8cmほど低い。煙道は長さ約108cm、幅約25cmの溝状に延び、底面は緩やかに立ち上がっている。

貯蔵穴は北西隅部に備わる。上面は径102cm×87cmの不整円形を呈し、深さ12cmほどでテラス状の底部となる。中央部はさらに直径約54cm、深さ42cmの円筒状に掘り下げられる。覆土中より甕の口縁部(2)が出土している。

図示した他の遺物は、すべて住居跡の覆土中から検出されている。

第101・102・104号住居跡出土遺物(第305図)

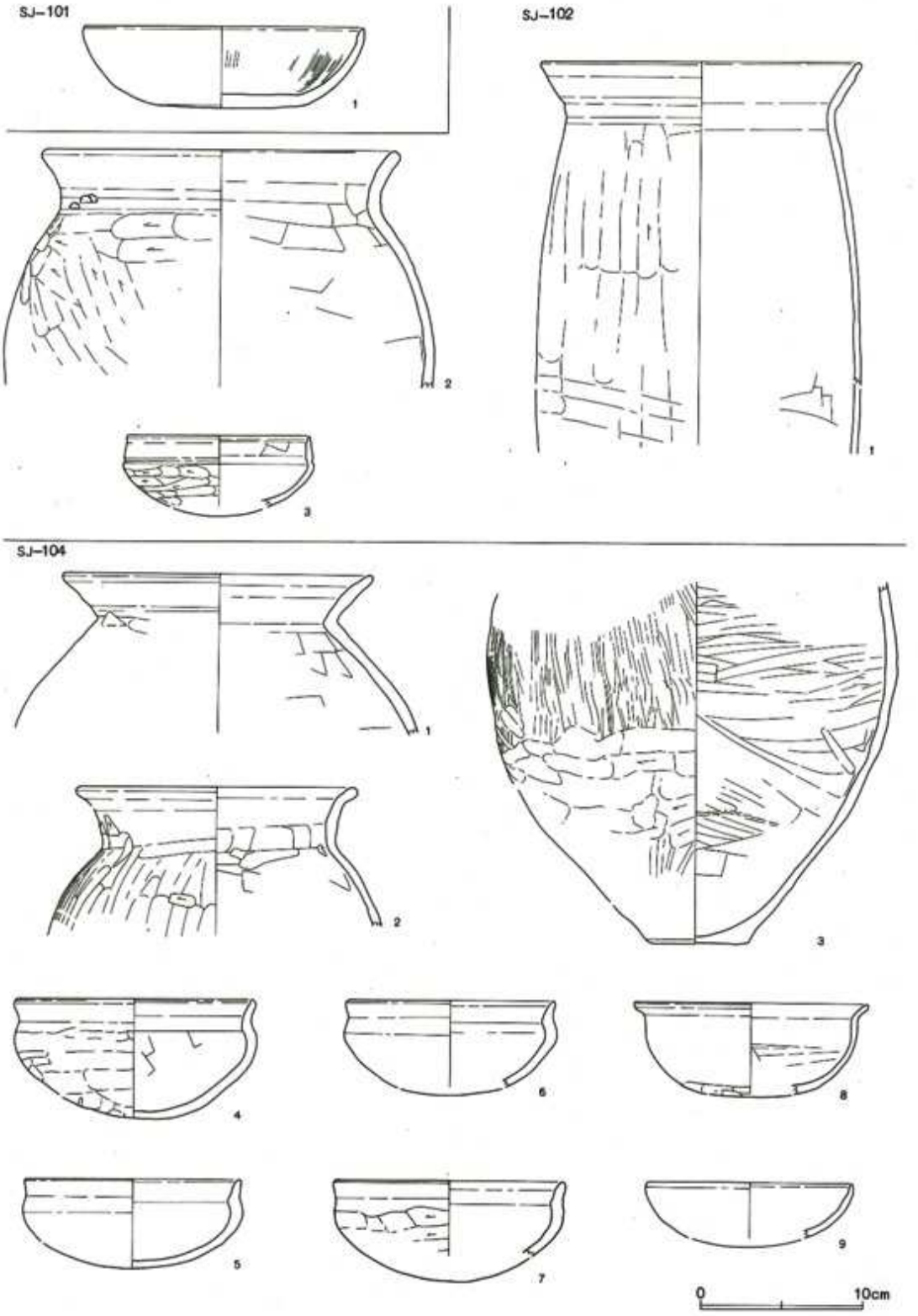
No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
第101号						
1	坏	17.4 × 5.2 × 9.6	70%	(W′+B′)微+R+粗B少	橙	器表剥落著しく細かに放射状暗文、部分的に残る
第102号						
1	甕	(20.0)×(23.4)× —	破片	W微+W′+B′多	にぶい橙	
2	〃	(22.2)×(15.9)× —	口縁～肩部破片	W+W′少+R少+B+B′多	明赤褐	
3	坏	(11.3)×(4.4)× —	30%	W微+細(W′+B′)+R	にぶい赤褐	
第104号						
1	壺	(19.0)×(11.6)× —	口縁破片	粗W′+R+片	にぶい褐	
2	甕	(17.2)×(9.7)× —	口縁～肩部	W+W′+粗R多+B′	〃	
3	〃	— ×(22.2)× 5.8	肩部～底部	粗W′多+B′	〃	
4	瓶	(15.0)× 7.3 × —	60%	W+W′多+粗R+B′	橙	
5	〃	(13.4)× 5.5 × —	60%	(W+W′)微+粗(R多+B′)	〃	粗礫含む 外面一ヘラ削り→ナデ
6	〃	(13.0)×(5.5)× —	30%	W多+W′+B′微	〃	外面一ヘラ削りだが不明瞭
7	〃	(14.4)×(4.7)× —	口縁片20%	W+W′微+B+B′微	〃	
8	〃	(14.5)×(6.1)× —	口縁片	W+W′+R	〃	外面一ヘラ削り→ナデ
9	坏	(12.0)×(3.9)× —	60%	W+B+B′	にぶい橙	外面一ヘラ削りだが不明瞭

第105号住居跡(第300・306図)

せ—9—12グリッドを中心に位置し、南西隅部で第104号住居跡を切断している。全体は5.9m×6.16mの長方形で、南壁中央部がやや突出している。面積は約36.3m²を測り、主軸方向はおよそN—4°—Wを指す。

床面は東から西へ向けて緩傾斜し、遺構確認面からの深さは4cm～10cmと開きがある。質的にも東側は硬くガリガリであるのに対し、西側は軟質でしまりに欠けている。壁溝は幅約25cm、深さ約15cmで全周している。ただ、東壁南部では幅が35cmとかなり広くなっている。

柱穴は対角線上に4本検出された。いずれも直径70cm、深さ10cm程度の浅いものであり、柱痕などは観察されなかった。また、床面上には浅い土坑状の落ち込みが数基確認された。覆土は住居跡のものと共通することから、機能時には開口していた窪みと思われる。

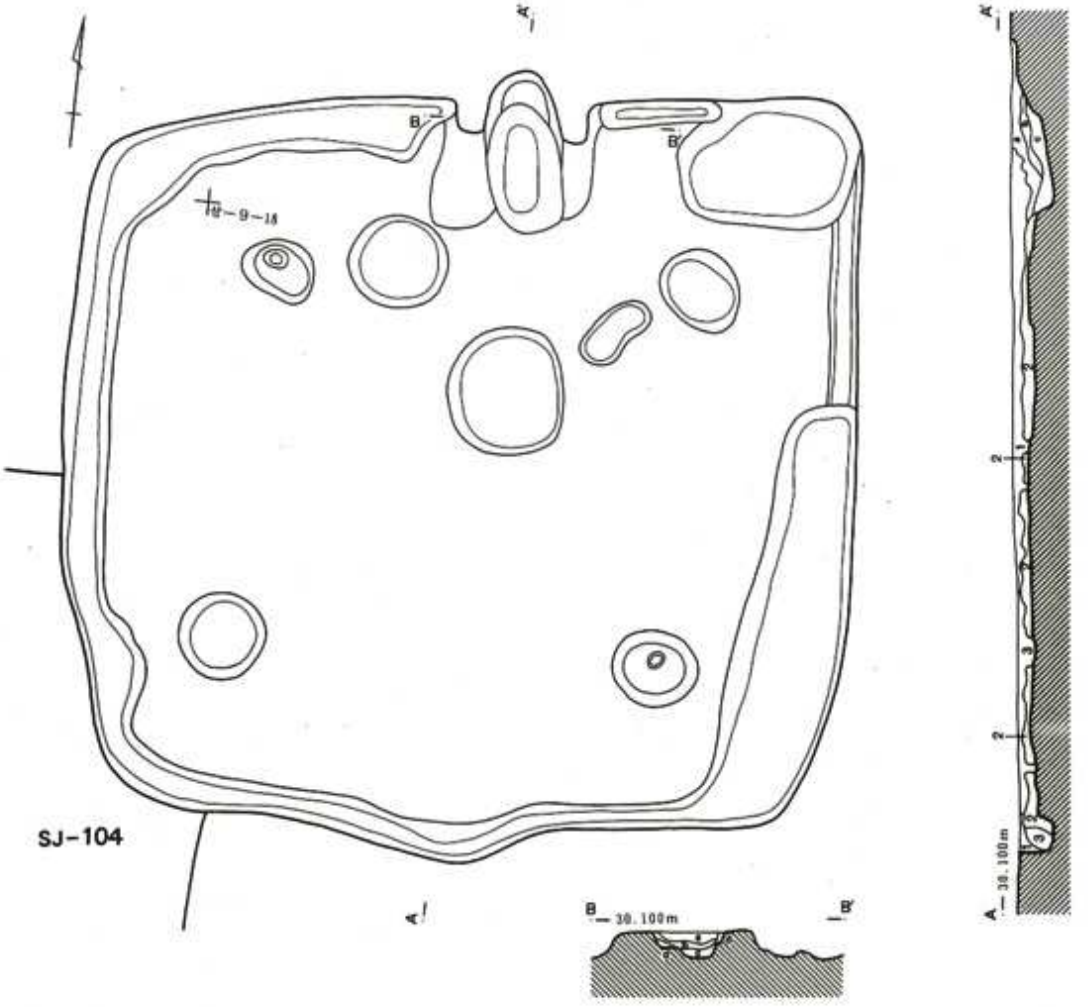


第305図　第101・102・104号住居跡出土遺物

カマドは北壁のほぼ中央に設けられている。袖の削出は幅広く、だらだらと手前に向かって傾斜している。燃焼部は約100cm×50cmの楕円形を呈し、床面からの深さは最大20cmを測る。最下層の覆土はほとんど地山で、焼土化が進行している。灰層はこの上に形成されているため、火床面は最下層上面に相当するものと考えられる。

貯蔵穴は北東隅部の掘り込みかとも思われたが、平面的な規模が極めて大きく(おおよそ144cm×100cm)、それに対して深さはかなり浅い(約10cm)など、否定的材料が多い。

遺物は調査中(休日)にいたずらを受け、出土位置を記録することができなかった。大部分は覆土中からの出土で、床からは若干浮いていた。

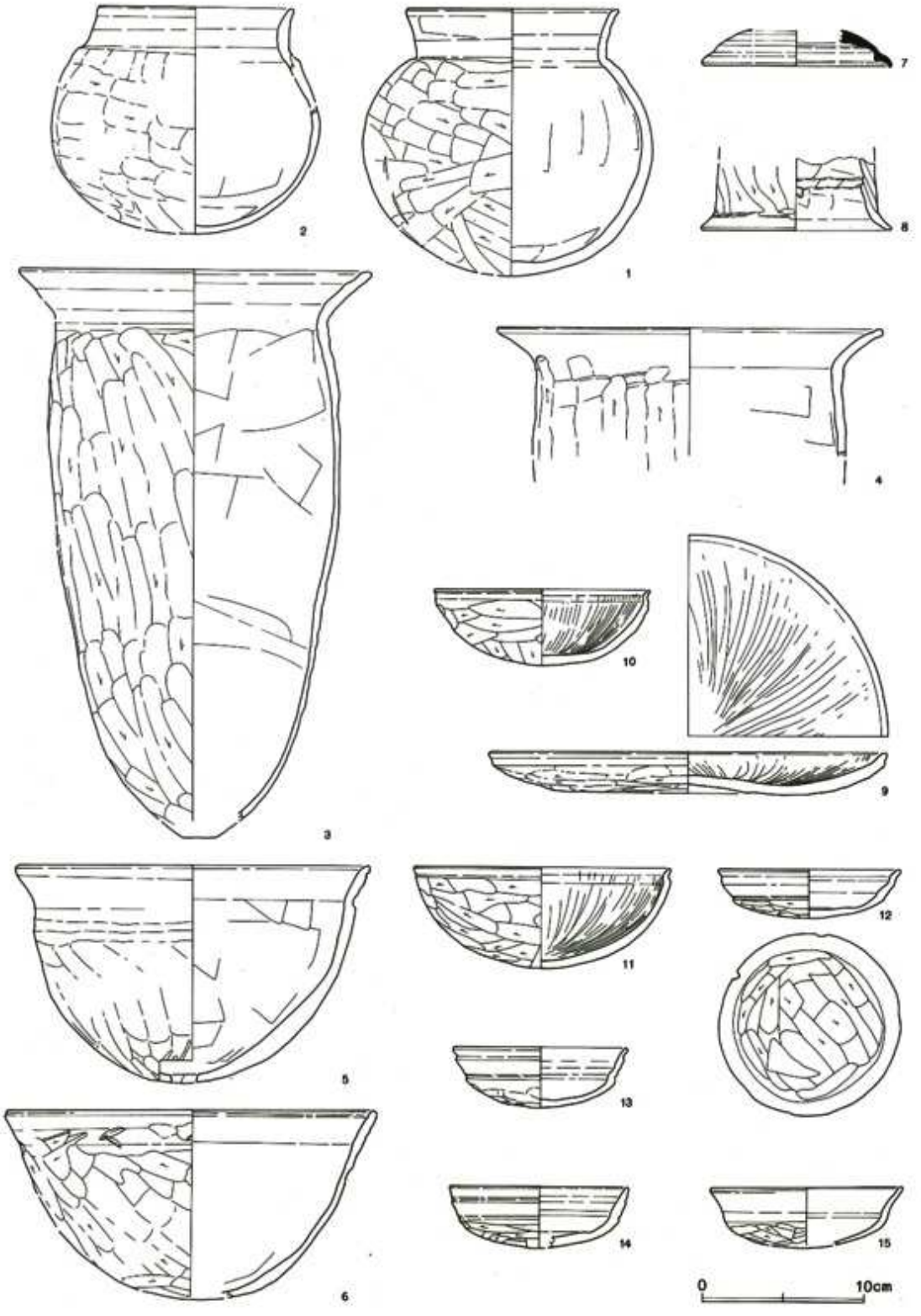


第105 号住居跡土層説明
1. 10YR2/1　黒色土　L・Bブロック多。
2. 10YR4/4　褐色土　ほとんどL。固くしまる。
3. 10YR3/3　暗褐色土　L・B粒多。
4. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　Lブロック多。B粒少。

第105 号住居跡カマド土層説明
a. 10YR4/4　褐色土　主にLでなる。B・C粒含。天井・壁部崩落土層。
b. 10YR3/1　黒褐色土　B・C粒。骨片多。灰層。
c. 10YR3/4　暗褐色土　L・Bブロックからなる。
d. 10YR2/3　黒褐色土　全体に焼土化する。

0　2m

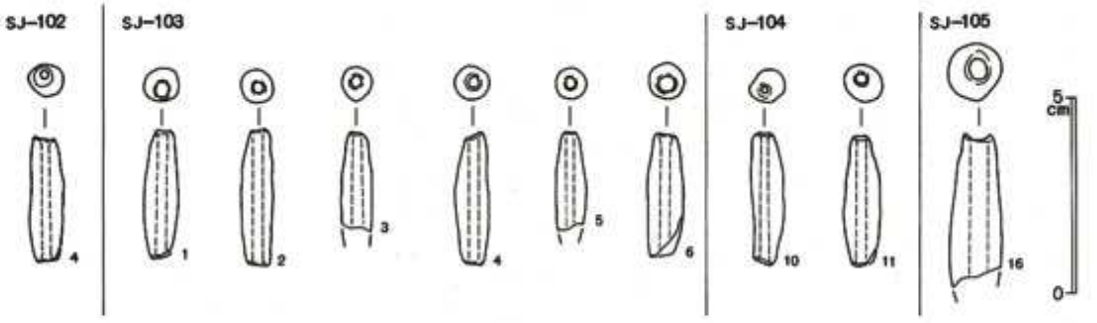
第306図　第105号住居跡



第307図　第105号住居跡出土遺物

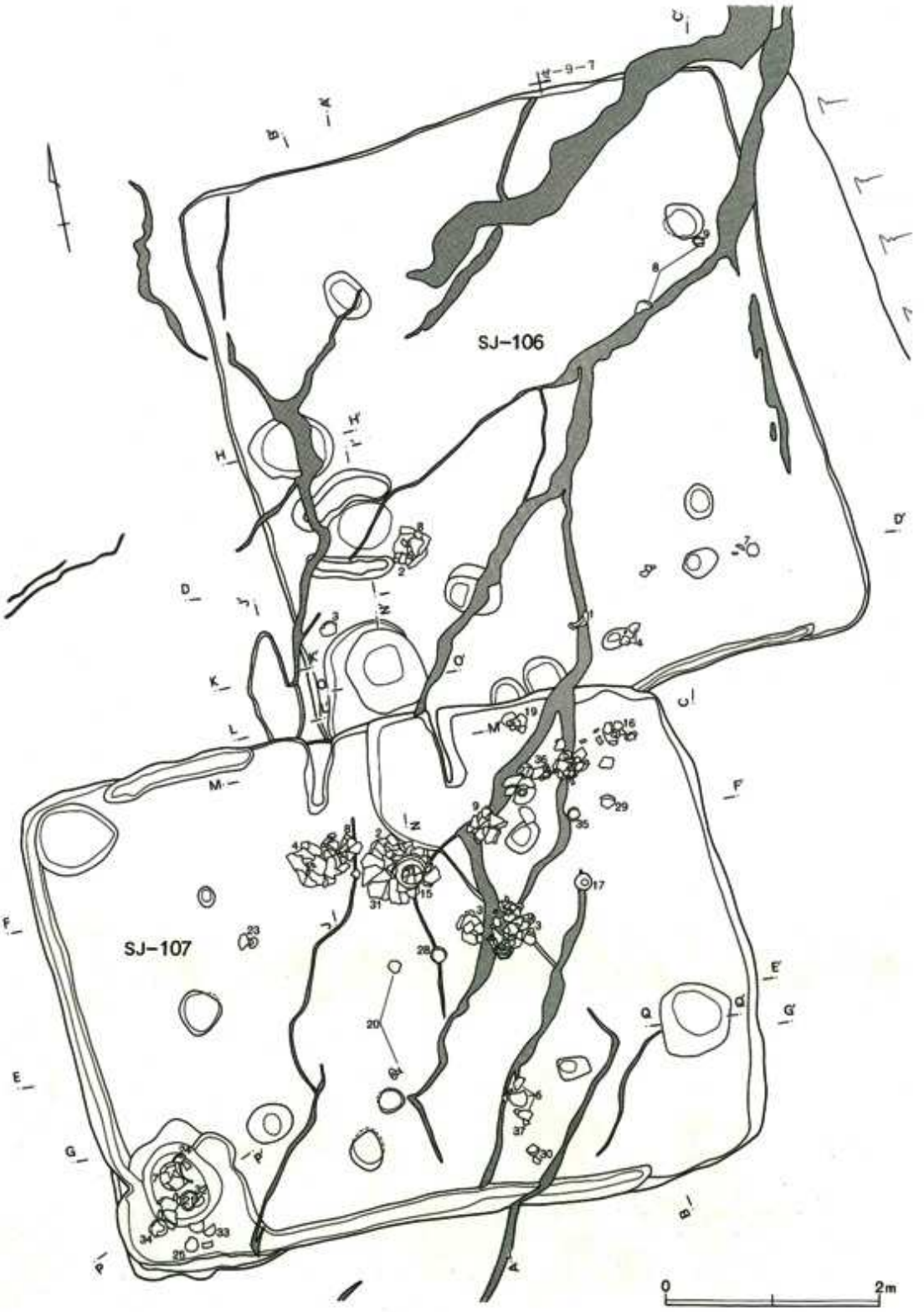
第105号住居跡出土遺物(第307図)

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	小型壺	(12.3)×(14.1)× —	60%	W′+R少+B′多	にぶい黄橙	胴部歪みが強い
2	〃	13.2 × 16.5 × —	60%	W微+粗R+B′多	にぶい橙	
3	甕	21.4 ×(33.7)× —	90%	W′+粗R少+B′	橙	
4	〃	(23.8)×(8.8)× —	口縁片	W+W′+R+粗砂	〃	
5	甑	10.6~11.2× 13.5 ×孔(2.0)	80%	W+W′+粗R微+B′多	〃	全体に歪む
6	鉢?	11.1~11.8×(11.9)× —	80%	W+W′+B少+B′	〃	〃
7	蓋(須恵)	— ×(1.8)×(11.8)	片	W′	灰黄	
8	高坏?	— ×(4.5)×裾(11.8)	脚部片	W+R+B′多	橙	
9	盤	(24.6)× 2.4 × —	40%	W+W′+B	にぶい黄橙	
10	坏	13.2 × 4.7 × —	80%	W+B′多	橙	暗文
11	〃	15.8 × 6.1 × —	90%	W+W′+R+B′多	明赤褐	〃
12	〃	11.1 × 3.1 × —	ほぼ完形	W+(W′+B′)多	橙	
13	〃	10.7 × 3.8 × —	60%	W+W′多+B′	〃	
14	〃	(11.1)× 3.5 × —	40%	W+W′多+B′多	灰黄褐	
15	〃	11.8 × 3.6 × —	60%	W+W′+R+粗B′多	橙	



第308図　第102～105号住居跡出土土錘

住居跡調査風景



第309図　第106・107号住居跡(1)

第106号住居跡(第309～311図)

せ－9－1グリッドを中心に位置し、南西部はわずかに第107号住居跡の壁と覆土を切り込んでいる。激しい噴砂と削平のため、全体の形はだいぶ乱れている。軸長は5.2m×5.6mほどで、この時の面積は約29.1㎡となる。主軸方向はおよそN－95°－Wである。

覆土はほとんど一皮を残すだけといった状態で、確認面から床までは約2㎝が測れるにすぎない。床面は耕作による塡圧のため、覆土と同質化して不明瞭となっている。壁溝も南壁の一部に検出されたにとどまる。

柱穴は住居跡の対角線上において、主柱穴になる4本が検出されている。いずれも直径は30㎝前後で、深さは最大のもの(南西)で約80㎝である。

カマドは西壁の南寄りに設けられている。袖は突堤状の高まりが確認されたことによって、地山が削り出されたものであることが分かる。基部は壁から離れており、まさに「ハ」字状である。燃焼部は明確ではないが、50㎝×40㎝の範囲が赤く焼けている。この部分は床よりも2㎝ほど低くなっている。

貯蔵穴は南西隅部に掘り込まれ、平面は径80×65㎝の楕円形を呈している。横断面は緩いU字形で、床からの深さは約35㎝を測る。

遺物は6の坏が貯蔵穴の覆土中であるほかは、すべて床面上から押し潰された状態で出土している。

第107号住居跡(第309～311図)

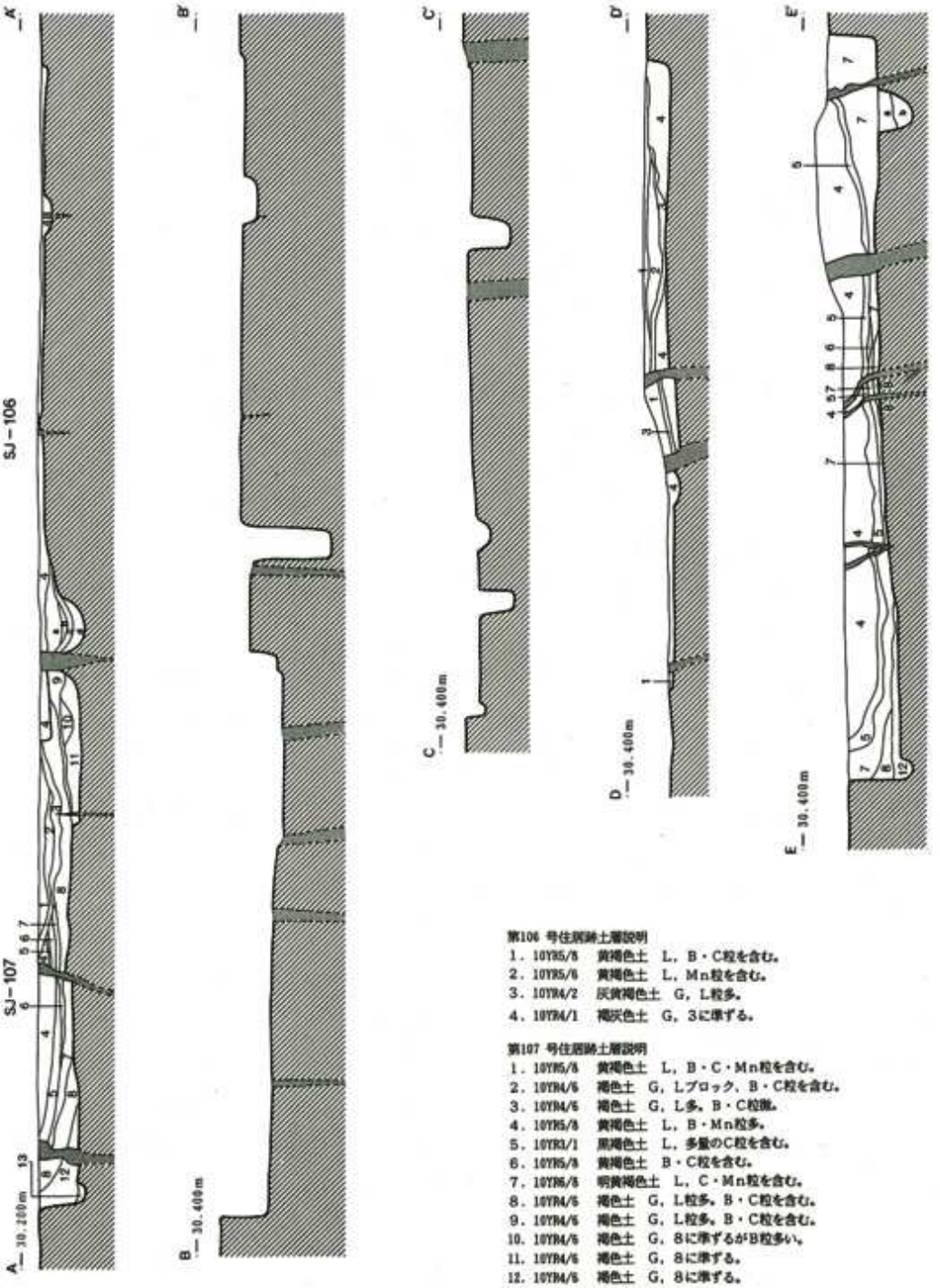
す－9－22グリッドを中心に位置する。北東壁と覆土の一部を第106号住居跡に切られるほか、地割れにより壁や床が著しく損壊している。全体は4.7m×6.3mほどの長方形を呈し、面積約31.2㎡を測る。主軸方向はおよそN－3°－Eを指す。

壁の掘り込みは垂直で、遺構確認面から床までは25㎝～45㎝と開きがある。これは地震により各所で段差が生じたためで、極度に「でこぼこ」である。床面もカマドの周辺で硬さが保たれているにすぎず、他は地盤の捻転のためか、かなり軟質となっている。壁溝は西半部に幅約20㎝、深さ約5㎝で巡っている。

主柱穴は対角線上の4本で、直径約30㎝、深さ約55㎝である。いずれにも柱痕などは観察されなかった。このほかにも数本のピットが検出されており、規模的には主柱穴と同様であった。

カマドは北壁に2基検出された。地割れのために明確とはいえないが、東側のものが新しいと思われる。西側カマドの左袖は除去されたためか、ついに確認できなかった。覆土は住居跡のそれと同じもので、煙道と見えた部分は壁の崩落の可能性がある。東側のカマドは北壁の中央部となるものの、焚き口部分が異様に広く(約115㎝)不自然である。ただし、左袖は西カマドと共有したかたちとなり、両面ともによく焼けている。火床面としては東カマドのほうが焼けており、灰の堆積も認められる。

貯蔵穴は南西隅部に設けられている。上面は110㎝×100㎝、深さ13㎝ほどの浅い平場で、その中央部は径80㎝×72㎝の円形の掘り込みとなる。平場の底面から覆土中位にかけては、甕(7)や脚付椀(21)、坏(24・25)や椀(32・33・34)が出土している。床面には他にも土坑状の掘り込みが2箇所で見られる。



第106 号住居跡土層説明

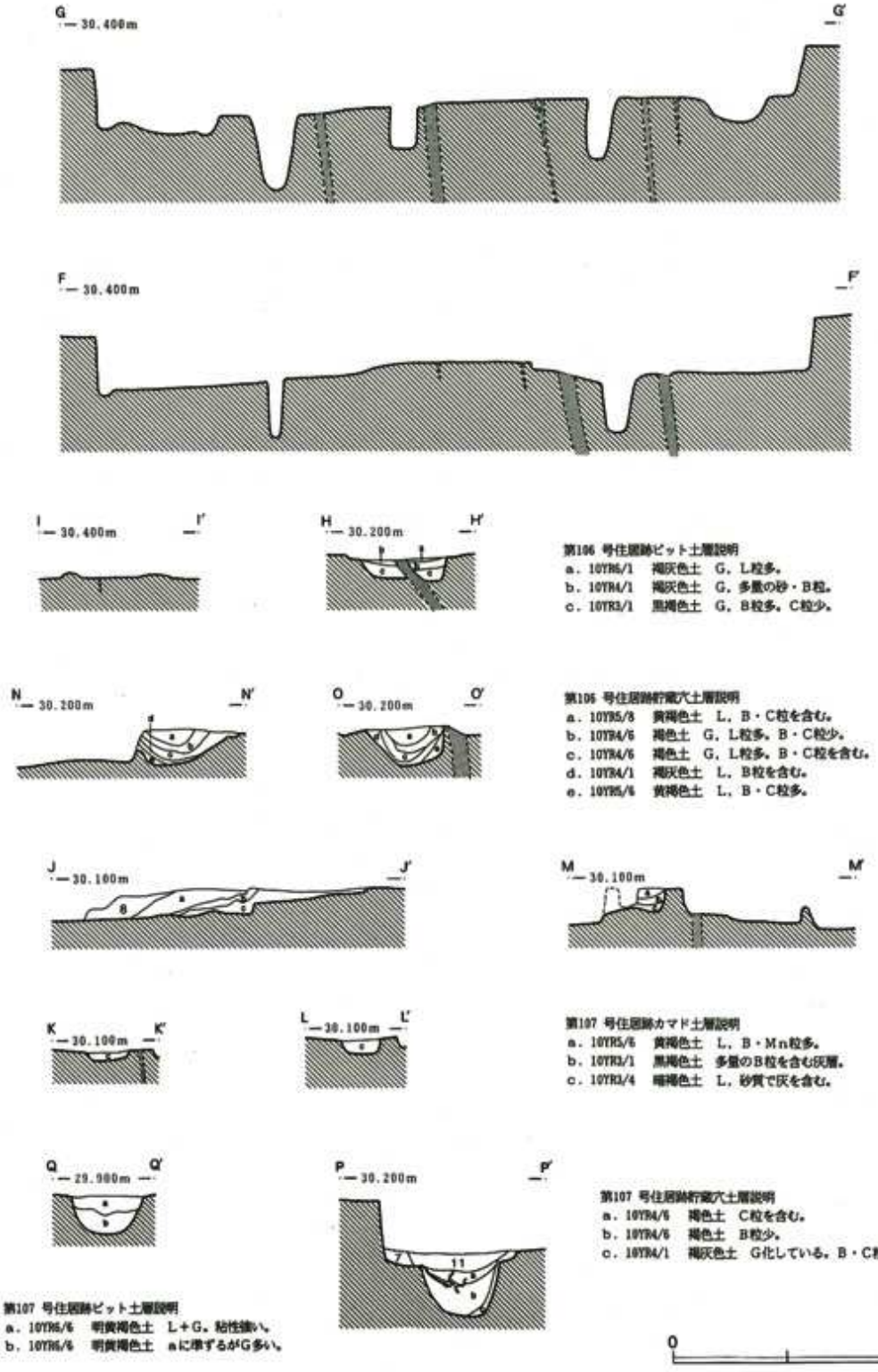
1．10YR5/8　黄褐色土　L，B・C粒を含む。
2．10YR5/6　黄褐色土　L，Mn粒を含む。
3．10YR4/2　灰黄褐色土　G，L粒多。
4．10YR4/1　褐灰色土　G，3に準ずる。

第107 号住居跡土層説明

1．10YR5/8　黄褐色土　L，B・C・Mn粒を含む。
2．10YR4/6　褐色土　G，Lブロック，B・C粒を含む。
3．10YR4/6　褐色土　G，L多。B・C粒微。
4．10YR5/8　黄褐色土　L，B・Mn粒多。
5．10YR3/1　黒褐色土　L，多量のC粒を含む。
6．10YR5/8　黄褐色土　B・C粒を含む。
7．10YR6/8　明黄褐色土　L，C・Mn粒を含む。
8．10YR4/6　褐色土　G，L粒多。B・C粒を含む。
9．10YR4/6　褐色土　G，L粒多。B・C粒を含む。
10．10YR4/6　褐色土　G，8に準ずるがB粒多い。
11．10YR4/6　褐色土　G，8に準ずる。
12．10YR4/6　褐色土　G，8に準ずる。
13．10YR4/6　褐色土　Gからなる。

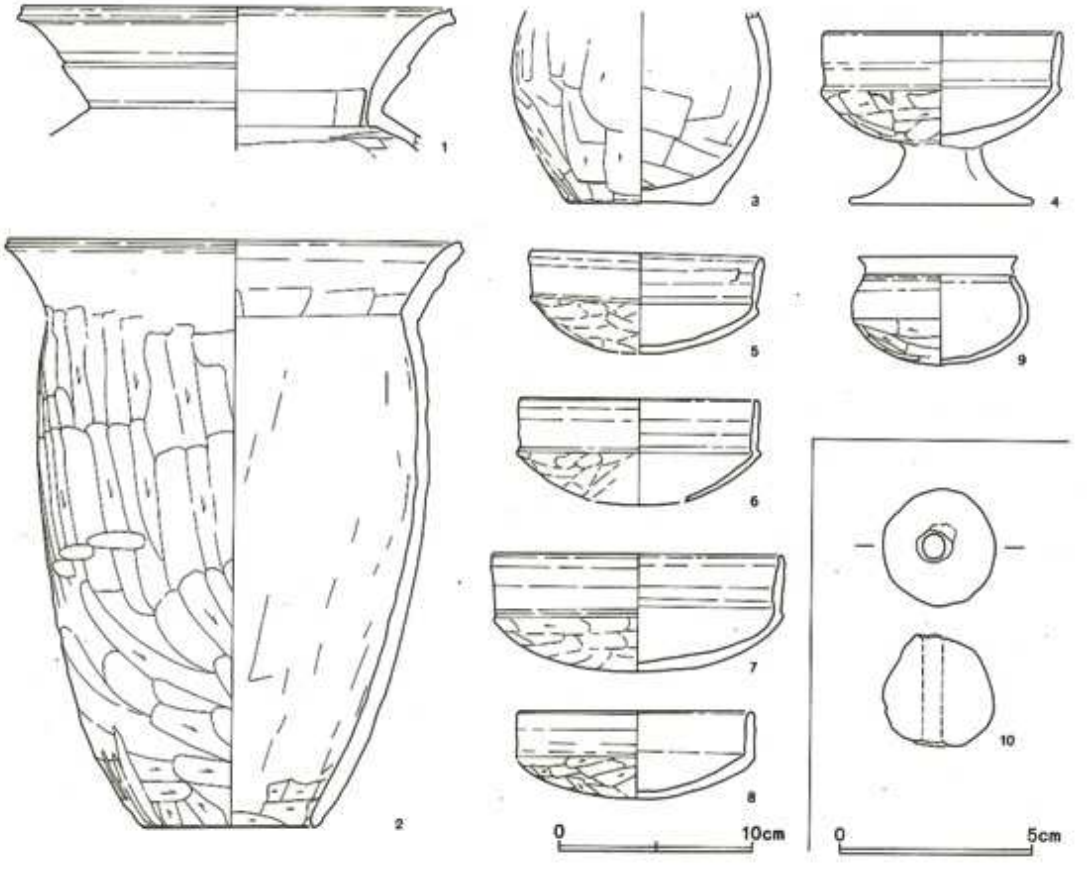
0　2m

第310図　第106・107号住居跡(2)



第311図　第106・107号住居跡(3)

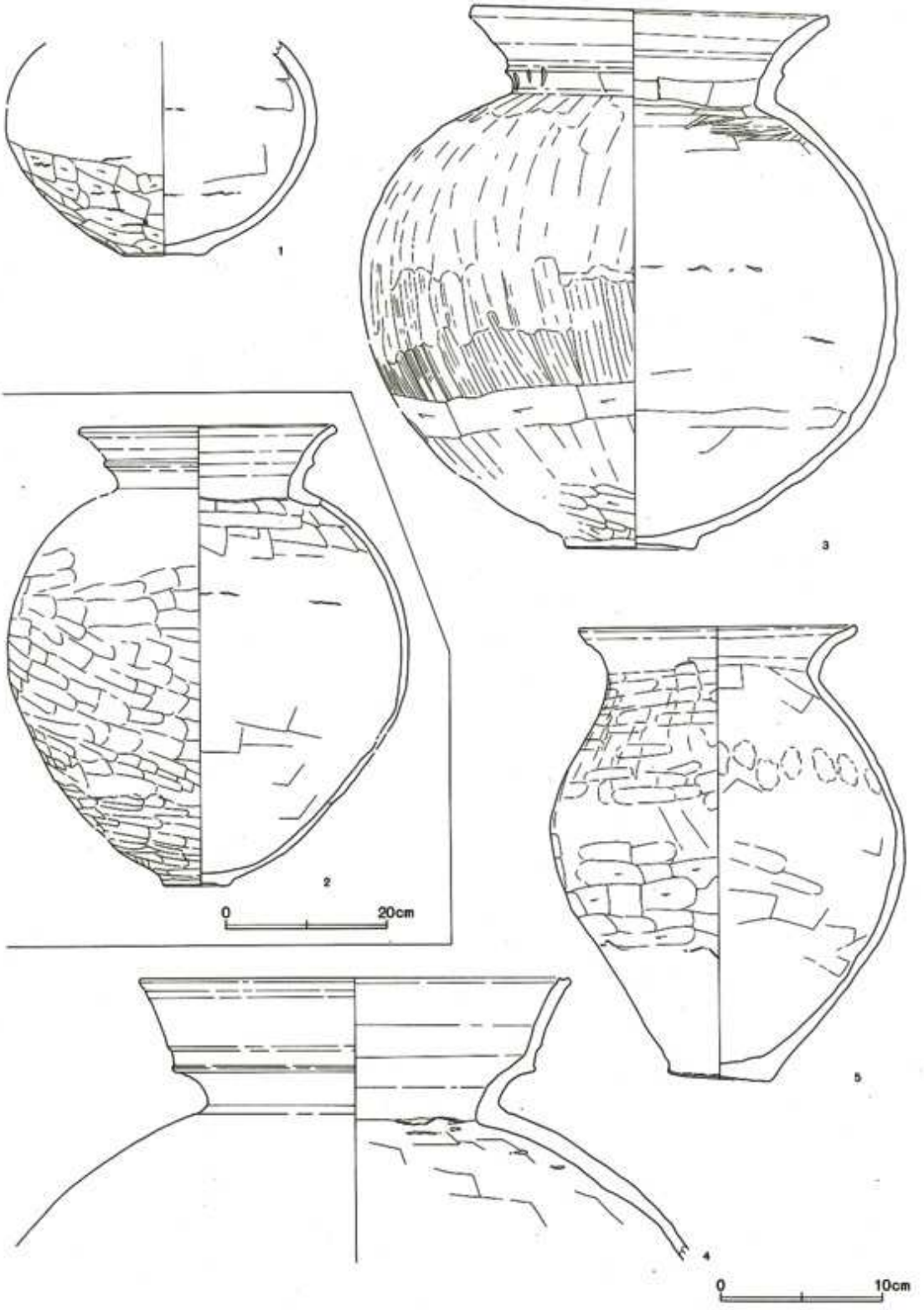
遺物の出土は多量で、住居跡の中央から北東部に集中している。中央のものは床面に接しているが、壁寄りのものはだいぶ浮いている。あたかも、埋没途中で壁外から流れ込んだような感じである。



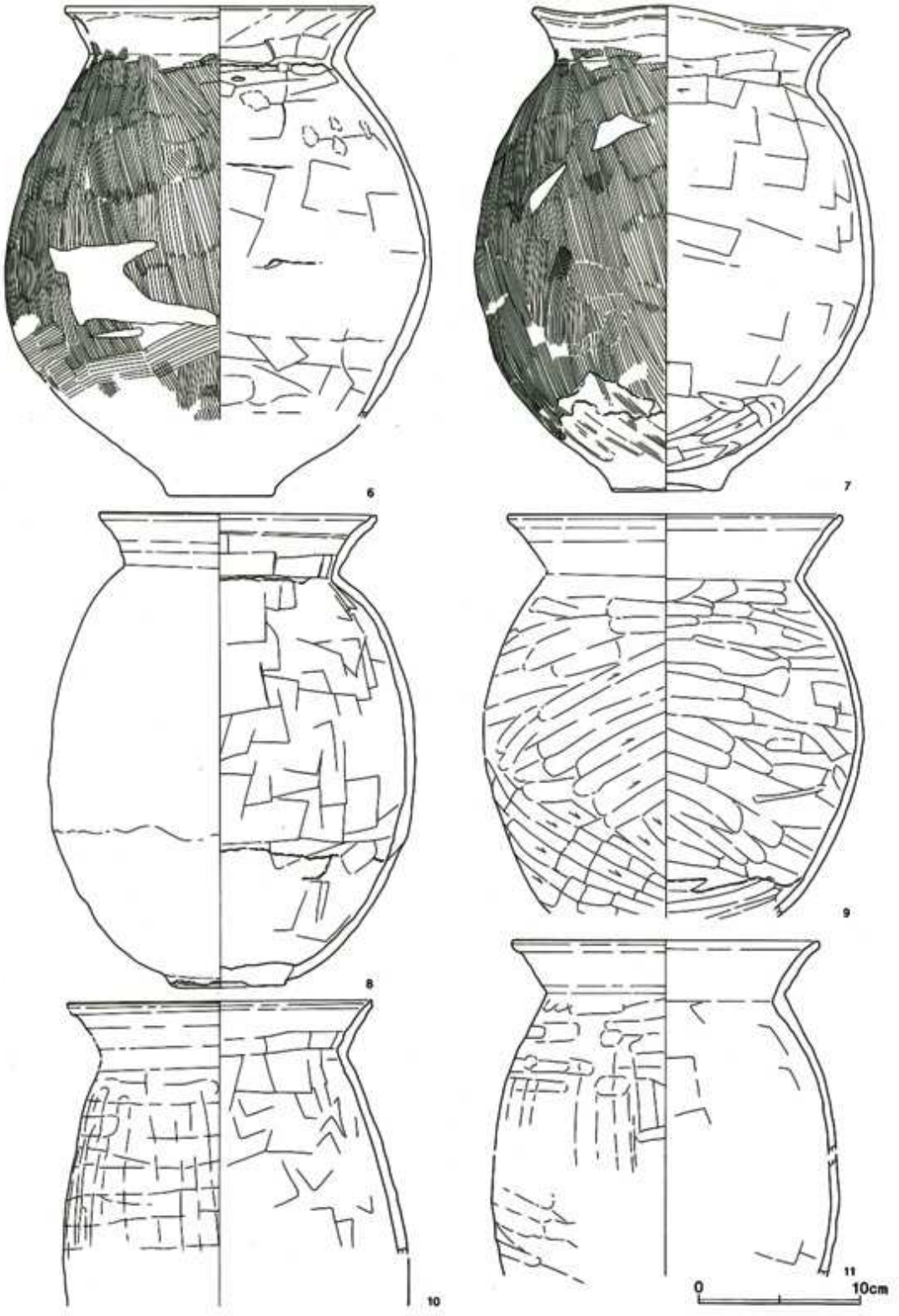
第312図　第106号住居跡出土遺物

第106号住居跡出土遺物(第312図)

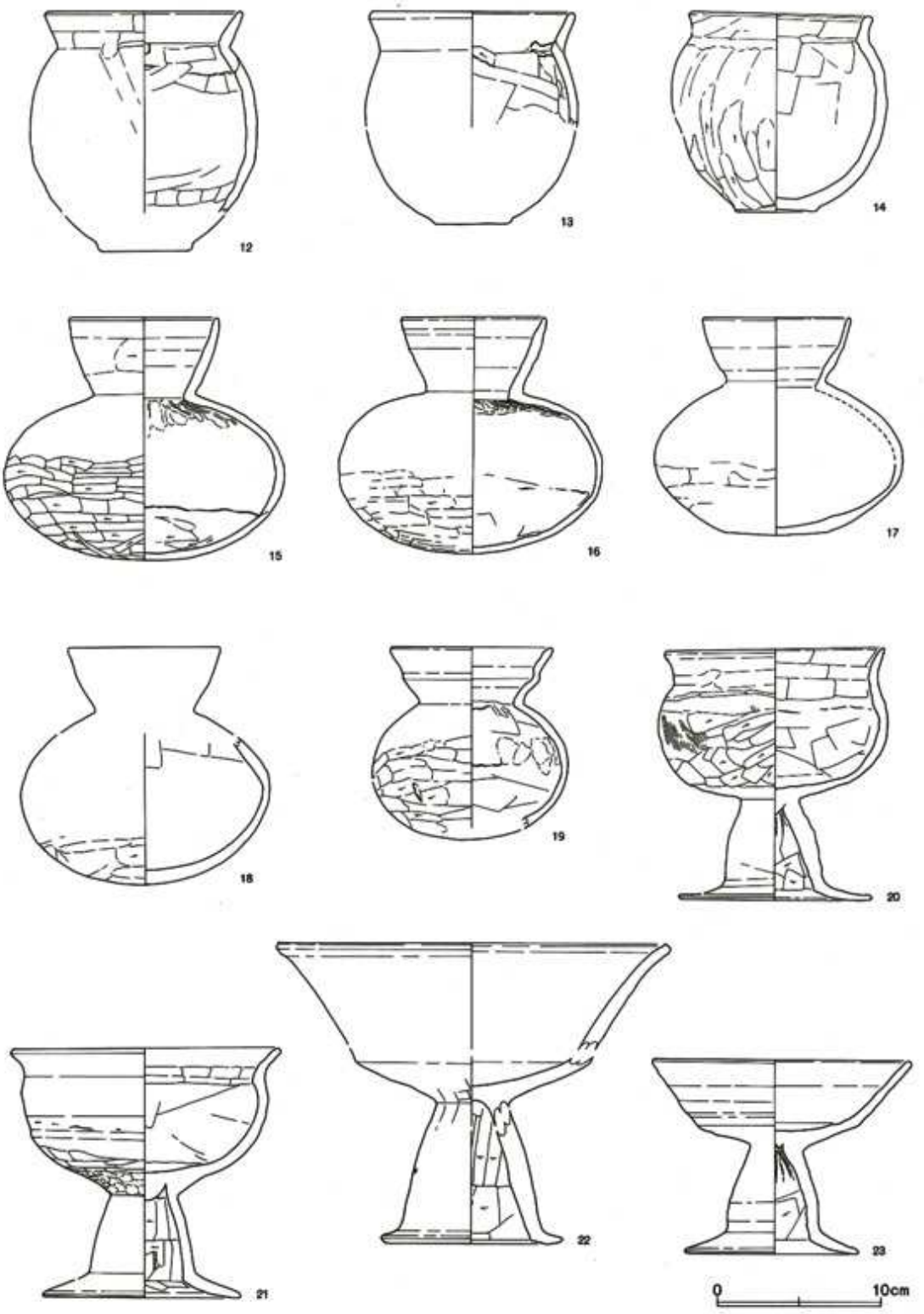
No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	壺	(22.8)×(7.4)×　—	口縁片	粗礫含W多+B′	橙	
2	甑	23.9 × 30.2 ×孔9.2	80%	粗(W+W′)多+B′	〃	
3	小型甕	—　×(9.9)×　7.5	胴部～底部	粗(W+B)+B′	にぶい橙	
4	高坏	12.4 ×(6.4)×　—	坏部80%	W少+粗(W′+B′)+R	橙	
5	坏	(12.4)×　5.0 ×　—	50%	W+粗R多+B′	〃	
6	〃	(12.4)×(5.3)×　—	40%	W微+R+B′	〃	
7	〃	15.3 ×　6.1 ×　—	70%	W+粗W′+R多+B′	〃	
8	〃	(11.6)×　5.7 ×　—	60%	W+粗W′多+B+B′微	〃	
9	碗	7.8 ×　4.7 ×　—	ほぼ完形	W+W′+R少+B+B′	〃	二次口縁



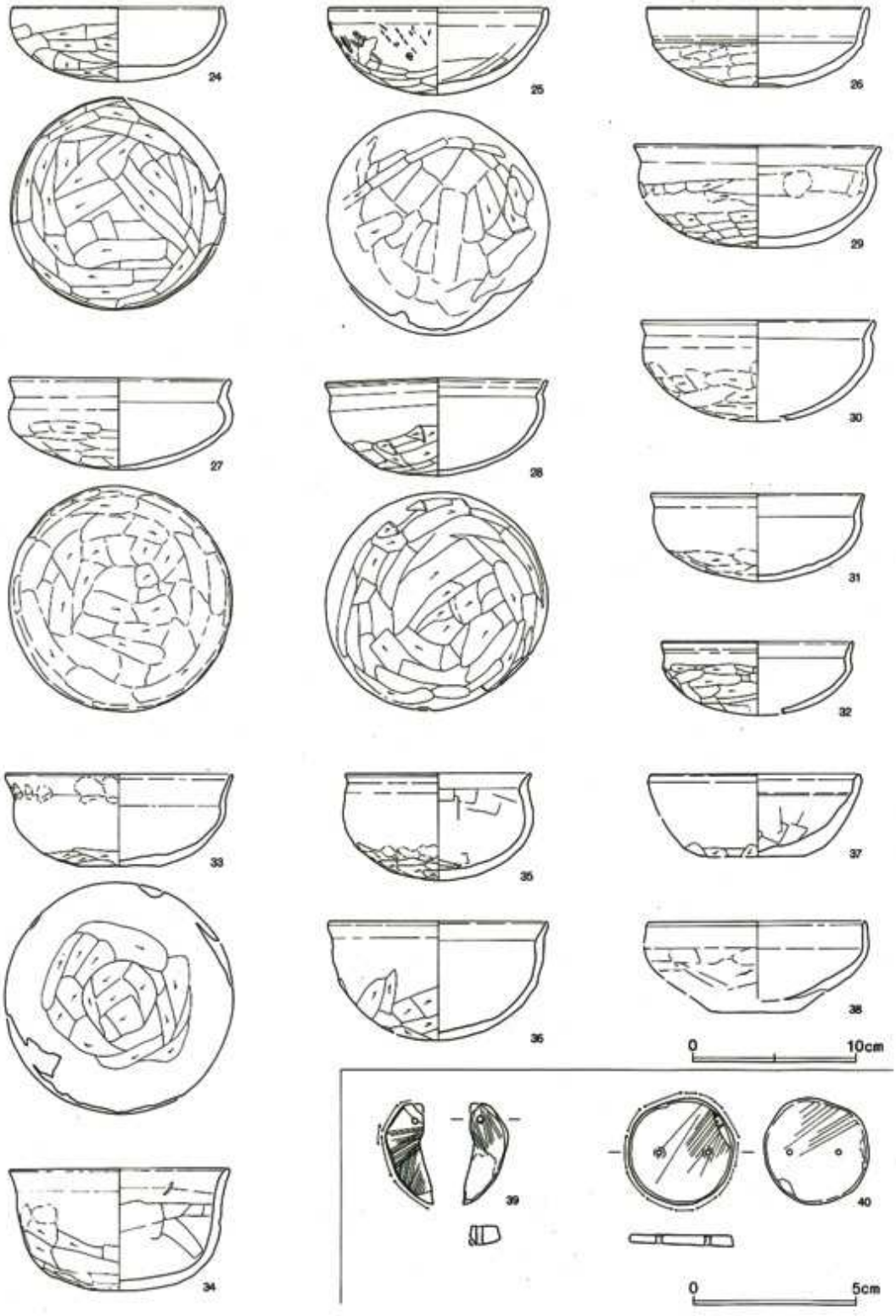
第313図　第107号住居跡出土遺物(1)



第314図　第107号住居跡出土遺物(2)



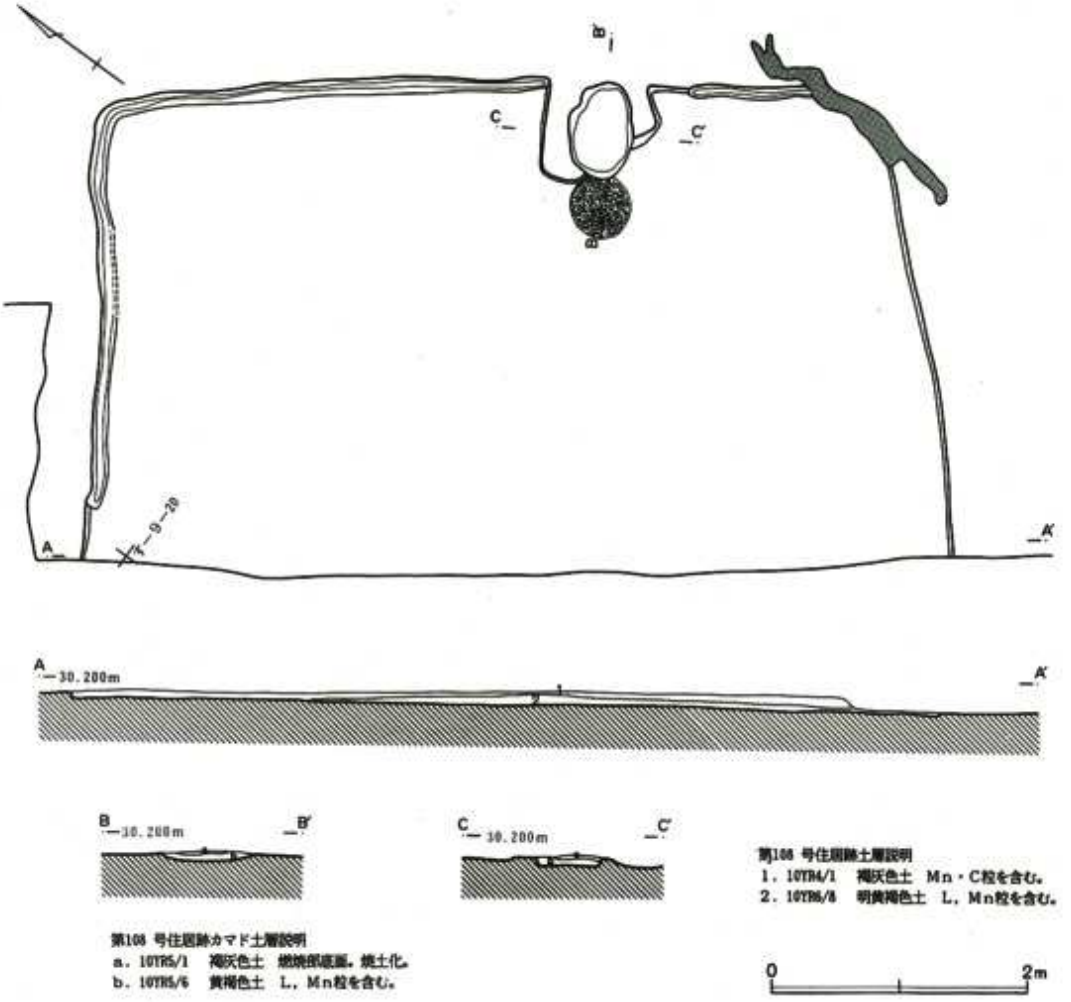
第315図　第107号住居跡出土遺物(3)



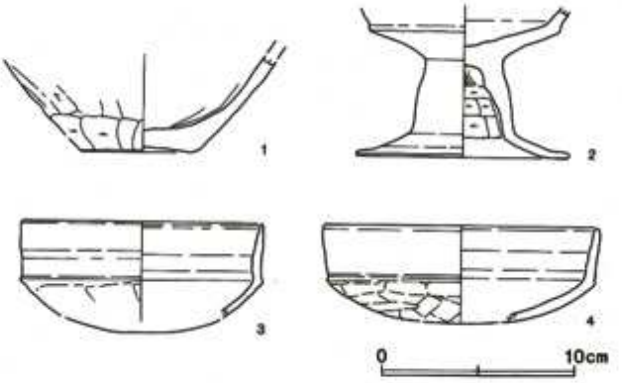
第316図　第107号住居跡出土遺物(4)

第107号住居跡出土遺物（第313・314・315・316図）

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	壺	— ×(13.3)× 4.2	肩部～底部	粗W多+W′+B′微+礫少	橙	輪積部は下位に刻みが施してある
2	〃	32.2 × 56.4 × 8.5	80%	W少+W′+粗R少+B′	明赤褐	
3	〃	22.2 × 33.3 × 8.0	70%	W+W′多+R微+B′	にぶい橙	
4	〃	28.2 ×(17.5)× —	口縁～底部	粗W+W′多+R+B′	橙	
5	甕	17.2 × 27.8 × 6.4	80%	W+粗(W′+B)+B′多	にぶい橙	外面―ヘラ→ヨコナデ
6	〃	19.0 ×(25.8)× —	60%	W+W′多+粗R+B′	〃	
7	〃	18.6～19.6× 29.0 × 7.0	90%	粗(W+W′+B少)+R+B′	にぶい黄橙	口縁歪む
8	〃	16.9 × 28.8 × 7.4	95%	W多+W′+R少+B′	橙	ヘラ削り→おさえ状ナデ
9	〃	19.8 ×(25.1)× —	40%	径1～5のW+W′+R多	にぶい黄橙	他になく胎土中礫粗い 外面―ヘラ削り→ナデ(ヘラ下,指上)
10	〃	18.7 ×(19.6)× —	50%	粗(W′+B+B′)	〃	
11	〃	(19.0)×(20.6)× —	50%	粗(W′+B)多+B′	〃	SJ106からの混入か 歪みが強い
12	小型甕	(12.1)×(12.2)× —	口縁～胴部片	W+W′+R+粗B多	にぶい橙	外面―磨耗
13	〃	(12.6)×(7.0)× —	口縁～胴部破片	W+W′多+B′	明赤褐	
14	〃	9.6 × 12.1 × 4.8	70%	粗砂礫を多く含みザラつく	にぶい赤褐	
15	坩	9.1 × 14.7 × —	ほぼ完形	細(W+W′+B′)	明赤褐	
16	〃	9.0 × 14.2 × —	90%	細(W+W′+B′)+粗R	橙	
17	〃	9.1 × 13.0 × 6.2	80%	W+W′多+R	〃	
18	〃	— × 15.2 × —	肩部～底部	W+W′+B+B′	〃	
19	〃	9.8 ×(11.2)× —	70%	W+W′微+B少+B′	〃	
20	脚付碗	13.2 ×15.5×(裾11.6)	70%	W+W′+R多+B′少	〃	
21	〃	16.3 × 15.0 ×裾12.5	80%	W+W′+R微+B+B′多	〃	
22	高坏	24.0 ×(18.3)×裾11.2	40%	細(W+W′+B′多)	明赤褐	
23	〃	15.6 × 12.0 ×裾10.4	70%	W微+W′+R少+B′	橙	
24	坏	12.8 × 4.5 × —	90%	W′多+R+B	〃	
25	〃	13.5 × 5.3 × —	80%	(W+R)多+B′微	〃	
26	〃	(13.6)× 4.8 × 3.6	40%	W微+R+B+B′	〃	外面―ヘラ削り→ナデ
27	碗	13.4 × 5.7 × —	完形	W少+微細W′多+粗R多	〃	
28	〃	13.6 × 6.0 × —	ほぼ完形	W+W′+B′+粗砂	にぶい橙	
29	〃	(14.8)× 6.2 × —	60%	W+W′+粗砂(R+B)多+B′微	橙	
30	〃	14.3 ×(6.1)× —	60%	粗W+W′微+R+B′	〃	
31	〃	13.0 × 5.4 × —	70%	W+W′+R+B+B′	〃	磨耗著しい、二次焼成
32	〃	(11.8)×(4.4)× —	40%	W+W′+粗R多+B′	〃	
33	〃	13.9 × 5.8 × 4.2	80%	W+W′+粗R+B′	〃	
34	〃	13.4 × 7.4 × —	90%	(W+B)多+W′+R+B′微	にぶい橙	器壁歪む
35	〃	11.3 × 6.5 × —	70%	W+W′多+粗R+B	橙	
36	〃	(14.0)× 7.4 × —	60%	礫W多+R+B′	〃	径1～2mm小礫多く含み器表より突出
37	坏	(12.8)× 5.1 × 6.0	50%	W微+R+粗B+B′	明赤褐	
38	〃	13.4 ×(4.7)× —	40%	W+W′+R	橙	



第317図　第108号住居跡



第318図　第108号住居跡出土遺物

第108号住居跡(第317図)

す－9－4グリッドを中心に位置する。南西部は調査区外となるほか、床面直上までを削平により失っている。軸長は6.64m×？で、全体は(長)方形を呈するものと思われる。主軸の方向はおよそN－54°－Eである。

床までは最大でも4cm弱しかなく、覆土も耕作による攪乱をかなり受けている。床面は軟質で、部分的に砂となっている。壁溝は北側の2壁に幅約10cm、深さ約3cmで巡っている。

カマドは北東壁の中央、やや南寄りに設けられる。「ハ」字状に削出される袖は、右袖が削平のためだいぶ短い。燃焼部は径75cm×50cmほどの楕円形で、火床面は床より約3cm低くなっている。覆土中から坏の破片(3)が出土している。

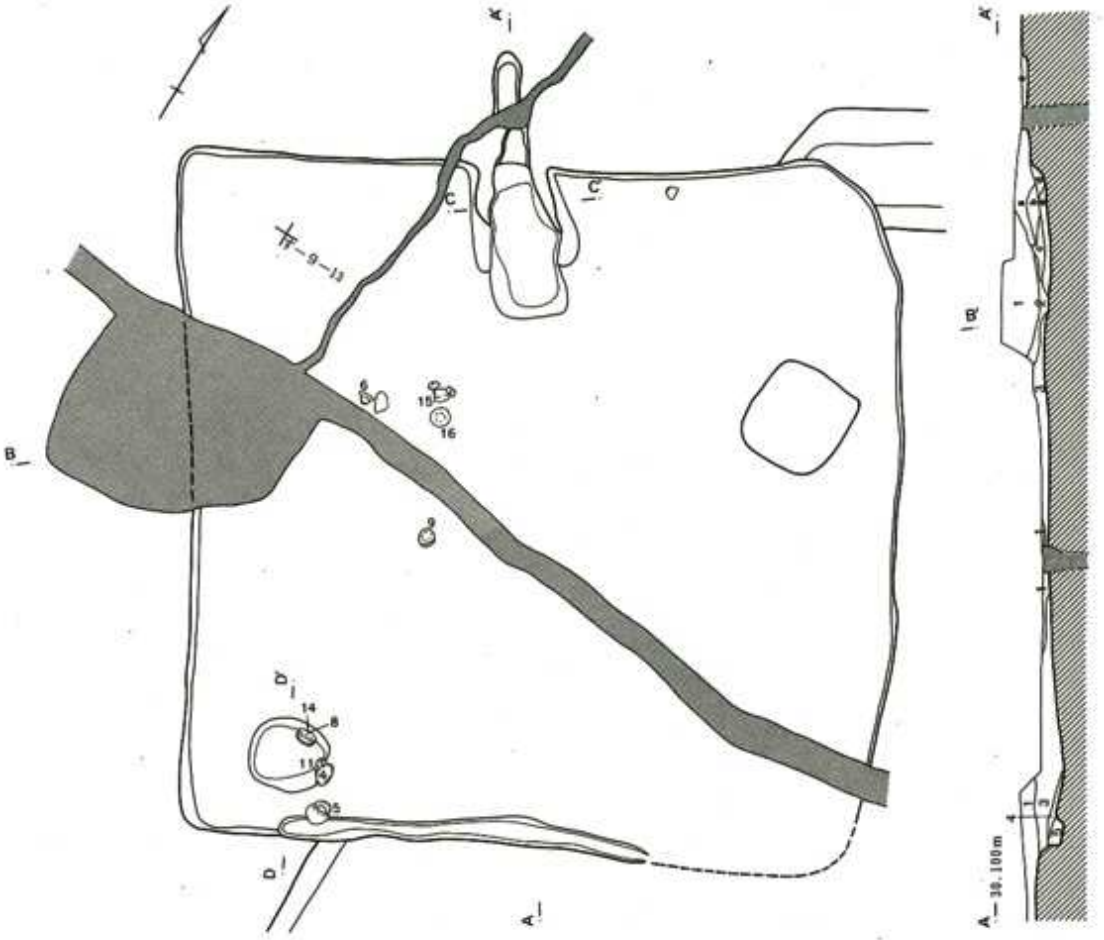
貯蔵穴や柱穴などは検出されなかった。

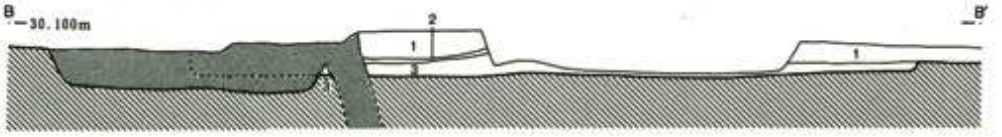
遺物はいずれも小片で、カマド周辺から見いだされている。

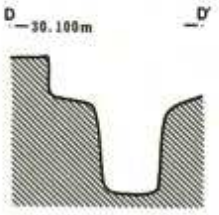
第108号住居跡出土遺物(第318図)

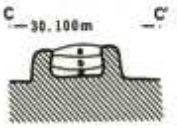
No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	甕	－ ×(5.1)× 5.8	底部	粗W＋W′＋B′多	にぶい橙	
2	高坏	－ ×(7.8)×裾(11.2)	20%	粗W少＋W′＋粗R少＋B′	橙	
3	坏	(12.5)×(4.8)× －	口縁50%	W＋W′＋R微＋B′	〃	
4	〃	14.2 ×(4.9)× －	40%	W微＋R多＋B′	にぶい橙	

水没した埋没河川









第109 号住居跡カマド土層説明
a．10YR5/1　褐灰色土　L，Bブロック多。
b．10YR5/1　褐灰色土　L粒を良く含む。
c．2.5YR5/8　明赤褐色土　Bブロックでなる。天井・壁部崩落土層。
d．10YR4/3　にぶい黄褐色土　L，B・C粒少。
e．10YR4/1　褐灰色土　灰層。

第109 号住居跡土層説明
1．10YR5/2　灰黄褐色土　現耕作土。浅間A軽石多。
2．10YR4/1　褐灰色土　B・C粒を含む。
3．10YR5/1　褐灰色土　L，B粒と多量の砂を含む。
4．10YR4/1　褐灰色土　G，L粒多。
5．10YR4/1　褐灰色土　G，L粒多。

0　2m

第319図　第109号住居跡

第109号住居跡(第319・320図)

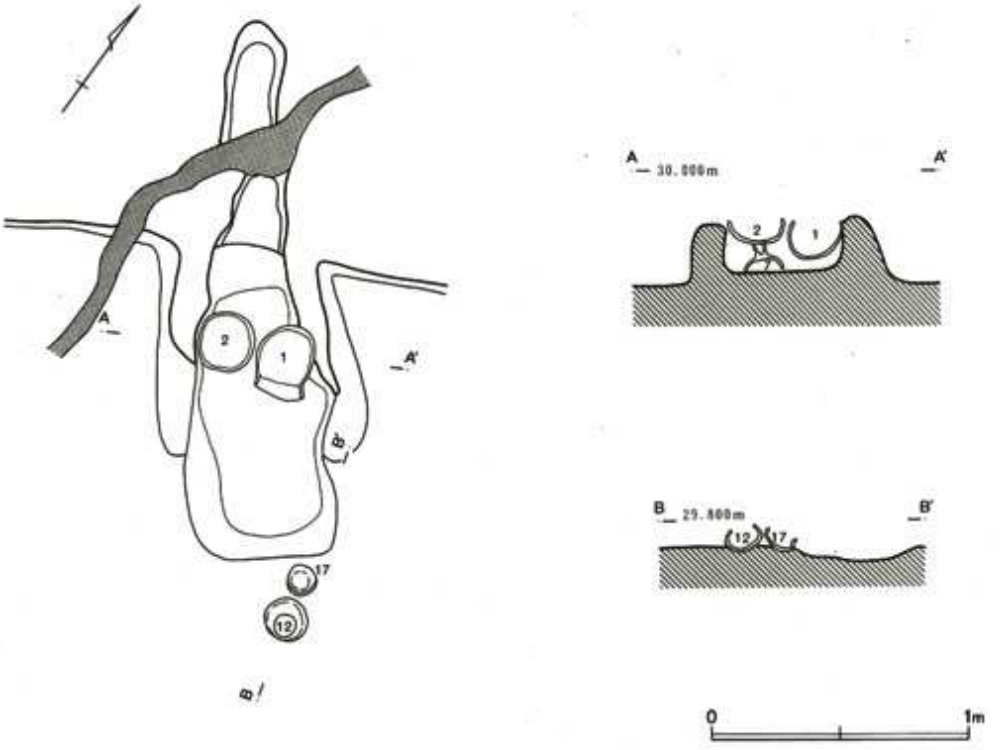
す－9－7グリッドを中心に位置する。南東の隅部は第110号住居跡と重複するはずであるが、この部分はともに削平で消失しており、その関係は確認できなかった。また、第14・15号溝(時期不詳)に覆土を掘り込まれている。全体は5.2m×5.5mの長方形を呈し、面積約28.6m²を測る。主軸の方向はおよそN－33°－Wを指す。

床は概ね平坦で、東から西へ向けてわずかに傾斜している。中央部には東西方向に太い噴砂の亀裂が走り、巨大な噴き溜りが壁の一部を破壊している。壁溝は南東壁で部分的に検出された。

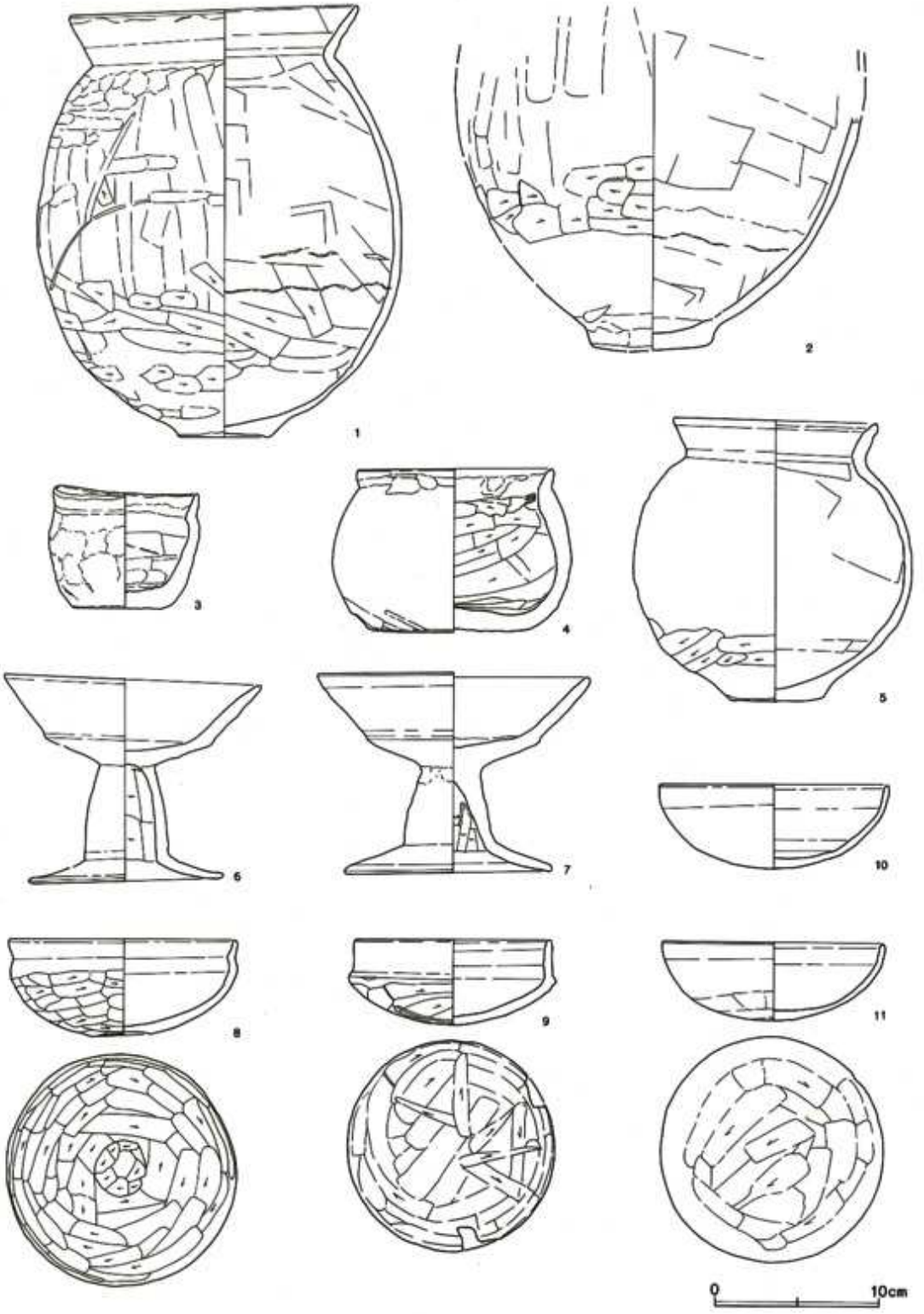
カマドは北西壁の中央に設けられている。袖は「ハ」字状に削出され、燃焼部を長さ約120cm、幅約52cmの長方形に画している。火床面は床よりも4cmほど低く、直上には灰が厚く堆積している。燃焼部のやや奥部には、使用時の状況を保つと思われる遺物の出土がある。まず、火床面の左袖寄りには高坏(7)が逆位に据えられ、その上に甕(2)が袖に密着して乗せられる。この横にも甕(1)が置かれるが、これは先の甕と右袖の間に嵌め込まれるため、かなり浮いた状態になっている。このほか、焚き口部の床面には、2個体の椀(12・17)が置かれている。煙道は地割れで分断し、ややズレも生じている。現状では幅約20cm、長さ約96cmの溝状で、底面は緩やかに立ち上がっている。

貯蔵穴は南の隅部に備わり、径62cm×57cm、深さ約83cmを測る。横断面は円筒形を呈し、肩部より小型の広口壺(4)と小型甕(5)、坏(11)、椀(8・14)が出土している。

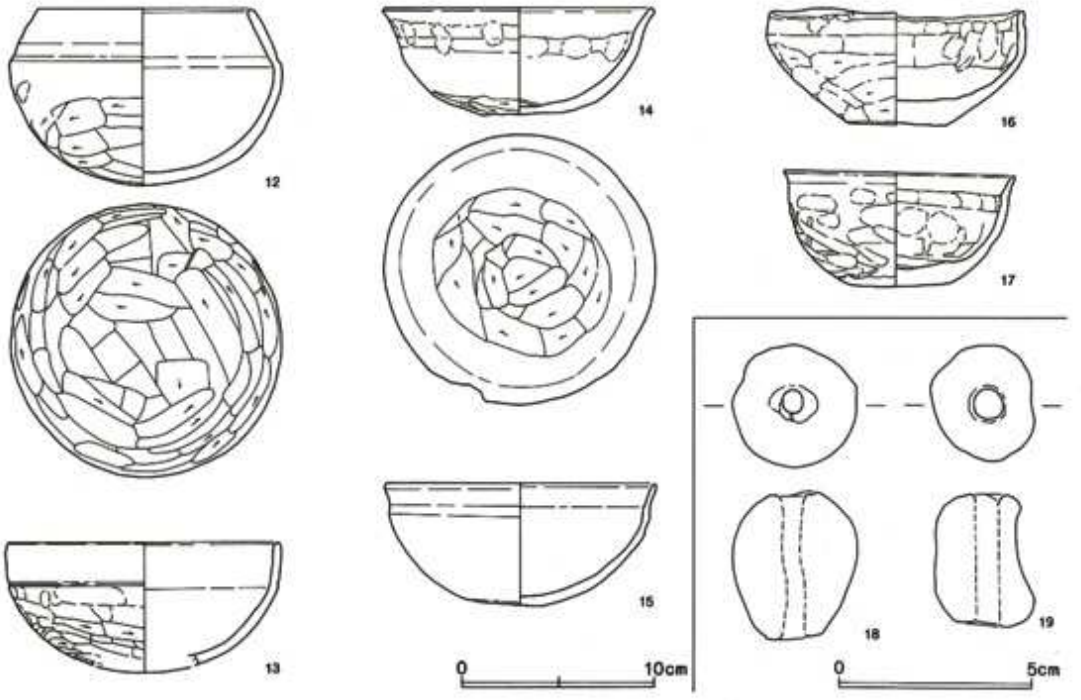
遺物は上記のほか、中央部の床面直上より高坏(6)や椀(15)、坏(16)などが出土している。



第320図　第109号住居跡カマド



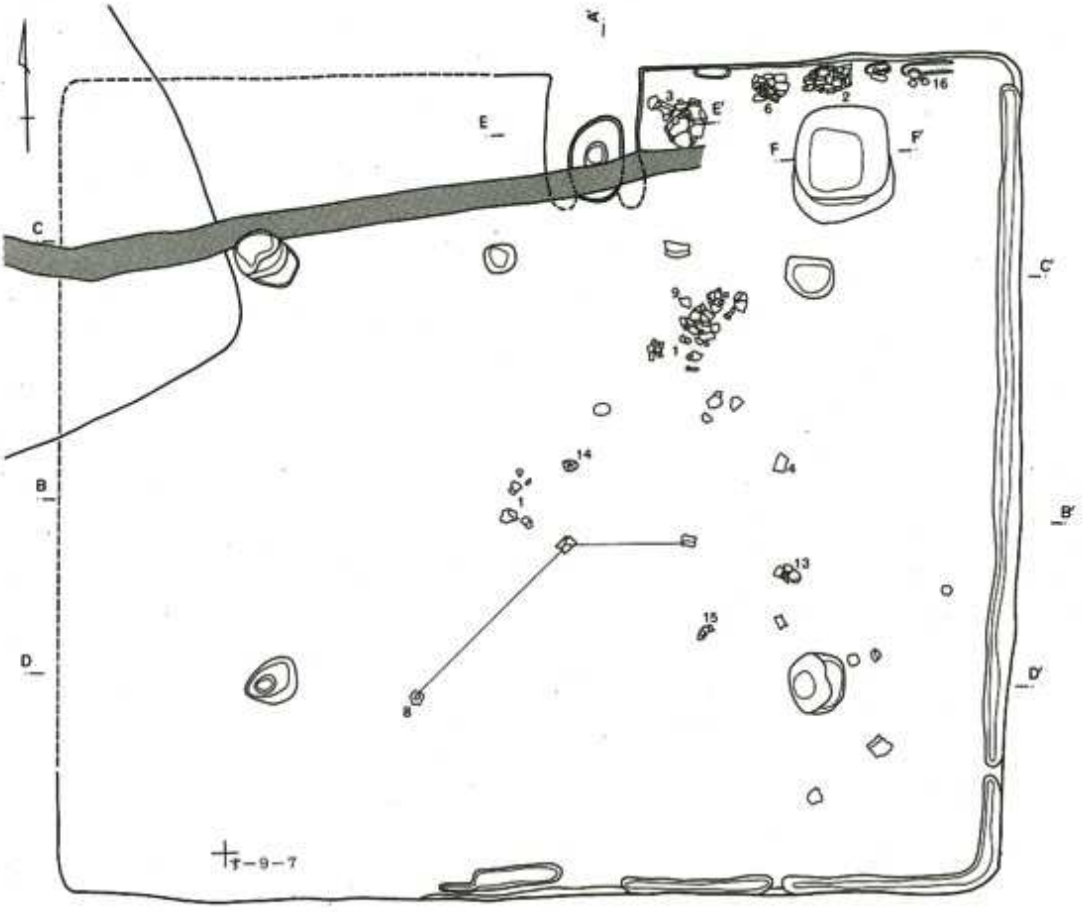
第321図　第109号住居跡出土遺物(1)

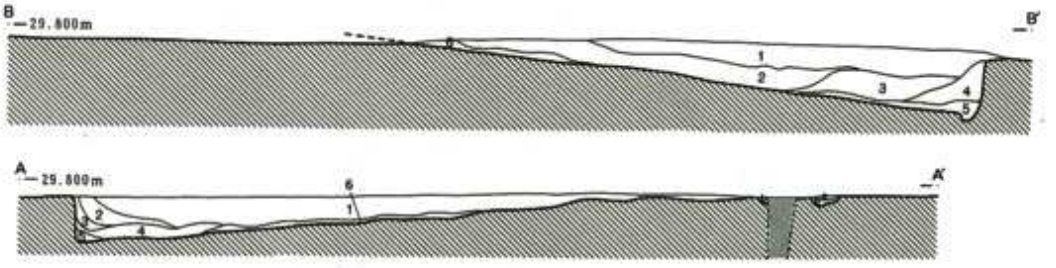


第322図　第109号住居跡出土遺物(2)

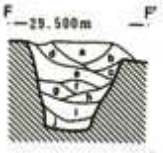
第109号住居跡出土遺物(第321・322図)

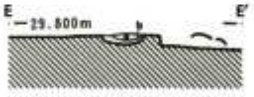
No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	17.6 × 26.0 × 6.0	70%	粗W+W′+粗R+B′	にぶい黄橙	外面一下部に横方向ヘラ削り
2	〃	— ×(19.9)× 7.0	胴下半部	W+粗W′多+R+B′	〃	〃
3	小型壺	8.8 × 7.5 × 5.2	90%	W+W′+粗R+B	にぶい赤褐	口縁やや歪む
4	壺	11.2 × 10.1 ×10.2	80%	W+細W′多+R+B	〃	口縁歪む
5	小型甕	12.4 × 16.8 × 5.6	90%	粗W′+R+B′	にぶい橙	外面一ヘラ削り→ナデ 下部一ヘラ削り
6	高坏	(16.0)× 12.3 ×裾(11.6)	60%	W多+W′	橙	
7	〃	16.6 × 12.4 ×裾12.7	80%	粗W多+W′+B′	〃	
8	瓶	13.9 × 5.7 × 3.2	ほぼ完形	W多+W′+R+B′	〃	
9	坏	12.0 × 5.1 × —	80%	W多+W′+粗R多+B′微	〃	
10	〃	14.0 × 5.3 × —	完形	W+粗R多+B′多	〃	磨耗著しく外面ヘラ削り だが底跡不明瞭
11	〃	13.6 × 4.9 × —	〃	(W+B)少+粗R多+B′多	〃	磨耗著しい
12	瓶	12.8 × 9.1 × —	〃	(W+W′)多+R+B′微	〃	
13	坏	(14.2)×(6.3)× —	60%	W+W′+B′	明赤褐	
14	瓶	14.0 × 5.4 × —	ほぼ完形	W+W′+粗R+B′	にぶい黄橙	
15	〃	14.0 × 6.2 × 3.8	80%	W微+R多+B+B′	にぶい橙	磨耗著しい 外面一横から斜めのヘラ削り？
16	坏	13.3 × 6.1 × 5.0	完形	粗W多+W′+R+B′多	橙	器面荒れる
17	瓶	12.0 × 6.0 × 7.2	90%	細(W+W′)多+R+B′	明赤褐	





第110 号住居跡土層説明（土色帖不用）
1．暗灰褐色土　B・C粒多。
2．暗黄褐色土
3．暗黄褐色土　多量のBブロックを含む。
4．明黄褐色土　B粒多。
5．暗灰色土　しまり弱い。
6．暗灰色土　B・C粒微。



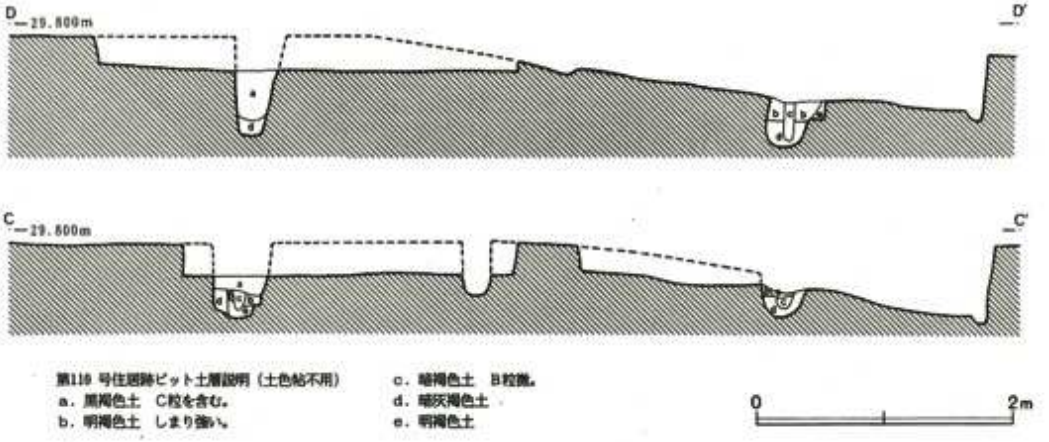


第110 号住居跡カマド土層説明（土色帖不用）
a．暗灰色土　灰層。
b．黄赤褐色土　燃焼部底面。赤焼化。

第110 号住居跡貯蔵穴土層説明（土色帖不用）
a．暗褐色土　Lブロック・C粒多。
b．明灰褐色土
c．灰褐色土　C粒多。
d．灰褐色土　Lブロック多。
e．暗灰褐色土　Fe粒を含む。
f．暗灰色土　しまり弱い。
g．暗灰褐色土　eに準ずる。Fe粒多い。
h．暗灰色土　fに準ずる。C粒を含む。
i．暗灰色土　hに準ずる。しまり弱い。
J．黒褐色土　C粒多。

0　2m

第323図　第110号住居跡(1)



第324図　第110号住居跡(2)

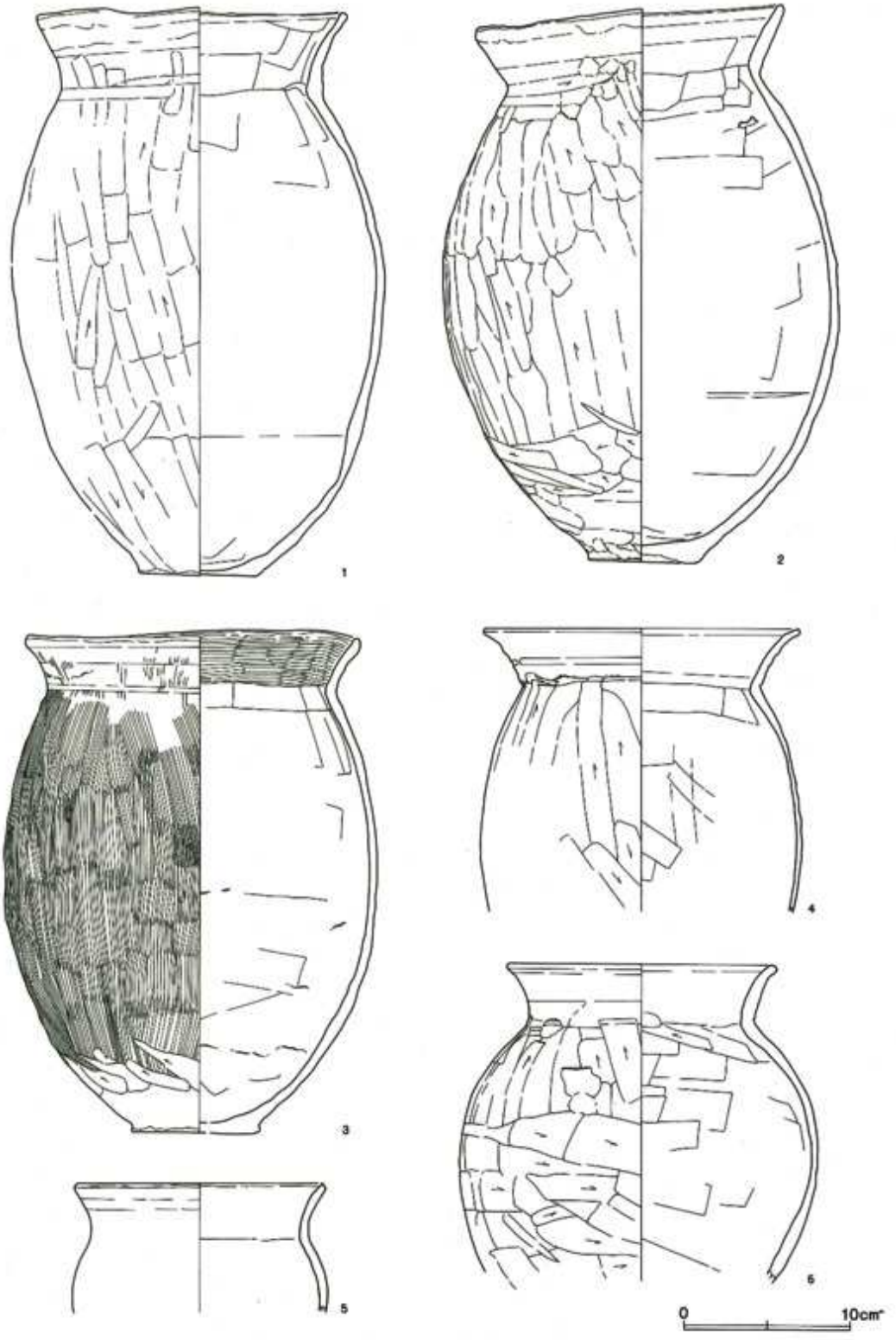
第110号住居跡出土遺物(第325・326図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	18.4 × 33.9 × 7.0	70%	W+粗W′多+R+B′	にぶい橙	
2	〃	18.3 × 33.0 × 6.8	90%	W微+粗W′多+R+B+B′	にぶい褐	外面ーヘラナデ状削り
3	〃	20.0 × 29.9 × 7.2	80%	W+W′+R+B+B′微	にぶい橙	外面ーハケ目
4	〃	19.0 ×(17.1)× ―	口縁～胴部片	粗W′多+R+B′	橙	
5	小型甕	(14.8)×(7.7)× ―	口縁片	W+W′+R少+B	〃	磨耗著しく外面のヘラ削り不明瞭
6	甕	16.2 × 19.1 × ―	60%	W微+W′+R+B+B′	にぶい橙	
7	壺	(28.2)×(6.3)× ―	口縁片	細極(W+W′+B)	橙	
8	〃	(14.4)×(7.4)× ―	口縁～頸部⅓	W+粗W′+R+B	〃	
9	甑	(24.0)×(11.0)× ―	口縁片	細(W+W′+R+B′微)	にぶい黄橙	外面ータテヘラ削り→ヨコナデ
10	坩	9.4 ×(6.9)× ―	口縁～頸部	W+W′+B′	にぶい橙	
11	高坏	― ×(4.3)× ―	頸部片	細極(W′+R微+B)	橙	外面ーヘラ削り→ナデ 内面ーナデ
12	〃	― ×(6.5)× ―	〃 片	W+W′	にぶい橙	
13	坏	(15.4)×(7.0)× ―	40%	W+W′+B′多	橙	
14	〃	(15.0)× 6.8 × ―	40%	細W+W′+細B′多	〃	
15	〃	(14.4)× 6.7 × ―	40%	W+粗W′+B′	〃	磨耗著しい
16	〃	(12.7)× 5.6 × ―	60%	W微+R+B+B′	にぶい橙	
17	〃	(12.6)× 6.2 × ―	50%	W+W′+B′	橙	
18	〃	12.6 × 5.3 × ―	70%	W微+R+粗B	橙	磨耗著しい

第110号住居跡(第323・324図)

す－9－6グリッドを中心に位置する。西半部は削平と風化のため、柱穴以外はまったく遺存していない。東側も埋没河川(仮称　城北川)へ向けて地盤沈下したためか、床が極端に傾いている。全体はその残存部分から推して、軸長6.8m×7.4mの長方形を呈するものと考えられる。この時の面積は約50.3㎡、主軸方向はおよそN－2°－Eとなる。

床の傾斜が強いため、北西部の床面は削平されているのに対し、南東部は確認面から約35cmもの



第325図　第110号住居跡出土遺物(1)

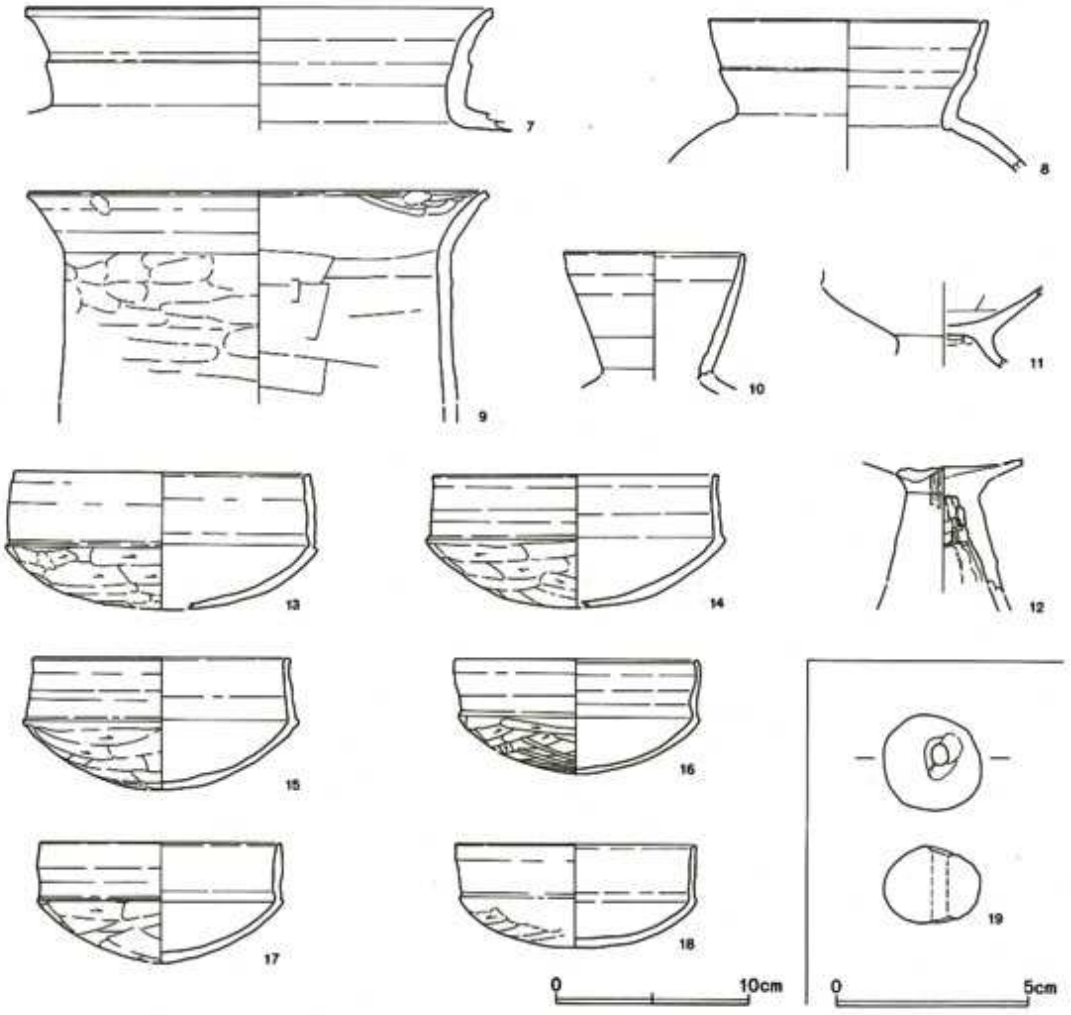
深さを有している。むろん壁も斜めとなるが、床面に対しては垂直となっている。壁溝は床面残存部では幅約18cm、深さ約5cmでほぼ全周している。

柱穴は対角線上に4本検出された。いずれも直径30cm程度で、深さは床面のある東側2穴で約36cmである。ただし、西側のものも標高的には同じであるため、本来はこちらが深かったということになる。

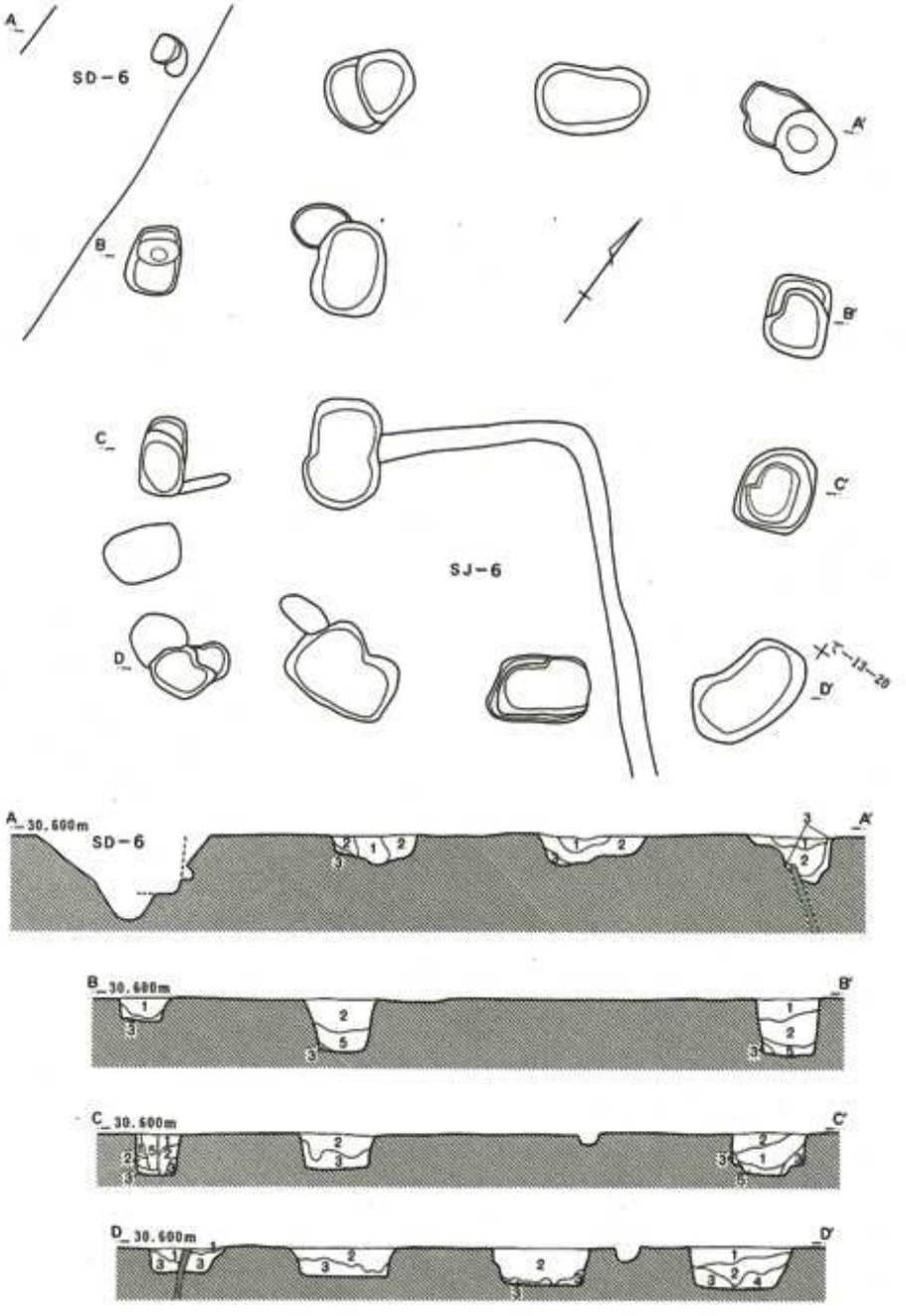
カマドは北壁の中央部、わずかに東へ寄っている。袖は削出されたものであろうが、削平と流失のため、痕跡程度が認められるにすぎない。燃焼部も支脚(地山を削り出したものか?)や焼土と灰の分布によって、その存在が確認されたという状況である。

貯蔵穴は北東隅部のかなり西寄り、ちょうどカマドとの中間に位置している。平面は89cm×74cmの隅丸方形、断面は深さ67cmの逆台形を呈する。

遺物はカマドの東側、壁添いに甕3個体(2・3・6)と坏(16)が集中している。中央部の床面上にも多くの遺物が散っている。



第326図　第110号住居跡出土遺物(2)



第1号掘立柱建物跡柱建物跡土層説明
1．10YR3/3　暗褐色土　L粒・ブロック多。B・C粒少。
2．10YR2/3　黒褐色土　大型L・B・Cブロック多。
3．10YR4/4　褐色土　ほとんどL。粘性強い。
4．10YR3/4　暗褐色土　3に準ずるが色調暗い。
5．10YR4/2　灰黄褐色土　Gブロックからなる。ボソボソ。

0　2m

第327図　第1号掘立柱建物跡

(2) 掘立柱建物跡

柳町遺跡から検出された掘立柱建物跡は7棟である。このうち、第3～7号掘立柱建物跡は調査区の中央部、埋没河川北岸に集中している。主軸方向も大略一致し、うち2棟は大型である。一連の建物群として捉えられよう。遺物の出土はわずかであるが、奈良・平安時代のものと思われる。

第1号掘立柱建物跡(第327図)

て―13―20グリッドを中心に位置する。第6号住居跡を切断して構築された、母屋が3間×2間の南北棟である。西の棟側には廂を有する。桁行は6.1m(柱間約1.8m)、梁行は4.6m(柱間約2.2m)をそれぞれ測る。西棟と廂の間は約1.8mで、主軸の方向はおよそN―30°―Wを指す。

柱穴は100cm×70cm前後の楕円形を呈し、2穴が重複したような形のものが多い。柱穴の覆土はいずれも埋め戻されたものと思われ、柱痕は認められなかった。おそらく、柱の抜きとりが行なわれたのであろう。

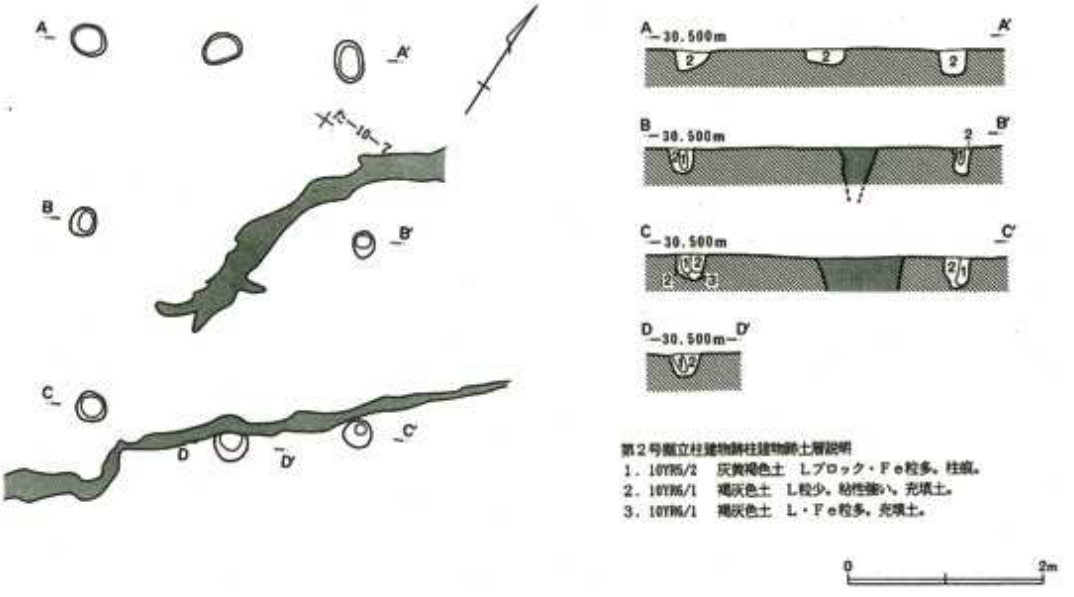
遺物は図示できなかったが、坏の小破片が出土している。

第2号掘立柱建物跡(第328図)

た―10―1グリッドを中心に位置する。2間×2間の南北棟で、桁行3.8m、梁行2.7mを測る。柱間は桁行1.8m、梁行1.4mで、主軸方向はおよそN―34°―Wを指す。

柱穴は直径30cm程度で、深さは25cmほどである。柱痕は北の妻側の3穴を除き、直径10cm弱のものが観察された。一部、噴砂に壊される柱穴が存在する。

遺物の出土は見られなかった。



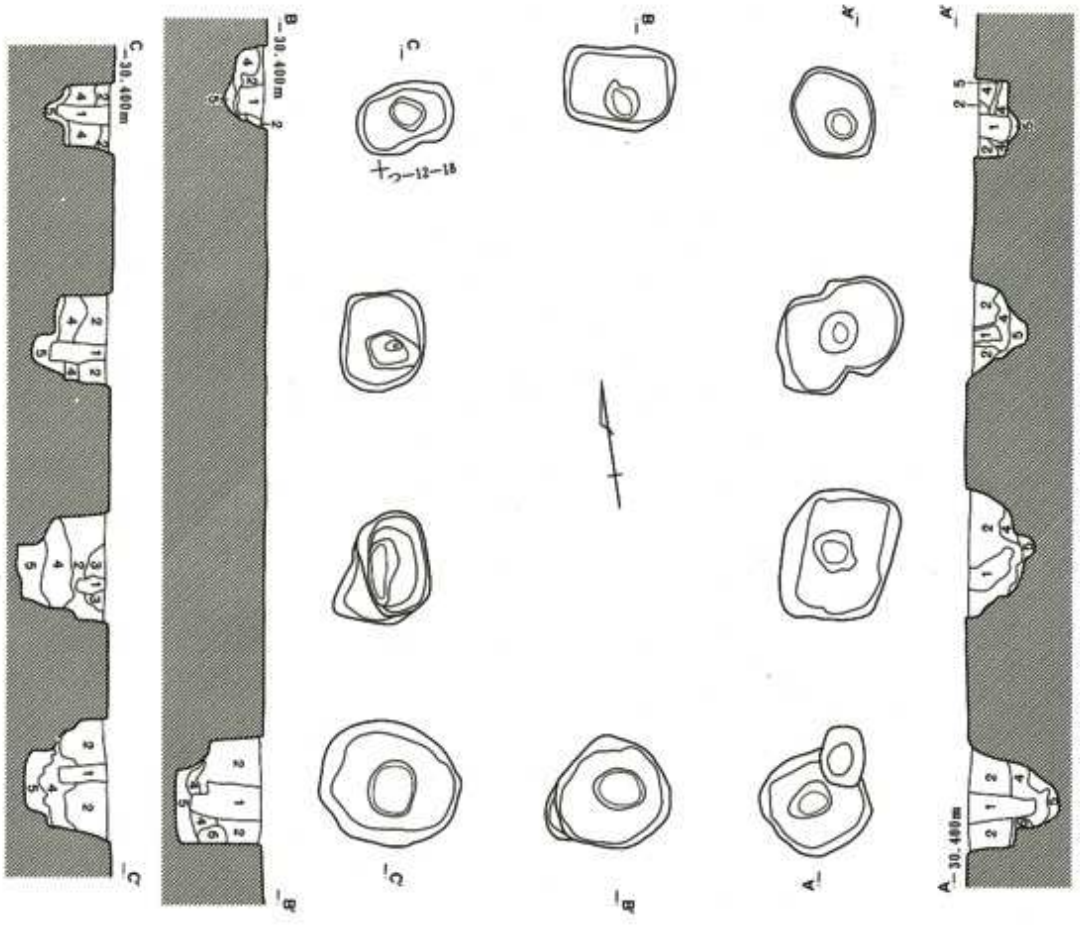
第328図 第2号掘立柱建物跡

第３号掘立柱建物跡（第329図）

つ―12―12グリッドを中心に位置する。３間×２間の南北棟で、桁行7.0m、梁行4.6mを測る大型の建物跡である。柱間はともに約2.3mとなり、主軸方向はおよそN―10°―Eを指す。

柱穴は長径120cm前後の楕円形、ないしは隅丸の長方形を呈する。底面は深さ50cmほどで一旦平らとなり、さらに中央部が直径約40cm、深さ約25cmの小穴状に掘られている。覆土は柱痕と柱を固定するための充填土に分かれる。観察範囲内での柱痕は、東西の妻側が直径約20cmであるのに対し、棟持柱はともに30cm前後にも達する。充填土は地山のブロックで構成され、強くしまっている。

遺物はその充填土中より、須恵器の蓋（１）と坏（２）が出土している。



第３号掘立柱建物跡柱建物跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　柱痕。完全に土に置換しており、しまり良い。
2．10YR3/3　暗褐色土　Lと褐色土ブロックからなる。B粒多。
3．10YR3/3　暗褐色土　2に準ずるがG粒多。
4．10YR4/2　灰黄褐色土　ほぼGからなる。Lブロック少。
5．10YR5/3　にぶい黄褐色土　砂質だが粘性強い。
6．地山Lブロック。

第329図　第３号掘立柱建物跡

第４号掘立柱建物跡(第330図)

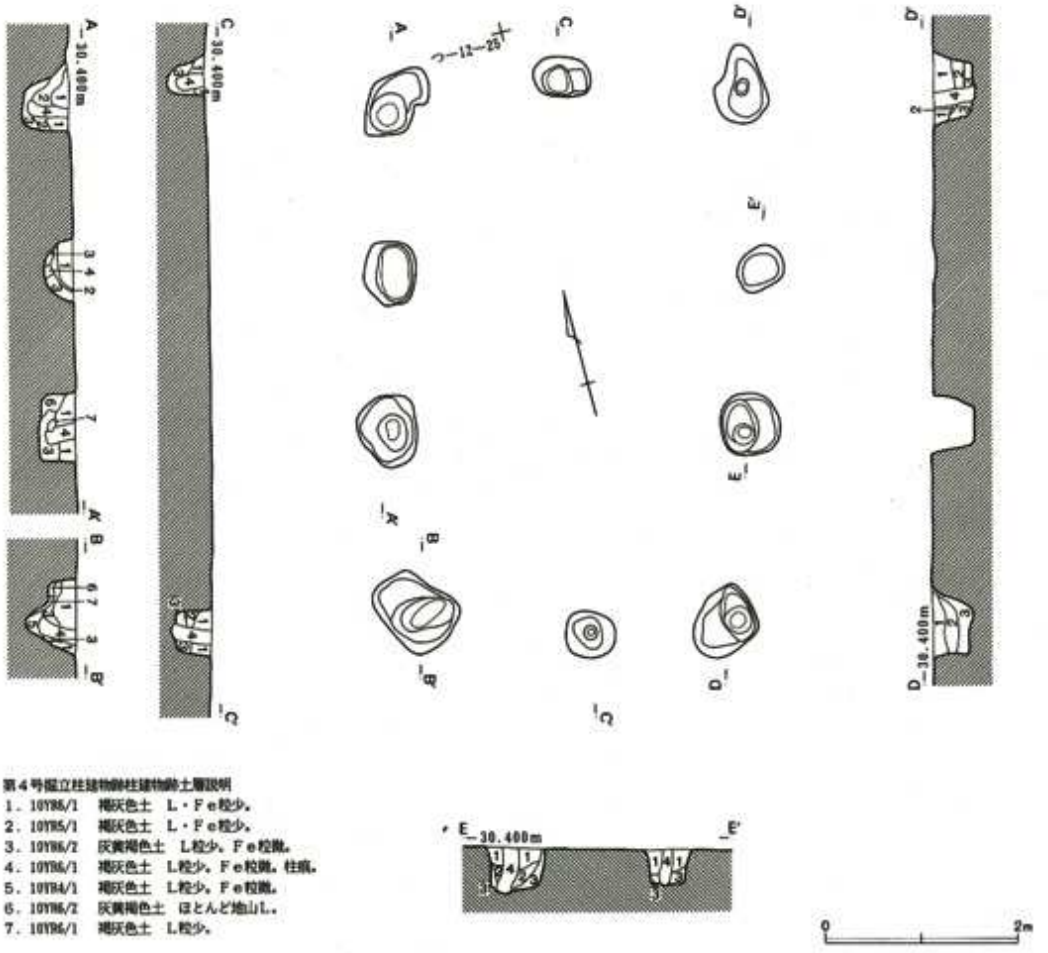
つ―12―19・20グリッドに位置する。３間×２間の南北棟で、桁行5.4mの梁行3.6mを測る。棟持柱はともに梁筋より外側に穿たれ、柱穴間は約5.7mとなっている。柱間は桁行が北から1.8m―1.7m―1.9m、梁行が西から1.9m―1.7mとなる。主軸方向はおよそN―10°―Eを指す。

柱穴は長径約80cmの楕円形で、深さは40cm前後である。覆土は柱痕と充填土からなり、柱痕の直径は15cm程度となっている。

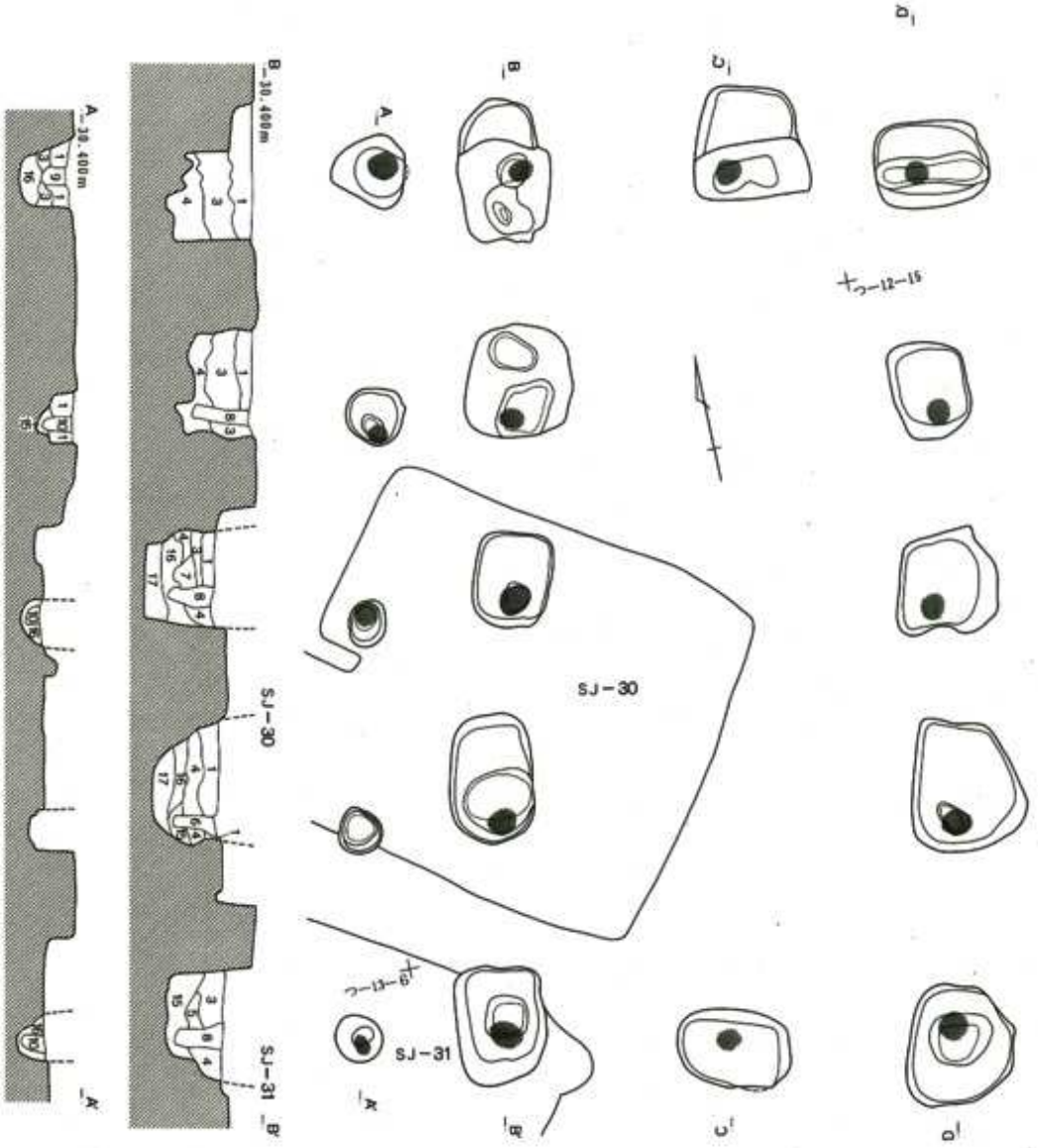
遺物の出土は見られなかった。

第５号掘立柱建物跡(第331・332図)

つ―12―10グリッドを中心に位置する。第30・31号住居跡を切って構築される南北棟である。母屋が４間×２間の大型建物跡で、西の棟側には約150cmの廂が付く。規模は桁行9.0m、梁行4.1mを測り、主軸方向はおよそN―12°―Eを指す。柱間は桁行が北から2.6m―2.0m―2.2m―2.2mで、梁行が西から1.9m―2.2mとなっている。



第330図　第４号掘立柱建物跡



第５号掘立柱建物跡柱建物跡土層説明

1．10YR6/1　褐灰色土　Ｌブロック少。Ｆｅ粒多。
2．10YR6/1　褐灰色土　１に準ずるが、色調明るくＬ粒多い。
3．10YR5/1　褐灰色土　Ｌブロック・Ｆｅ粒多。
4．10YR5/1　褐灰色土　Ｌブロック・Ｆｅ粒微。
5．10YR5/1　褐灰色土　４に準ずるが、色調明るくＦｅ粒多い。
6．10YR5/1　褐灰色土　４に準ずるがＬブロック多。
7．10YR6/1　褐灰色土　Ｌ・Ｆｅ粒微。
8．10YR5/2　灰黄褐色土　Ｌ・Ｆｅ粒微。柱痕。
9．10YR5/1　褐灰色土　８に準ずるが粘性まさる。柱痕。
10．10YR5/1　褐灰色土　８に準ずるがＦｅ粒少。柱痕。
11．10YR6/1　褐灰色土　主にＧからなる。Ｌ・Ｆｅ粒多。
12．10YR6/1　褐灰色土　主にＧからなる。　11よりＬ粒多。
13．10YR6/1　褐灰色土　11に準ずるがＬ粒少。
14．10YR5/1　褐灰色土　Ｌブロック・Ｆｅ粒微。粘性強い。
15．10YR5/1　褐灰色土　Ｌブロック少。Ｆｅ粒微。
16．10YR5/1　褐灰色土　Ｌブロック多。15より色調暗い。
17．10YR5/1　褐灰色土　Ｌブロック・Ｆｅ粒微。粘性強い。

0　2m

第331図　第５号掘立柱建物跡(1)

母屋の柱穴は長方形の掘り方を基本としてはいるようだが、規模的にもやや不規則な観は否めない。深さは妻側のものが80cm前後と浅いのに対し、他は120cm以上にも及んでいる。断面形は箱形状ではあるものの、かなり不揃いである。覆土は明瞭な柱痕と、地山の粘質土ブロックからなる充填土とに分かれる。柱は完全に土に置換しており、しまりがなくボソボソである。直径は25cm前後が測れる。柱を固定した充填土は無秩序に投入されたものと思われ、版築が施されたような形跡は観察されなかった。

廂の柱穴は径約60cmの円形を呈し、深さは約55cmを測る。やはり柱痕は明瞭で、直径は約20cmとなる。

遺物は充填土中より須恵器の蓋片(1)、土師器の坏片(2)が出土したにすぎない。

第6号掘立柱建物跡(第333図)

ほぼ、つ—12—1・2グリッドに位置し、埋没後の第36号住居跡を切断している。規模は2間×2間?で、桁行と梁行はともに約3.6m、柱間も約1.8mとなっている。南側の柱列に中央の柱穴が検出されないため、棟の方向は定かでない。東西棟であるとすれば、主軸の方向はおよそN—75°—Wとなる。

柱穴は径55cmほどで、深さは30cm前後となっている。底面の中央部には柱の跡であろうか、小さな円形の窪みが見られる。

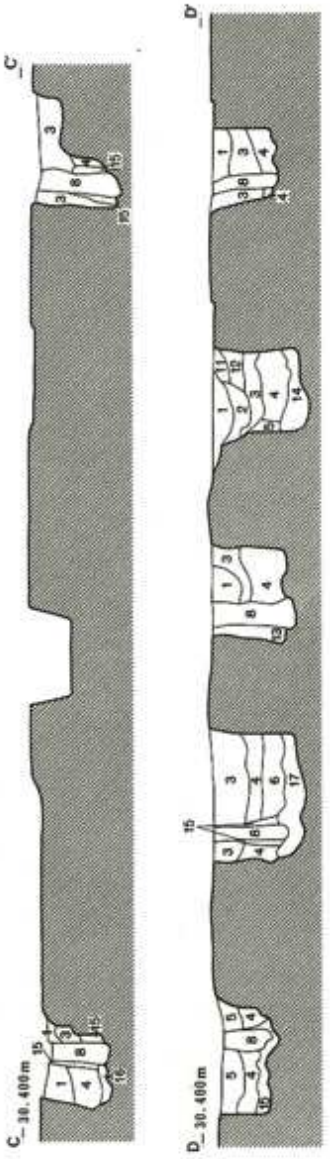
遺物はなんら出土していない。

第7号掘立柱建物跡(第334図)

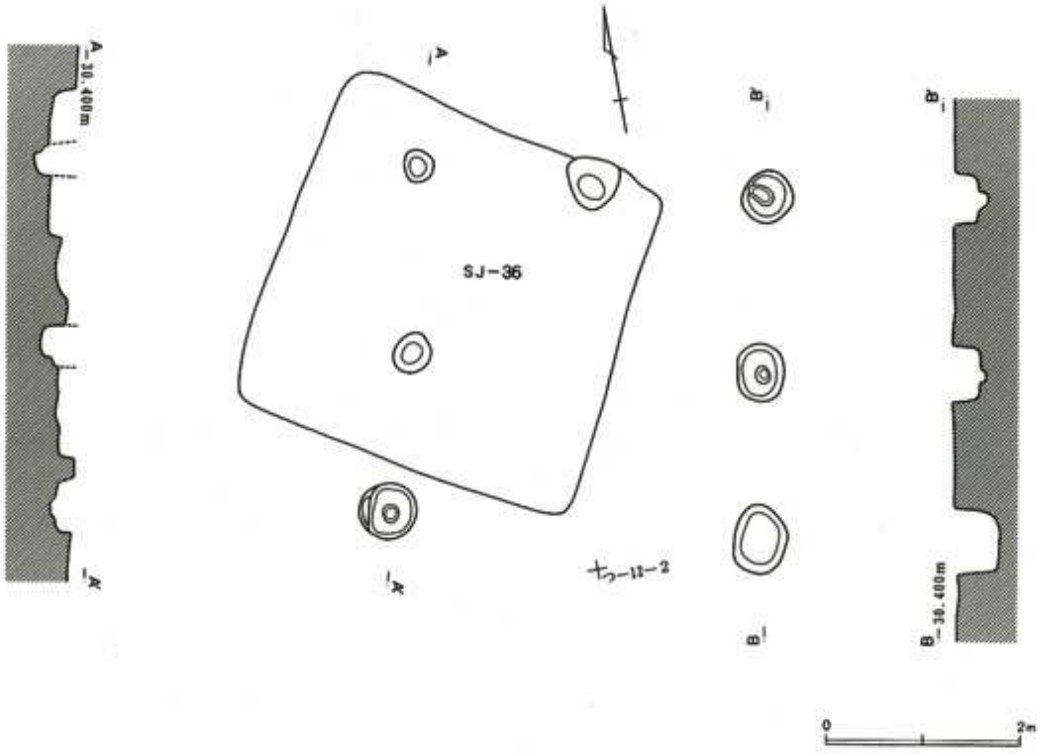
ち—12—22グリッドを中心に位置する。2間×2間の南北棟で、第6号掘立柱建物跡とはまさに軒端を接するような関係にある。桁行3.9m、梁行3.1mを測り、主軸方向はおよそN—79°—Wを指す。柱間は桁行2.0m、梁行1.6mほどとなっている。

柱穴は直径35cm前後で、上部はさらに広くなったものが多い。覆土の断面観察を怠ったため図示することはできなかったが、柱痕などは確認されなかった。あるいは、柱の抜きとりが行なわれたのかもしれない。

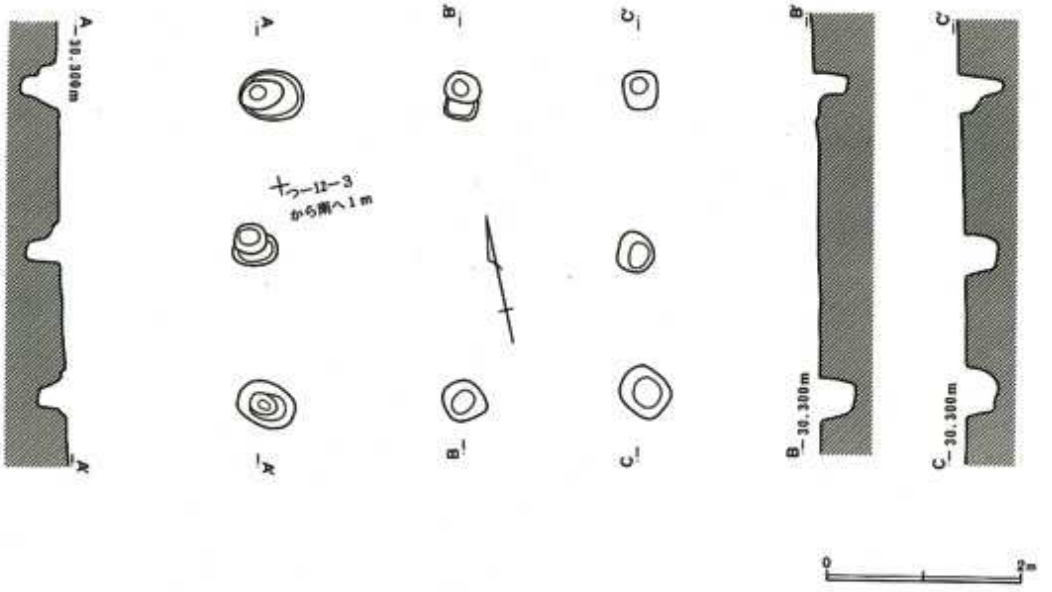
遺物はなんら出土していない。



第332図　第5号掘立柱建物跡(2)



第333図　第６号掘立柱建物跡



第334図　第７号掘立柱建物跡

第335図　第３・５号掘立柱建物跡出土遺物

第３・５号掘建柱建物跡出土遺物（第335図）

No.	器種	法　　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
第３号						
1	蓋（須恵）	―　× 4.0 ×15.4	70%	粗W多＋B′	灰	
2	坏（　〃　）	(13.6)× 3.1 ×(6.8)	破片	粗W＋W′多＋R	灰白	底部は回転糸切り
第５号						
1	蓋（須恵）	―　×(2.0)×　―	口縁破片	W＋W′＋B′	灰黄	
2	坏	―　×(2.1)×　―	底部破片	W＋W′	橙	

(3)　土坑（第336～339図）

柳町遺跡からは計17基の土坑が検出されている。分布的に見ると、調査区の南北両端部にそれぞれ集中する傾向がある。北部のものは位置や覆土の共通性など、井戸跡や溝との関係が深いと思われる。南部のものは埋没河川の肩部分に並び、浅いものが多い。

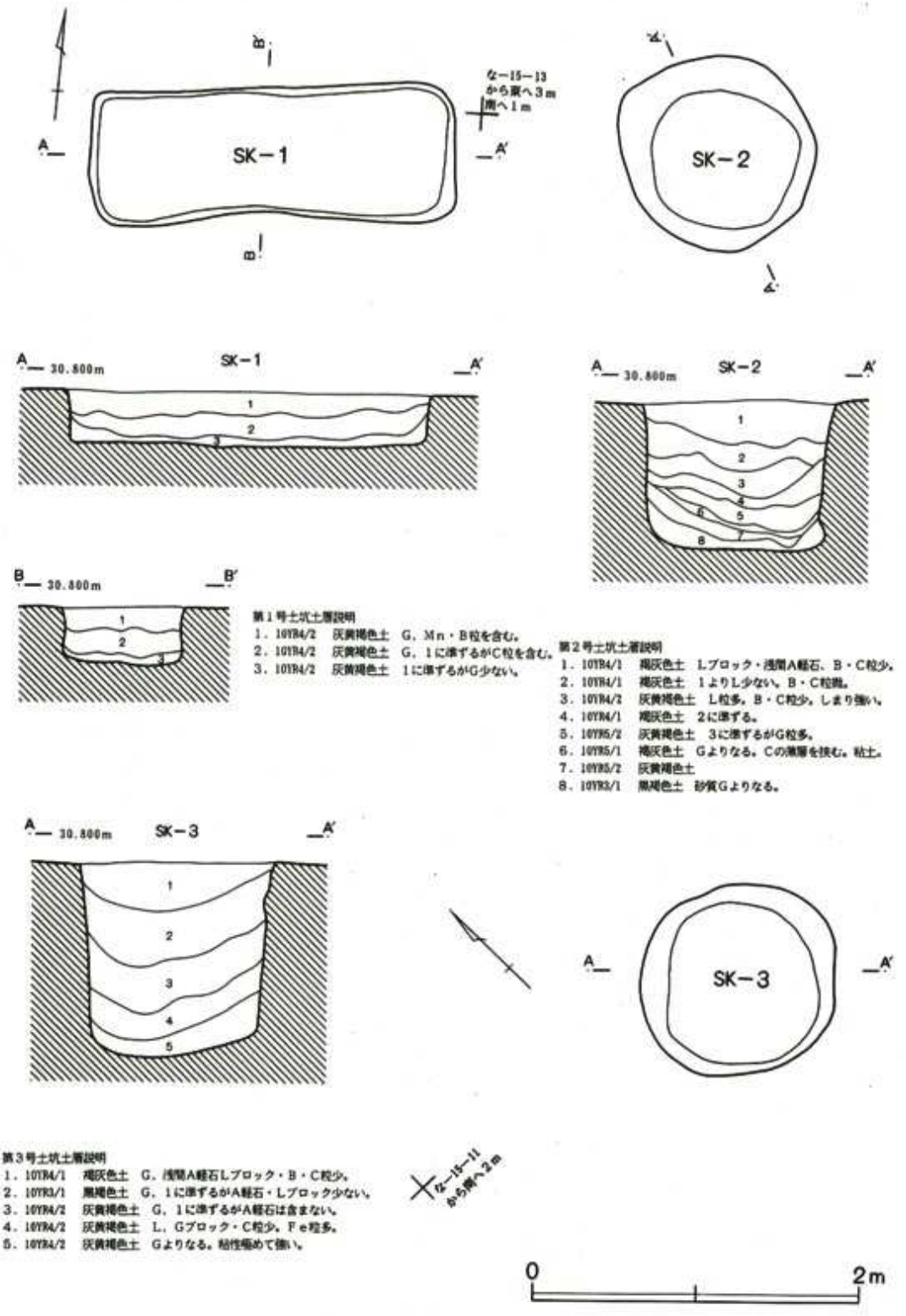
形態的には第１号土坑が長方形である以外、円形ないしは楕円形を呈する。このうち、第２・３・４・８・10号の５基は断面がきれいな円筒状となる。砂田遺跡で見られたもの同様、墓坑の可能性がある。

遺物の出土はほとんどなく、時期的には明らかとすることができない。おそらくは中世以降のものであろう。

なお、第５・６・９号土坑はともに井戸跡であるが、調査時の名称をそのまま使用したため、ここに併記することとした。

第14表　柳町遺跡土坑一覧

No.	グリッド	長軸方向	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考	No.	グリッド	長軸方向	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備考
1	な―15―7	N-87°-E	長方形	2.25	0.76	0.37		10	せ―9―11	―	楕円形	1.15	0.78	0.77	
2	な―15―7	―	円形	1.25	1.16	0.90		11	せ―8―15	―	不整円形	1.00	0.80	0.13	
3	な―14―10	―	〃	1.26	1.20	1.18		12	す―9―21	N-0°	長方形	(1.15)	0.60	0.15	
4	な―14―5	―	楕円形	0.72	0.82	0.37		13	す―9―21	N-10°-E	〃	(3.12)	0.70	0.13	
5	と―15―11	―	円形	0.88	―	(0.95)	井戸跡	14	す―9―16	―	楕円形	0.37	0.34	0.10	
6	と―15―22	―	不整円形	1.47	1.12	(1.03)	〃	15	せ―10―6	―	〃	1.25	0.80	0.39	
7	と―14―18	―	楕円形	0.59	0.43	0.15		16	そ―10―2	N-0°	長方形	1.50	0.77	0.15	SJ76より新 SD19より古
8	と-15-17-22	―	円形	1.50	1.47	0.65	SX-1と重複	17	つ―12―3	―	正方形	1.05	1.05	0.70	SJ85,87より新
9	と―15―19	―	楕円形	1.09	0.86	(0.95)	井戸跡								

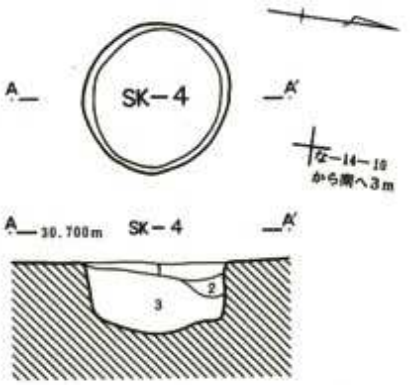


第1号土坑土層説明
1．10YR4/2　灰黄褐色土　G，Mn・B粒を含む。
2．10YR4/2　灰黄褐色土　G，1に準ずるがC粒を含む。
3．10YR4/2　灰黄褐色土　1に準ずるがG少ない。

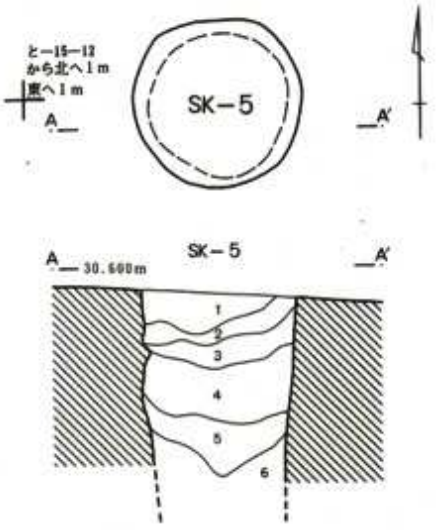
第2号土坑土層説明
1．10YR4/1　褐灰色土　Lブロック・浅間A軽石、B・C粒少。
2．10YR4/1　褐灰色土　1よりL少ない。B・C粒微。
3．10YR4/2　灰黄褐色土　L粒多。B・C粒少。しまり強い。
4．10YR4/1　褐灰色土　2に準ずる。
5．10YR5/2　灰黄褐色土　3に準ずるがG粒多。
6．10YR5/1　褐灰色土　Gよりなる。Cの薄層を挟む。粘土。
7．10YR5/2　灰黄褐色土
8．10YR3/1　黒褐色土　砂質Gよりなる。

第3号土坑土層説明
1．10YR4/1　褐灰色土　G，浅間A軽石Lブロック・B・C粒少。
2．10YR3/1　黒褐色土　G，1に準ずるがA軽石・Lブロック少ない。
3．10YR4/2　灰黄褐色土　G，1に準ずるがA軽石は含まない。
4．10YR4/2　灰黄褐色土　L，Gブロック・C粒少。Fe粒多。
5．10YR4/2　灰黄褐色土　Gよりなる。粘性極めて強い。

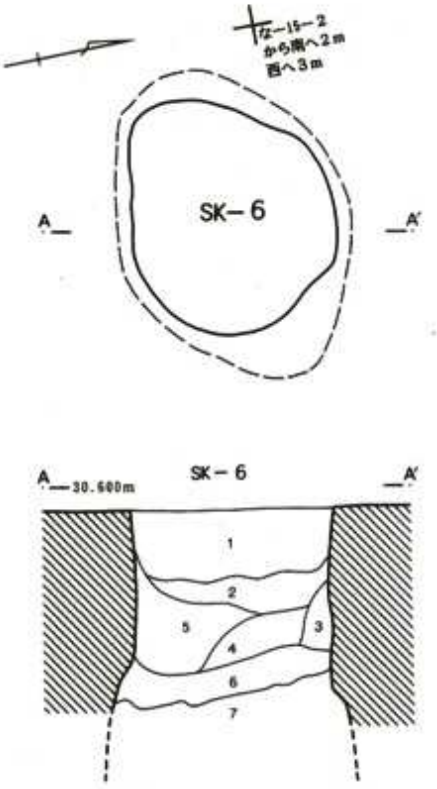
第336図　第1～3号土坑



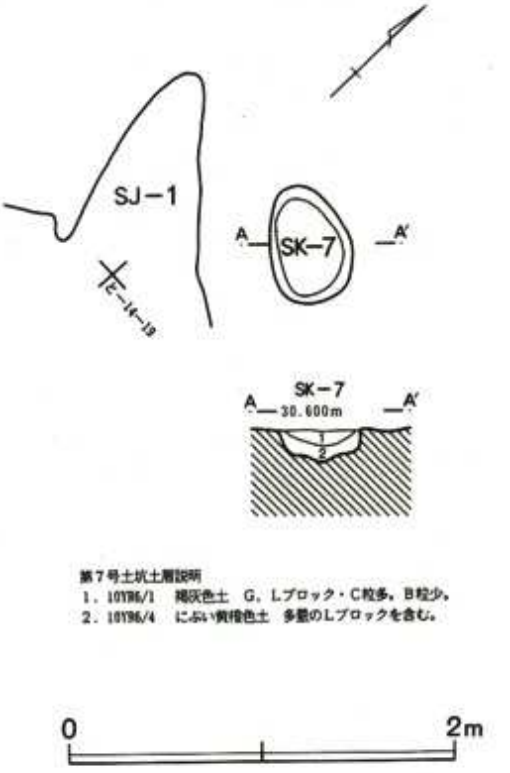
第4号土坑土層説明
1．10YR4/2　灰黄褐色土　多量の浅間A軽石を含む。B・C粒微。
2．10YR4/4　褐色土　Lブロック・A軽石少。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　Lブロック多、A軽石少。



第5号土坑土層説明
1．10YR4/1　褐灰色土　Gよりなる。L粒多。
2．10YR3/1　黒褐色土　G、浅間A軽石多量。L粒多。
3．10YR4/2　灰黄褐色土　1に準ずるがA軽石は少ない。
4．10YR3/1　黒褐色土　Lと色調の異なるLの互層。
5．10YR4/3　にぶい黄褐色土　L質粘土層。Fe粒を含む。
6．10YR3/2　黒褐色土　4に準ずる。

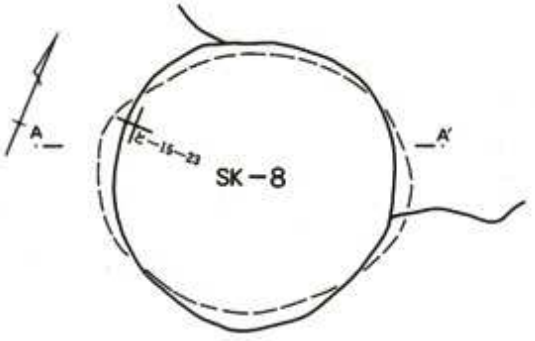


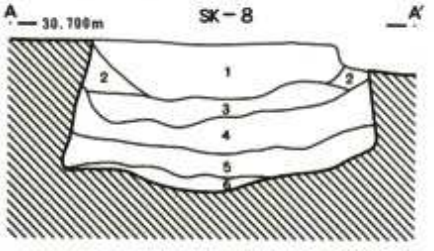
第6号土坑土層説明
1．10YR5/1　褐灰色土　G、Lブロック・B・C粒少。
2．10YR5/1　褐灰色土　G、Lブロック多。
3．10YR5/1　褐灰色土　G、Lブロック微。
4．5B6/1　青灰色土　G粘土層。B粒微。
5．10YR5/1　褐灰色土　2に準ずるがLブロック少。
6．5B6/1　青灰色土　G粘土層。
7．5B6/1　青灰色土　G粘土層。Lブロック少。



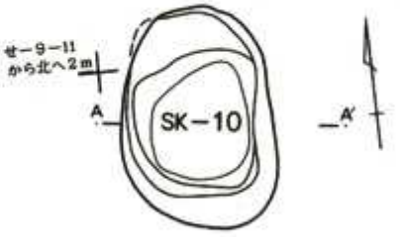
第7号土坑土層説明
1．10YR6/1　褐灰色土　G、Lブロック・C粒多。B粒少。
2．10YR6/4　にぶい黄橙色土　多量のLブロックを含む。

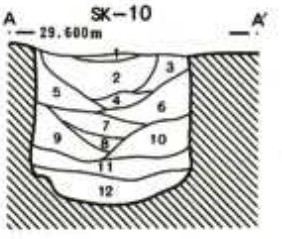
第337図　第4～7号土坑



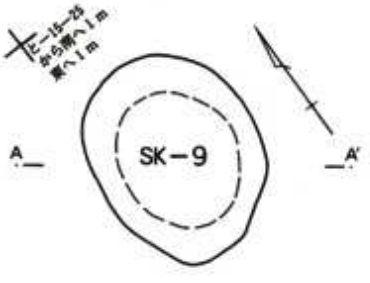


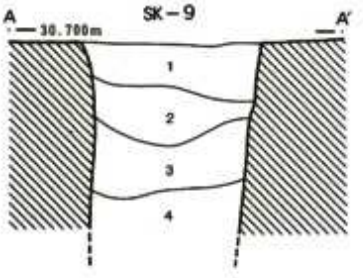
第8号土坑土層説明
1．10YR5/2　灰黄褐色土　Gブロック多。Lブロック・B・C粒少。
2．10YR5/2　灰黄褐色土　Lブロック多。浅間A軽石少。
3．10YR5/2　灰黄褐色土　Gブロック多。
4．10YR5/2　灰黄褐色土　L・Gブロックを含む。
5．10YR5/2　灰黄褐色土　Gブロック・B粒を含む。
6．10YR5/2　灰黄褐色土　5に準ずる。境にCの薄い層。



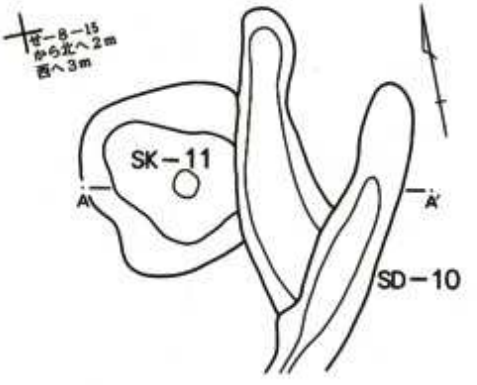


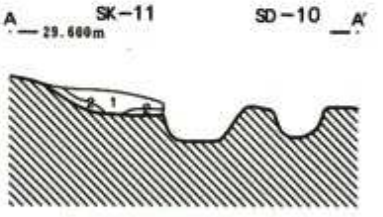
第10号土坑土層説明（土色帖不用）
1．黒褐色土　砂質でしまり良い。
2．暗黄褐色土　砂粒をわずかに含む。
3．暗灰褐色土　砂質でしまる。Fe粒含む。
4．明褐色土　5のブロックを含む。
5．暗灰褐色土　粘質でしまる。
6．暗灰褐色土　基本は5。Lブロックを含む。
7．暗灰褐色土　基本は5。砂粒を多く含む。
8．黒褐色土　粘質だが砂粒を多く含む。
9．明灰褐色土　基本は10。Gブロックを含む。
10．明灰褐色土　しまり良く、砂粒を多く含む。
11．暗灰色土　基本は12。砂粒を多く含む。
12．暗灰色土　粘質。





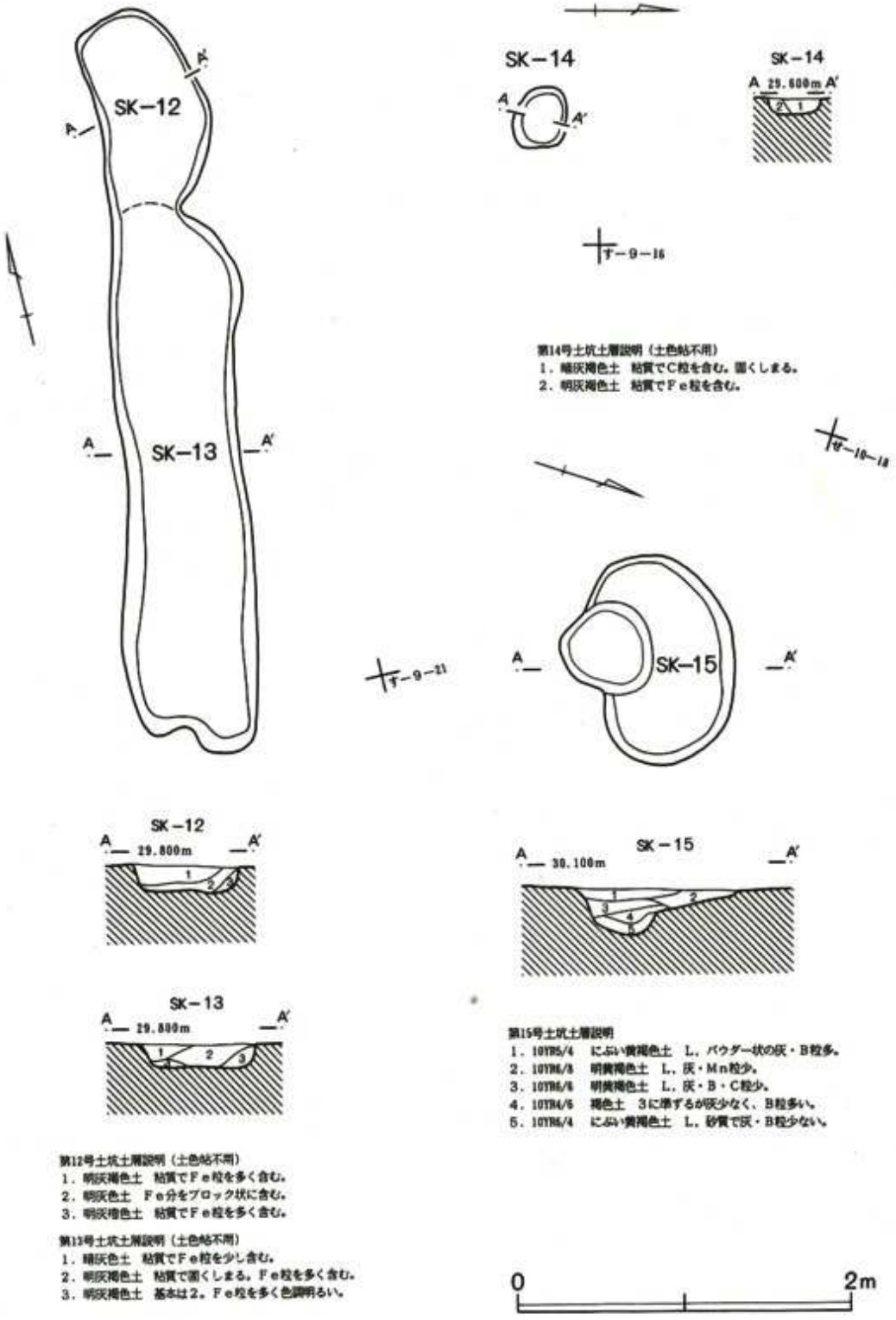
第9号土坑土層説明
1．10YR6/1　褐灰色土　Lブロック多。B・C粒微。浅間A軽石少。
2．10YR6/1　褐灰色土　1に準ずるがLブロック少ない。
3．10YR6/1　褐灰色土
4．10YR6/1　褐灰色土　B粒少。





第11号土坑土層説明（土色帖不用）
1．黒褐色土　粘質でしまる。
2．暗灰褐色土　粘質でC粒を含む。

第338図　第8～11号土坑



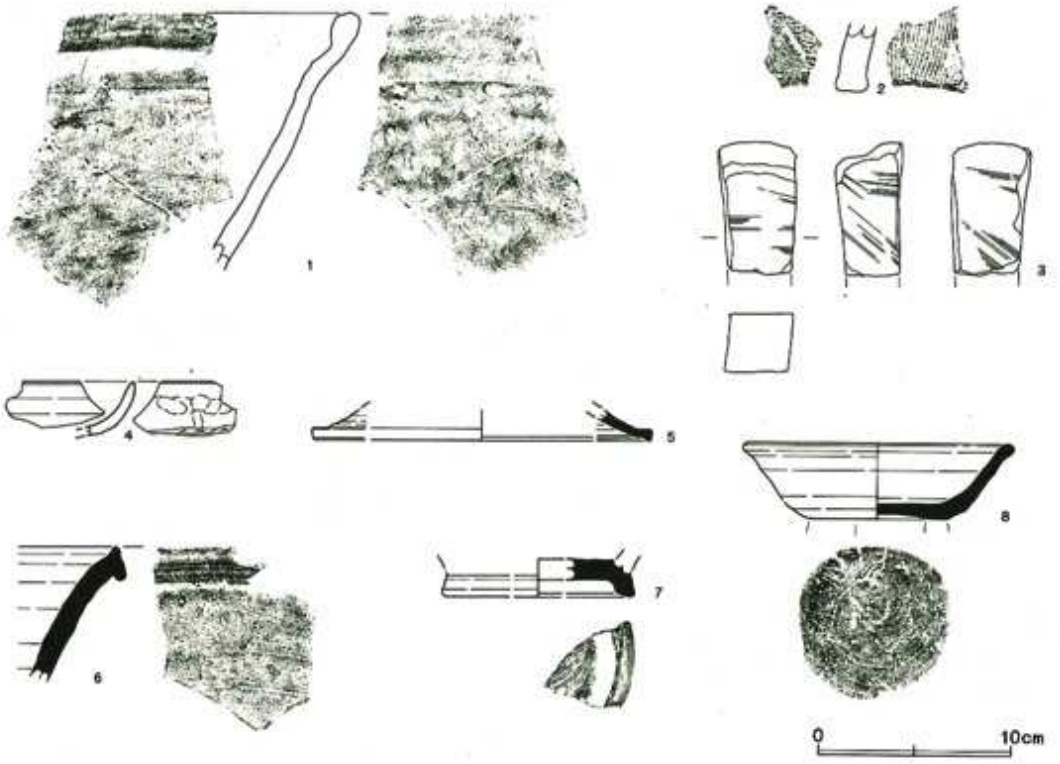
第14号土坑土層説明（土色帖不用）
1．暗灰褐色土　粘質でC粒を含む。固くしまる。
2．明灰褐色土　粘質でＦｅ粒を含む。

第15号土坑土層説明
1．10YR5/4　にぶい黄褐色土　L．パウダー状の灰・B粒多。
2．10YR6/8　明黄褐色土　L．灰・Mn粒少。
3．10YR6/6　明黄褐色土　L．灰・B・C粒少。
4．10YR4/6　褐色土　3に準ずるが灰少なく、B粒多い。
5．10YR6/4　にぶい黄褐色土　L．砂質で灰・B粒少ない。

第12号土坑土層説明（土色帖不用）
1．明灰褐色土　粘質でＦｅ粒を多く含む。
2．明灰色土　Ｆｅ分をブロック状に含む。
3．明灰褐色土　粘質でＦｅ粒を多く含む。

第13号土坑土層説明（土色帖不用）
1．暗灰色土　粘質でＦｅ粒を少し含む。
2．明灰褐色土　粘質で固くしまる。Ｆｅ粒を多く含む。
3．明灰褐色土　基本は2．Ｆｅ粒を多く色調明るい。

第339図　第12～15号土坑



第340図　井戸跡出土遺物

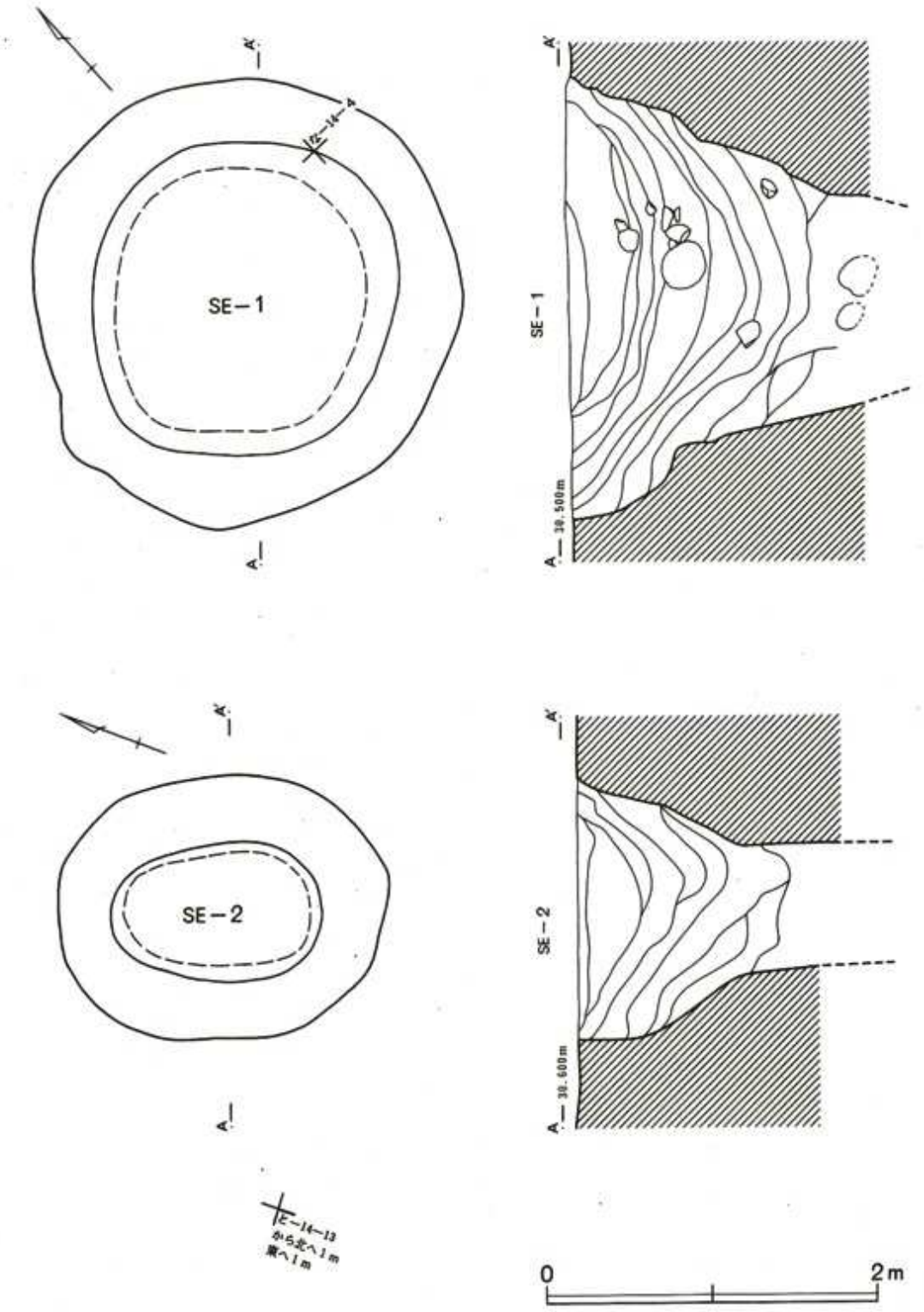
井戸跡出土遺物(第340図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	鉢	(28.0)×(13.2)× —	口縁破片	W+W′多	灰白	SE-1
2	円筒埴輪	— ×(4.5)× —	底部片	W′+B′	にぶい橙	SE-1
3	砥石	タテ6.7×ヨコ3.1×厚2.7	半折	——	浅黄	SE-7
4	坏	— ×(2.8)× —	口縁破片	W′+B′	にぶい橙	SE-10
5	蓋(須恵)	(18.0)×(1.6)× —	口縁片	W′+B′	灰白	〃
6	甕(須恵)	— ×(6.6)× —	〃	W+W′	灰	〃
7	高台付椀	(7.7)×(2.0)×高台(10.0)	高台破片	W′+B	灰白	SE-10、底部回転糸切り
8	坏(須恵)	(14.4)× 4.0 × 7.4	60%	粗W+W′	灰	SE-11、底部回転糸切り→周辺ヘラ削り

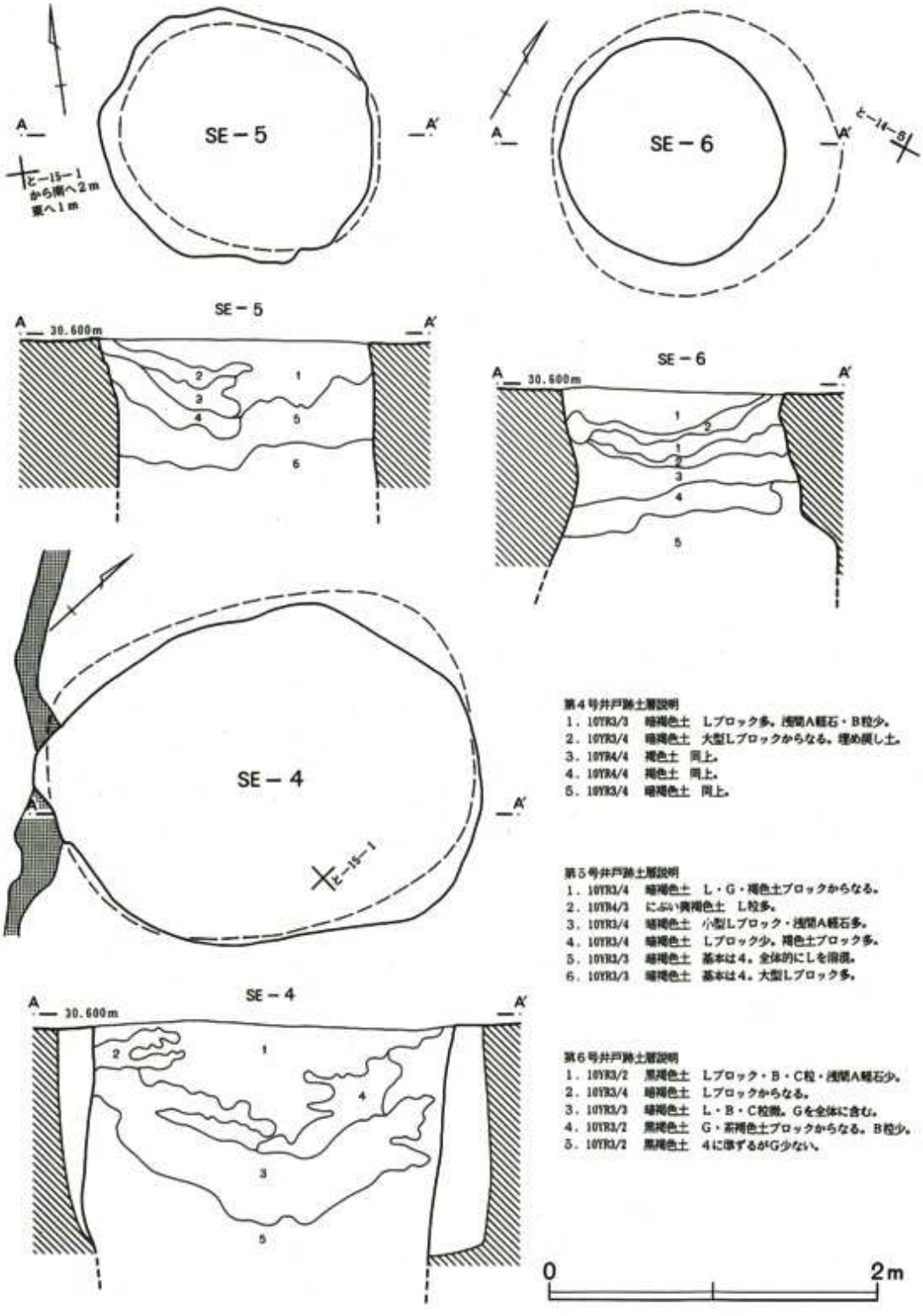
(4)　井戸跡(第341～344図)

柳町遺跡から検出された井戸跡は14基(第５・６・９号土坑を含む)である。その分布は調査区北端部、それも第６号溝の西側に大半が集中している。後述のように、第２・３・４・６号溝は方形の区画をなすものであるが、井戸跡はこの内にまとまっている。溝、井戸跡ともに出土遺物は少ないながらも、中世に属する遺構と考えられる。両者が同時併存したとすれば、「屋敷」的な性格が与えられよう。

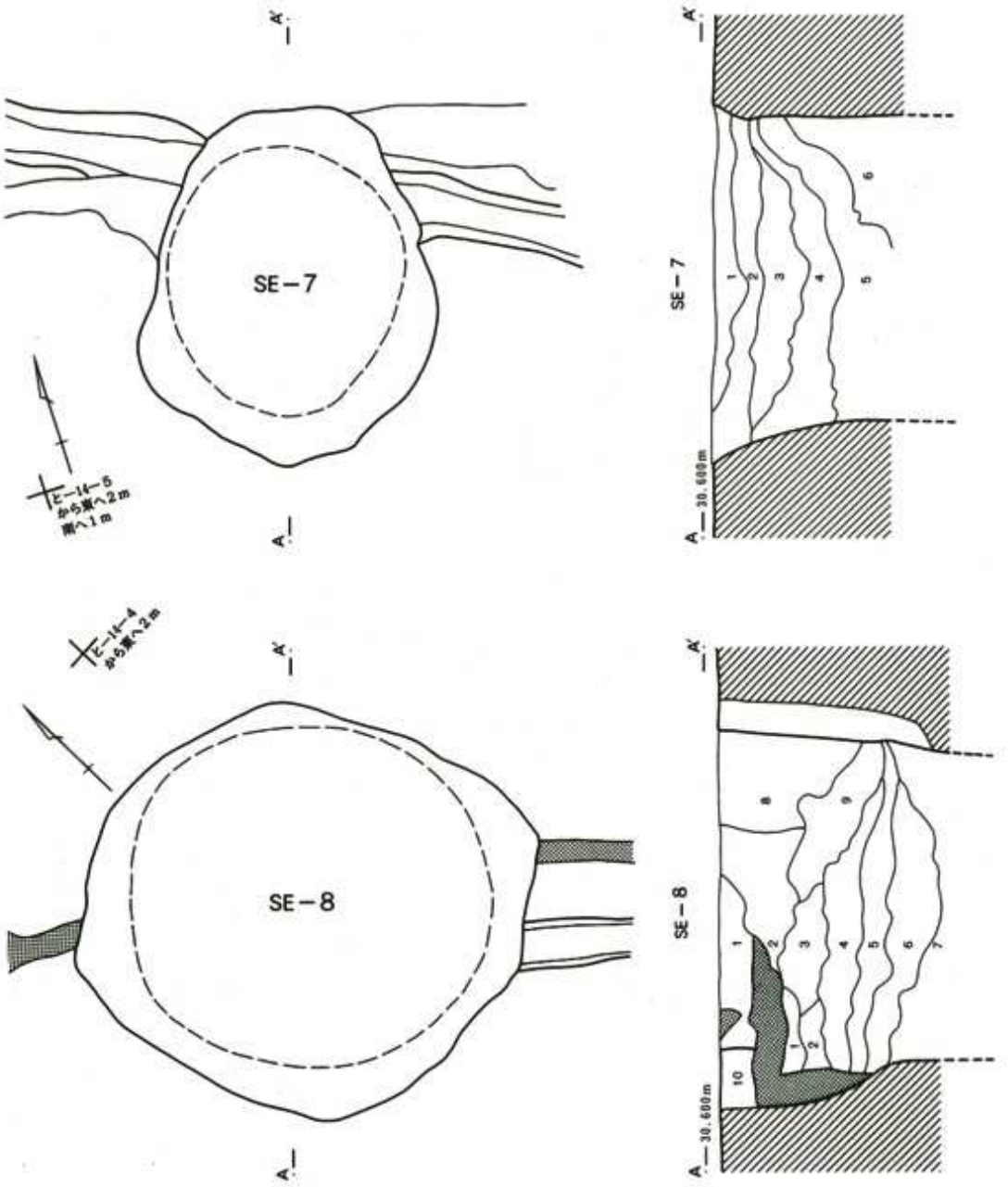
井戸跡の平面は円形ないし楕円形が多く、ほとんどが素掘りである。断面は円筒状、もしくは漏斗状を呈している。唯一の例外は第11号井戸跡で、長方形の掘り方と開口部を有している。壁部には板状の木質片が付着しており、枠を備えていた可能性もある。



第341図　第1・2号井戸跡



第342図　第4～6号井戸跡



第8号井戸跡土層説明

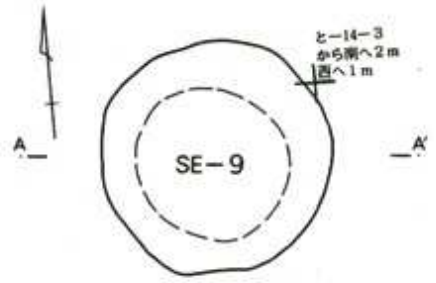
1．10YR3/2　黒褐色土　Gブロック多。B・C粒微。
2．10YR3/4　暗褐色土　L＋粘質Gブロック多。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　大型Gブロックからなる。ボソボソ。
4．10YR4/3　にぶい黄褐色土　L・G・黒色土・茶褐色土ブロックからなる。
5．10YR3/2　黒褐色土　粘質Gブロック多。
6．10YR2/3　黒褐色土　基本は5。色調暗く、粘質Gブロック微。
7．10YR4/6　にぶい黄橙色土　L・Gからなる。しまり・粘性強い。
8．10YR3/4　暗褐色土　ほとんどL。地震による壁の崩落土か。
9．10YR4/4　褐色土　ほとんどL。8よりしまり弱い。
10．10YR4/4　褐色土　地山L。地震によるズレ。

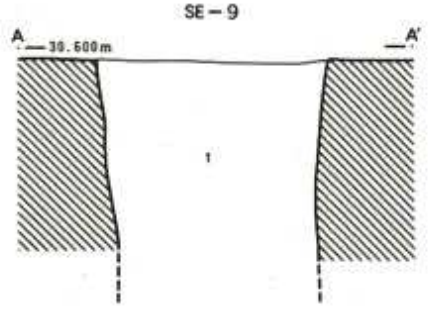
第7号井戸跡土層説明

1．10YR3/2　黒褐色土　Lブロック多。B粒・浅間A軽石少。
2．10YR3/3　暗褐色土　B・C・浅間A軽石多。
3．10YR3/3　暗褐色土　基本は2。全体的にLを混混。
4．10YR3/4　暗褐色土　L・Gブロック多。B粒少。
5．10YR3/3　暗褐色土　基本は4。大型L・Gブロック・C粒を含む。
6．10YR4/4　褐色土　ほとんどL。埋め戻し土。

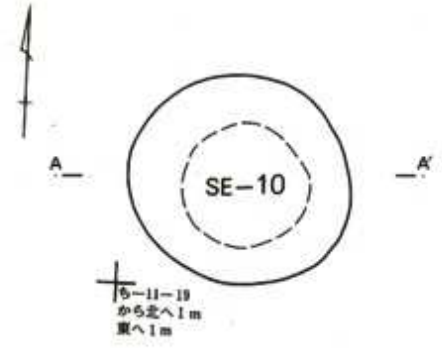
0　2m

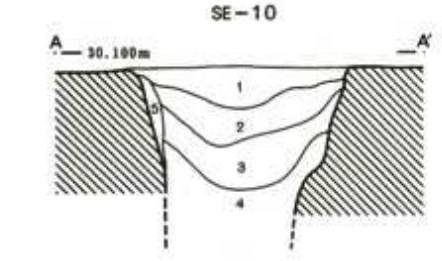
第343図　第7・8号井戸跡



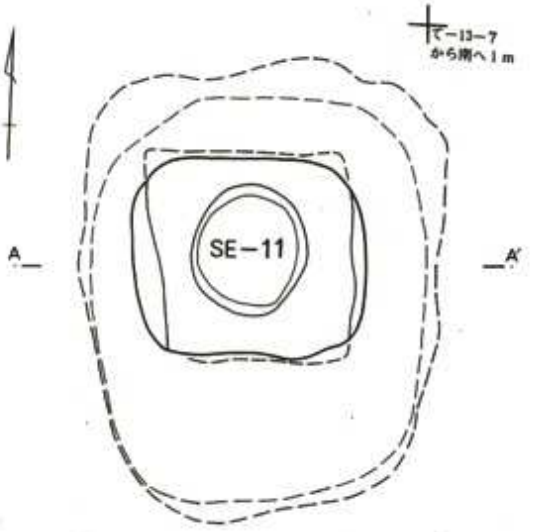


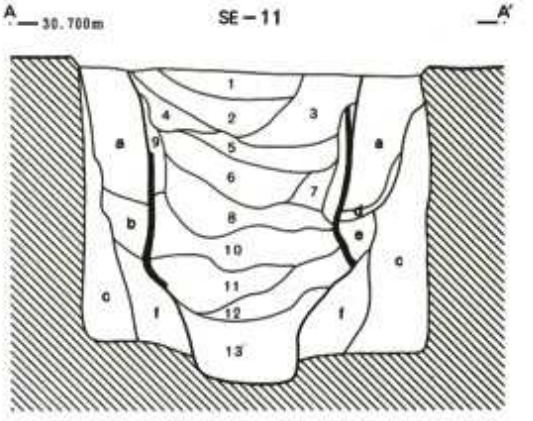
第9号井戸跡土層説明
1．10YR3/4　暗褐色土　砂質L・黒褐色土大型ブロック多。上部に浅間A軽石多。





第10井戸跡土層説明
1．10YR3/2　黒褐色土　B・C粒少。Fe粒多。
2．10YR2/2　黒褐色土　基本は1。B・C粒少。粘性強い。
3．10YR2/2　黒褐色土　大型B・C粒多。
4．10YR4/2　灰黄褐色土　C粒微。単一的な粘質土層。
5．10YR4/4　褐色土　ほとんど地山L。壁の溶軟化層。





第11井戸跡土層説明
1．10YR4/2　灰黄褐色土　L粒少。Fe粒多。
2．10YR4/2　灰黄褐色土　1に準ずるが色調明るい。
3．10YR5/2　灰黄褐色土　Fe粒多。
4．10YR5/2　灰黄褐色土　Fe粒微。
5．10YR5/1　褐灰色土　Fe粒微。
6．10YR5/1　褐灰色土　Fe粒微。粘土質。
7．10YR4/1　褐灰色土　Fe粒多。砂質粘土。
8．10YR4/1　褐灰色土　Fe粒多。粘性強い。
9．10YR4/1　褐灰色土　井戸枠の腐食土と思われる。木質残。
10．10YR5/1　褐灰色土　粘土。しまり良く、粘性強い。
11．10YR5/1　褐灰色土　粘土。
12．10YR6/1　褐灰色土　粘土。Fe粒少。
13．N6／　灰色土　灰白色・Fe粘土粒微。
第11井戸跡充填土土層説明
a．10YR5/2　灰黄褐色土　砂質L・Fe粒多。黒くしまる。
b．10YR6/1　褐灰色土　L・Gブロックからなる。
c．10YR6/1　褐灰色土　Fe粒多。しまり良く、粘性強い。
d．10YR6/1　褐灰色土　Fe粒多。しまり良く、粘性強い。
e．10YR6/4　にぶい黄橙色土　Fe粒微。
f．10YR7/1　灰白色土　Fe粒多。しまり良く、粘性強い。

第344図　第9～11号井戸跡

覆土は第4号井戸跡を除き、すべて自然堆積を示している。噴砂との関係では、第8号井戸跡で興味深い事実が観察された。同跡は第5号住居跡を破壊した噴砂を切り込んで設営されているが、覆土にはそれとは異なった噴砂に切断され、壁自体もかなりずれている。このことから見て、噴砂の起源を一回の地震に限定することは、かなりの困難を伴うものと思われる。なお、第1・2号井戸跡は土層観察中に水田への引水が始まり、瞬時に水没してしまった。このため、図中に土層の説明を掲載することができなかった。

遺物の出土は総じて少なく、各井戸跡の所属時期は明確でない。覆土や分布的な状況を加味してみれば、おそらく第1～9号は中世、第10・11号は平安時代に含まれるものと推定される。

第15表　柳町遺跡井戸跡一覧

No.	グリッド	平面形	最大径(m)	深さ(m)	備　考	No.	グリッド	平面形	最大径(m)	深さ(m)	備　考
1	と—14—24	円　形	2.73	(1.90)		7	て—14—24	楕円形	1.98	(1.00)	噴砂より新
2	と—14—13	楕円形	2.00	(1.60)		8	て—14—23	円　形	2.65	(1.25)	〃
3	と—14—11	〃	1.95	0.68	SJ2より新	9	て—14—23	〃	1.07	(1.00)	
4	と—15—1	〃	2.72	(1.45)	噴砂より新	10	ち—11—19	〃	1.15	(0.75)	
5	て—14—25	円　形	1.65	(0.90)		11	て—13—2	方　形	1.05	1.60	
6	て—14—25	〃	1.33	(1.10)							

(5)　溝(全体図参照)

溝は柳町遺跡全体で23条が検出されている。分布的には調査区の北辺部、中央部、南端部に分かれる。北辺部の溝はいずれも直線的で、ほぼ南北方向のものと東西方向のものに限られる。両者は方形の区画を形成し、土坑群と井戸跡群を囲っている。遺物は中世の片口鉢などの小片がわずかに出土している。横断面は薬研形(第2・3・4・21号)、あるいは箱薬研形(第6号)を呈している。このうち、クランク状に屈曲する第2号溝は第3号溝の埋没後に掘られており、砂田遺跡の第2号溝へ繋がるものである。ただし、第1号溝は半円状で幅と深さが一定せず、自然の流路のようである。また、第7号溝は白色の粘土が充填されており、底部まで達することができなかった。噴砂とは異なる地割れではなかろうか。

第16表　柳町遺跡溝一覧

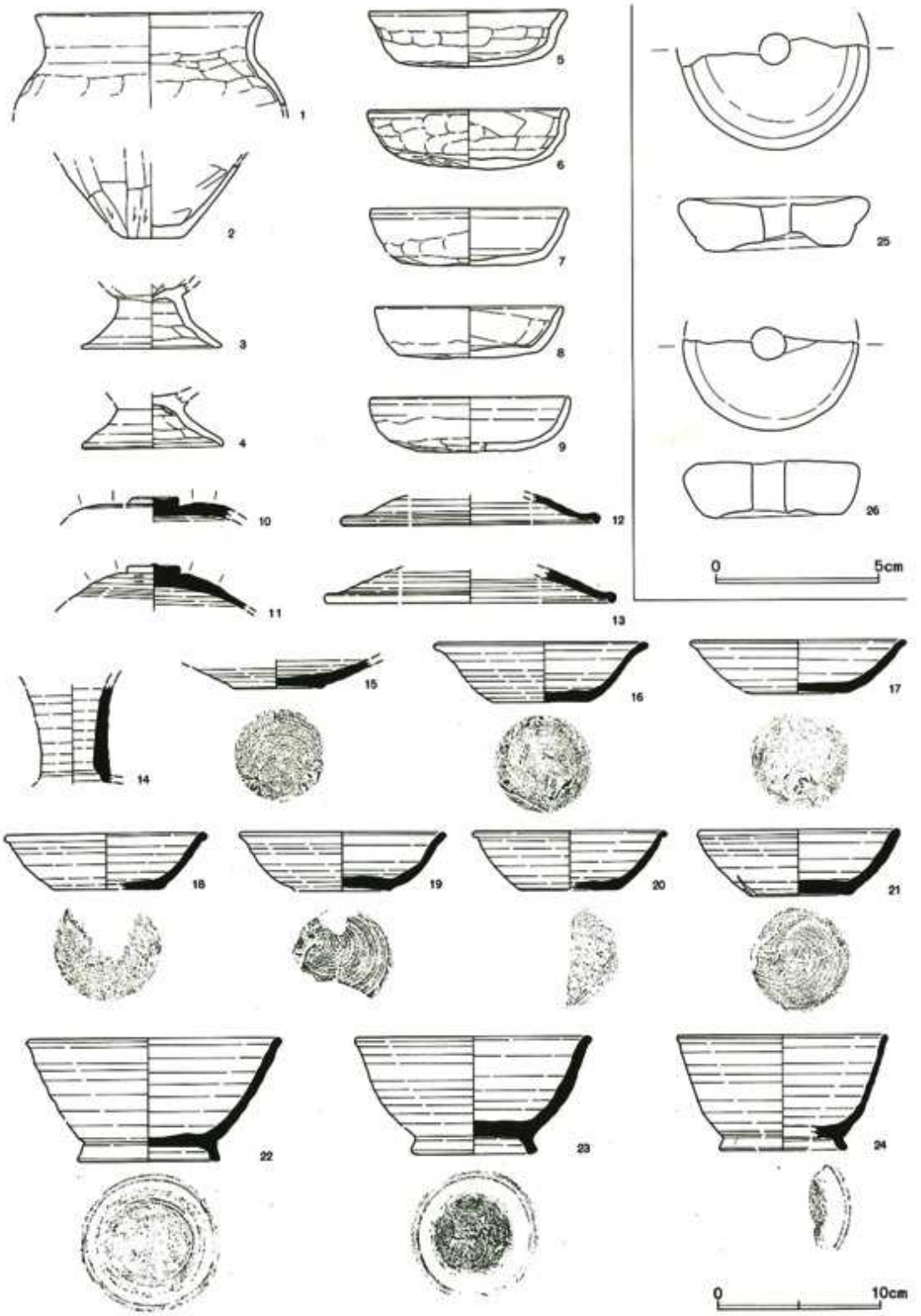
No.	大グリッド	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	備　考	No.	大グリッド	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	備　考
1	と・な-15	33.00	4.00	一定せず	—	SD2より古	13	す-9	10.50	0.70	0.24	N-0°	SJ14,SD12より新
2	な-15	35.00	2.00	0.33	—	SD1より新	14	し・す-9	10.00	0.70	0.24	N-0°	
3	な-15	4.50	2.00	0.26	N-0°		15	し・す-9	9.00	0.70	0.18	N-0°	
4	と-14	24.00	1.60	1.04	N-80°-W	SD5より古	16	た-10・11	51.50	1.20	0.39	N-90°	
5	と-14	7.50	0.70	0.14	N-80°-E	SD4より新	17	た-11	16.00	1.00	0.19	N-30°-E	
6	て・と-14	47.50	1.55	1.47	N-0°	SJ3,SB1,噴砂より新	18	た-11	7.50	0.60	0.46	N-18°-E	
7	と-14	20.00	0.10	0.20	—		19	た-12	6.00	1.50	0.11	N-0°	
8	——	—	—	—	—	現代の用水路	20	ち-11	9.00	1.20	0.32	N-0°	
9	せ-8	24.40	0.40	0.06	N-0°		21	つ-12・13	44.00	1.50	0.70	N-90°	
10	せ-8	7.80	0.50	0.21	N-25°-E		22	つ-12	5.30	1.10	0.64	N-0°	
11	せ-8	6.10	0.70	0.32	N-38°-E		23	つ-13	2.50	0.50	0.16	N-0°	
12	す-8	19.00	0.50	0.19	N-0°								

第16～20号溝は調査区中央部、埋没河川の両側に分布する。第16号溝のみは埋没河川の肩部を並走するが、他はあたかもこれへ向けて注ぎ込むかのような状態が看取される。第16号溝は調査前まで使用されていた用水路と共存しており、掘削は近世以降と思われる。第20号溝は幅や方向に規則性が認められず、人為的に掘り込まれた様子も窺えない。多分、降雨時などに流水した跡であろう。同溝からは多量の遺物が出土しているものの、そのほとんどは小破片である。「どぶ」状となったところへ投棄されたのであろうか。時期的には掘立柱建物跡群と一致する。埋没河川もこの時期にはほとんど埋まっていたようで、図示した遺物の出土は河川の上層までに限られている。埋没河川については、掘り下げの開始まもなく出水期となり、満足な調査が行なえないまま水没してしまった。この他の溝はいずれも直線的で、幅の割には深さが浅いものである。遺物は少ないが、奈良・平安時代の土師器や須恵器が出土している。

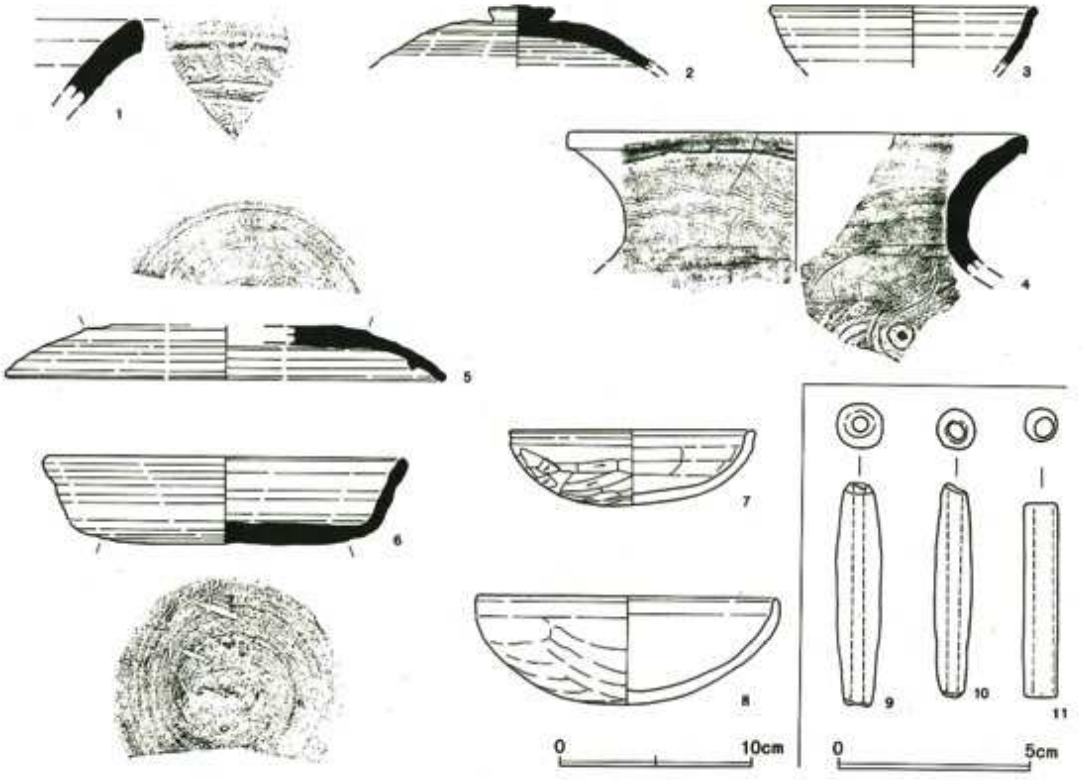
調査区南端に分布するのは第９～15号溝である。大半は南側の埋没河川(仮称　城北川)に平行しており、規模的にはあまり大きくない。遺物も少量かつ小片のため図示することはできなかったが、第９・10・11号溝からは古墳時代後期の坏などが出土している。

第20号溝跡出土遺物(第345図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕	(14.0)×(6.4)× —	底部片	W′+B′	にぶい褐	
2	〃	— ×(4.8)× 3.8	口縁片	W′+B′	橙	
3	台付甕	— ×(4.5)×裾8.7	脚部	W′+B′	〃	
4	〃	— ×(4.0)×裾4.3	〃	W+W′+R+B′	〃	
5	坏	12.0 × 3.5 × 8.8	80%	W′+B′	にぶい橙	
6	〃	12.3 × 3.6 × 9.0	70%	W+W′+B′	〃	
7	〃	(11.6)× 3.6 × 8.5	50%	W′+B′	〃	
8	〃	11.4 × 3.2 × 8.6	60%	W+W′+B′	〃	
9	〃	(12.4)× 3.3 × —	40%	W+W′	橙	
10	蓋(須恵)	— ×(2.1)× —	ツマミ部分	W′	灰白	
11	〃(〃)	— ×(2.8)× —	口縁を欠く	粗W′多	灰黄褐	
12	〃(〃)	— ×(1.8)×(16.0)	口縁	W+W′	灰	
13	〃(〃)	— ×(2.1)×(18.0)	〃	W+W′	浅黄	
14	長頸瓶	— ×(6.1)× —	頸部	W′+B′	灰白	灰釉
15	坏(須恵)	— ×(1.8)× 5.6	底部	W′+針	〃	底部、回転糸切り
16	〃	(12.4)× 3.7 × 5.9	40%	粗W′+B	〃	〃
17	〃(須恵)	(13.8)× 3.2 × 6.1	50%	W′+B′	〃	〃
18	〃(〃)	12.4 × 3.5 × 6.6	50%	W+粗W′	灰	〃
19	〃(〃)	(12.8)× 3.6 ×(6.0)	40%	W′+針+小礫	灰白	〃
20	〃(〃)	(12.0)× 3.6 ×(6.4)	30%	W+粗W′	灰	〃
21	〃(〃)	12.4 × 4.1 × 6.2	完形	W′+針	〃	〃
22	高台付椀	(16.2)× 7.6 ×高台8.6	50%	W+W′+R	〃	
23	〃	(14.6)× 7.1 ×高台8.0	40%	W′+針	〃	
24	〃	(13.0)× 6.9 ×(7.8)	20%	W+W′+B′	〃	



第345図　第20号溝出土遺物



第346図　第1・7・17・18・22号溝出土遺物

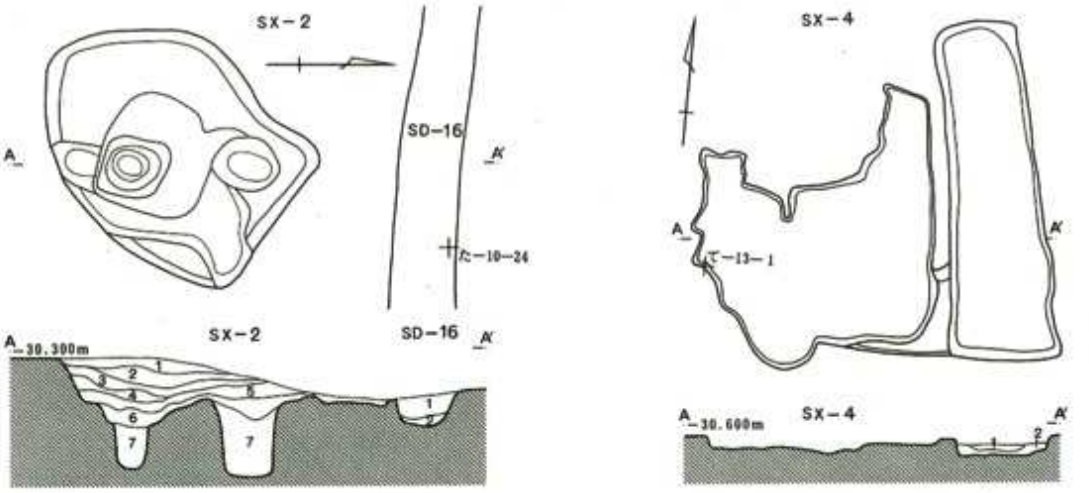
第1・7・17・18・22号溝出土遺物(第346図)

No.	器種	法　量	残存率	胎　土	色　調	備　考
1	甕(須恵)	― ×(4.4)× ―	口縁片	W+W′	灰	SD-18
2	蓋(〃)	― ×(3.4)× ―	40%	粗W′多	灰白	SD-22
3	坏(〃)	(15.0)×(2.5)× ―	口縁片	W+W′+針	〃	〃
4	甕(〃)	(24.0)×(7.2)× ―	〃	W	灰	SD-17
5	蓋(〃)	― ×(2.8)×(23.0)	30%	W+W′	褐灰	〃　No.6とセットか？
6	坏(〃)	(19.0)× 4.5 ×(2.0)	50%	W+W′	〃	〃　底部回転ヘラ削り
7	〃	12.7 × 3.8 × ―	75%	W′+B′	橙	
8	〃	(16.0)× 5.5 × ―	70%	W+W′+B′	〃	

(6)　性格不明遺構(第347図)

前記までの諸遺構に相当しないものを、確認時点では性格不明遺構として番号を付した。しかし、ここではそれをそのまま使用したため、調査で攪乱であることが判明した第1・3号は欠番扱いとした。

第2号性格不明遺構は埋没河川の南岸、た―11―19グリッドに位置する。上面は不整な楕円形を呈し、中央部には円筒状の小穴2基が穿たれている。覆土はシルト化し、小穴の壁には曲物らしき木質の付着が観察された。遺物は覆土の上層より土師器の坏、須恵器の坏や甕が出土している。奈良・平安時代の井戸跡であろうか。

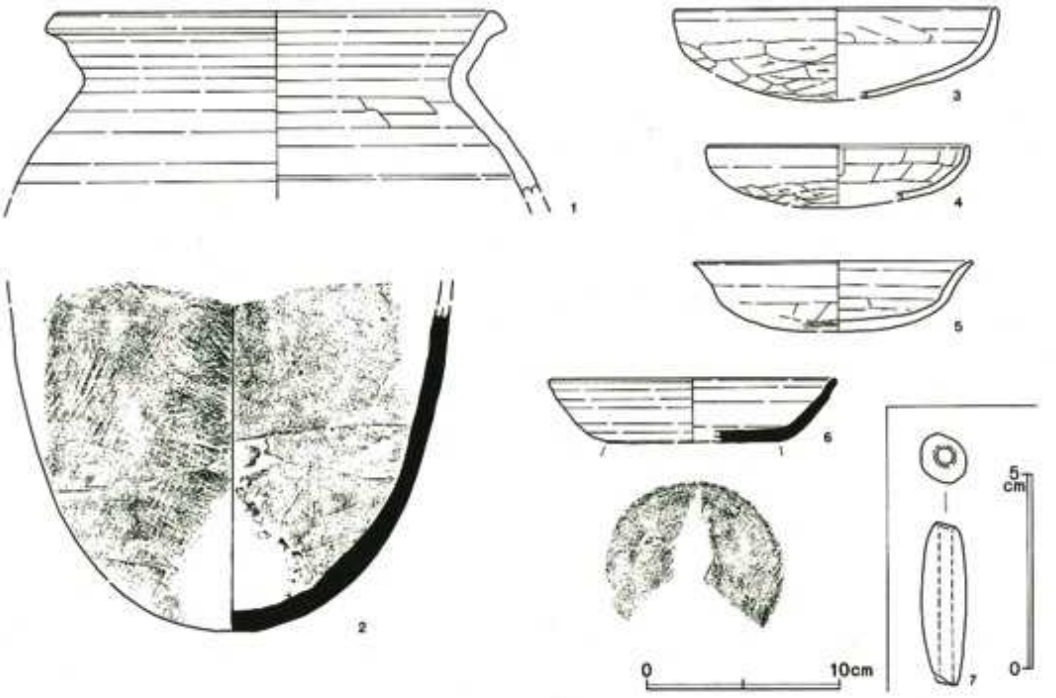


第２号性格不明遺構土層説明
1．10YR3/2　黒褐色土　L粒多。
2．10YR3/3　暗褐色土　Gからなる。L粒多。
3．10YR4/6　褐色土　粘土化したLブロックからなる。
4．10YR3/3　暗褐色土　3に準ずるが粘土化弱い。
5．10YR4/2　灰黄褐色土　粘土化進み緻密。Fe粒多。
6．10YR5/1　褐灰色土　完全に粘土化。
7．10YR5/1　褐灰色土　完全に粘土化。青味強いシルト。

第４号性格不明遺構土層説明
1．2.5Y5/2　暗灰黄褐色土　B粒微。粘性あり。
2．2.5Y6/2　灰黄褐色土　砂質でFe粒少。

0　2m

第347図　第２・４号性格不明遺構



第348図　第２・４号性格不明遺構出土遺物

第４号性格不明遺構は第21号溝の北側、て―13―５グリッドを中心に位置する。不整形と長方形を呈する二つの浅い土坑からなり、覆土はともに柔らかい。遺物は土錘がただ１点出土したのみである。

第２・４号性格不明遺構出土遺物（第348図）

No.	器種	法量	残存率	胎土	色調	備考
1	甕(須恵)	(24.0)×(10.7)× ―	口縁片	W＋W′	灰	SX-2
2	〃(〃)	― ×(16.8)× ―	胴部～底部	W＋W′	〃	〃
3	坏	(16.8)×(4.7)× ―	50%	W′＋R＋B′	橙	〃
4	〃	(13.5)×(3.2)× ―	50%	W′＋B′	〃	〃
5	〃	(14.5)×(3.0)× ―	20%	W′	にぶい褐	〃
6	〃(須恵)	15.0 × 3.4 × 9.2	60%	W＋針	灰	〃 底部回転ヘラ削り

第17表　柳町遺跡出土滑石製・土製模造品一覧

遺構	図版No.	タテ(cm)	ヨコ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	種類	遺構	図版No.	タテ(cm)	ヨコ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	種類
SJ-25	第170図6	3.9	3.9	0.7	38.86	紡錘車	SJ-53	第231図18	0.5	0.5	0.2	0.11	白玉
SJ-28	第177図26	5.9	3.1	0.2	8.01	磨製石鏃	SJ-68	第263図5	4.5	2.8	0.15	16.44	勾玉
〃	第177図27	0.6	0.6	0.2	0.20	白玉	SJ-69	第264図9	2.7	1.7	0.2	1.60	剣形
〃	第177図28	0.6	0.6	0.2	0.25	〃	〃	第264図10	2.2	1.0	―	(1.25)	〃
〃	第177図29	0.6	0.6	0.2	0.20	〃	SJ-70	第265図9	4.0	1.5	0.15	3.46	勾玉
〃	第177図30	0.7	0.7	0.2	0.20	〃	〃	第265図10	2.0	1.0	0.2	1.24	剣形
SJ-53	第231図13	0.5	0.5	0.2	0.06	〃	SJ-77	第275図20	2.1	1.6	0.15	2.05	勾玉(土製)
〃	第231図14	0.5	0.4	0.2	0.08	〃	SJ-107	第316図39	3.1	1.2	0.2	(2.86)	勾玉
〃	第231図15	0.6	0.5	0.2	0.11	〃	〃	第316図40	3.1	3.1	0.2	6.89	有孔円板
〃	第231図16	0.5	0.5	0.2	0.08	〃	SD-7	第346図11	2.5	0.5	0.2	0.92	管玉
〃	第231図17	0.5	0.5	0.2	0.08	〃							

第18表　柳町遺跡出土土錘一覧

遺構	図版No.	タテ(cm)	ヨコ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	色調	遺構	図版No.	タテ(cm)	ヨコ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	色調
SJ-59	第245図5	6.7	1.5	0.4	13.60	橙	SJ-91	第292図7	5.6	1.3	0.4	9.50	にぶい褐
〃	第245図6	5.3	1.3	0.4	8.17	〃	〃	第292図8	3.4	1.2	0.5	(4.17)	にぶい黄橙
〃	第245図7	5.7	1.1	0.4	5.94	にぶい黄橙	SJ-102	第308図4	3.3	0.8	0.2	1.59	淡黄
SJ-69	第264図8	2.5	0.9	0.3	(1.52)	〃	SJ-103	第308図1	3.2	0.8	0.2	1.50	にぶい黄橙
SJ-74	第270図3	7.4	1.9	0.4	20.06	明赤褐	〃	第308図2	3.4	0.8	0.2	1.42	〃
〃	第270図4	5.2	2.0	0.5	(15.43)	〃	〃	第308図3	3.4	0.8	0.2	1.54	〃
〃	第270図5	4.3	1.6	0.4	(9.50)	〃	〃	第308図4	3.4	0.8	0.2	1.53	褐灰
SJ-75	第270図2	3.4	0.8	0.25	1.94	にぶい黄橙	〃	第308図5	2.6	0.9	0.2	(1.12)	にぶい黄橙
SJ-77	第275図19	2.0	1.0	0.15	1.75	赤褐	〃	第308図6	2.6	0.8	0.2	(1.26)	にぶい橙
SJ-79	第276図5	5.2	1.2	0.3	5.44	にぶい黄橙	SJ-104	第308図10	3.4	0.9	0.2	1.54	にぶい黄橙
〃	第276図6	3.7	1.2	0.4	3.61	にぶい橙	〃	第308図11	3.3	0.9	0.2	2.15	〃
SJ-84	第280図3	6.7	1.9	0.5	18.84	にぶい黄橙	SJ-105	第308図16	4.0	1.3	0.4	(5.42)	灰白
〃	第280図4	5.7	1.2	0.3	7.38	橙	SD-17	第346図9	5.8	1.1	0.35	6.02	にぶい黄橙
SJ-87	第284図2	3.8	1.3	0.3	5.11	明赤褐	〃	第346図10	5.4	1.0	0.3	3.91	〃
SJ-91	第292図6	6.3	1.7	0.3	16.22	にぶい黄橙	SX-4	第348図7	4.2	1.2	0.3	4.92	〃

第19表　柳町遺跡出土土玉一覧

遺構	図版No.	タテ(cm)	ヨコ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	色調	遺構	図版No.	タテ(cm)	ヨコ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	色調
SJ-7	第141図6	2.1	1.9	0.2	6.36	明赤褐	SJ-56	第240図23	2.0	2.1	0.3	8.60	明赤褐
〃	第141図7	1.2	1.4	0.2	1.88	〃	〃	第240図24	2.1	1.9	0.3	6.86	〃
SJ-18	第160図13	2.6	2.6	0.4	15.62	橙	〃	第240図25	2.1	2.2	0.3	8.13	橙
〃	第160図14	2.7	2.1	0.3	9.91	赤褐	〃	第240図26	2.1	2.3	0.3	9.75	〃
〃	第160図15	1.6	1.8	0.2	4.30	明赤褐	SJ-65	第255図17	2.1	1.8	0.25	5.83	明赤褐
〃	第160図16	1.8	1.7	0.3	3.86	赤褐	〃	第255図18	2.2	1.7	0.3	4.45	〃
SJ-39	第200図17	1.6	1.9	0.3	5.43	明赤褐	〃	第255図19	2.2	1.9	0.3	7.81	橙
SJ-50	第225図14	2.6	2.5	0.4	13.66	橙	〃	第255図20	2.2	1.9	0.3	7.71	〃
SJ-53	第231図12	2.0	1.8	0.2	5.51	にぶい黄橙	〃	第255図21	2.2	2.3	0.5	10.21	明赤褐
SJ-55	第237図16	2.5	2.8	0.4	17.15	明赤褐	〃	第255図22	2.2	2.4	0.3	12.32	〃
〃	第237図17	1.9	2.0	0.3	6.13	〃	〃	第255図23	2.8	2.9	0.4	20.34	〃
〃	第237図18	1.9	1.9	0.3	6.04	〃	〃	第255図24	2.6	2.4	0.4	12.57	〃
〃	第237図19	1.7	2.0	0.3	5.59	〃	〃	第255図25	2.5	2.4	0.3	12.43	にぶい褐
〃	第237図20	1.9	2.0	0.3	6.40	〃	〃	第255図26	2.3	2.3	0.4	9.32	にぶい橙
〃	第237図21	2.1	1.8	0.3	5.60	〃	〃	第255図27	2.4	2.2	0.4	10.53	明赤褐
〃	第237図22	2.3	1.9	0.3	6.46	〃	〃	第255図28	2.1	2.1	0.3	8.40	にぶい褐
〃	第237図23	2.2	2.2	0.4	8.52	〃	〃	第255図29	2.2	2.3	0.3	8.46	浅黄
〃	第237図24	2.1	2.1	0.3	7.52	〃	〃	第255図30	2.4	2.6	0.4	13.08	赤褐
〃	第237図25	2.4	2.4	0.4	11.41	にぶい赤褐	〃	第255図31	1.9	2.4	0.4	12.08	明赤褐
〃	第237図26	2.4	2.1	0.3	8.18	明赤褐	〃	第255図32	2.4	2.2	0.4	10.48	橙
〃	第237図27	2.2	2.3	0.3	9.62	にぶい赤褐	〃	第255図33	2.1	2.3	0.4	8.42	にぶい赤褐
〃	第237図28	2.5	2.0	0.3	6.97	明赤褐	〃	第255図34	2.3	2.2	0.4	9.17	にぶい黄橙
〃	第237図29	2.0	2.2	0.3	8.50	〃	〃	第255図35	2.1	2.0	0.2	7.71	にぶい赤褐
〃	第237図30	1.9	2.1	0.3	6.79	〃	〃	第255図36	2.1	2.1	0.3	7.86	明赤褐
〃	第237図31	2.0	1.8	0.3	5.82	〃	〃	第255図37	1.9	2.2	0.3	7.36	橙
〃	第237図32	1.9	2.0	0.3	6.97	〃	〃	第255図38	2.2	1.9	0.3	7.19	〃
〃	第237図33	2.0	1.8	0.2	6.13	〃	〃	第255図39	2.1	1.9	0.2	5.92	明赤褐
〃	第237図34	2.0	2.1	0.3	7.32	〃	〃	第255図40	1.8	1.8	0.25	6.52	にぶい赤褐
〃	第237図35	2.1	1.8	0.3	5.71	〃	〃	第255図41	1.7	1.8	0.3	4.29	橙
〃	第237図36	1.8	1.9	0.3	5.88	〃	〃	第255図42	2.3	2.4	0.4	(8.75)	明赤褐
〃	第237図37	1.9	1.9	0.2	6.08	〃	〃	第255図43	2.2	2.3	0.4	(7.28)	〃
〃	第237図38	2.3	2.2	0.3	9.22	〃	·SJ-72	第270図1	3.0	2.6	0.6	16.74	〃
SJ-56	第240図17	2.5	2.2	0.4	8.38	にぶい黄橙	SJ-79	第276図7	2.3	2.1	0.4	8.16	橙
〃	第240図18	2.3	2.4	0.3	11.13	明赤褐	SJ-92	第293図3	2.0	1.9	0.2	6.04	明赤褐
〃	第240図19	2.2	2.3	0.4	8.93	〃	SJ-106	第312図10	2.9	2.9	0.4	20.32	橙
〃	第240図20	2.2	2.4	0.3	10.49	〃	SJ-109	第322図18	3.7	3.2	0.5	34.93	にぶい赤褐
〃	第240図21	2.3	2.3	0.4	9.14	〃	〃	第322図19	3.5	2.8	0.6	24.68	赤褐
〃	第240図22	2.1	2.1	0.3	7.44	〃	SJ-110	第326図19	2.0	2.5	0.4	10.43	橙

VI　柳町遺跡出土土器の胎土分析

1　分析の目的

柳町遺跡からは古墳時代後期の住居跡を中心に、多種多量の土器が出土している。これらはカマドやその周囲から一括して検出されるなど、良好な出土状態を示す住居跡が少なくない。そのなかでも、第57号住居跡と第107号住居跡はともに出土量が豊富で、しかも土器はほぼ同時期のものと考えられる。

そこで両住居跡から見いだされた土器を用い、下記の諸点を明らかとすべく、その胎土分析を実施することとした。

1．土器作りの方法は集団内に共通しているのか。

各住居跡の土器を一括遺物として見た場合、それぞれの傾向はどのようであるか。また、両者間に相違は認められるのか。認められるとすれば、その起因するものは。

2．「この器種」には「この胎土」といったような、用途に応じた作り方が存在するのか。

胎土中の鉱物組成や粒径、胎土自体の密度(空隙の粗密)、土器の焼成程度、その他で器種ごとに共通性や相違は認められるのか。もし、器種間に違いがあれば、それは器の大きさ(強度上)、使用状態(煮沸具と貯蔵具)、内容物(固形か液体か)など、いずれの差によるものなのか。逆に、指摘できるほどの相違が認められないとすれば、いかなることが考えられるのか。

3．搬入品といえるものがあるか。

分析に供した土器の中で、特異な胎土組成を示すものは認められるか。あるとすれば、それは非在地産であるといえるのか。

分析試料としては第57号住居跡から甕2点(第242図1・4)、坩1点(同5)、高坏1点(第243図10)、脚付碗1点(12)、碗3点(同17・18・19)を、第107号住居跡からは壺3点(第313図2・3・4)、甕2点(同5・第314図7)、坩2点(第315図15・16)、高坏1点(同23)、脚付碗1点(同20)、碗3点(第316図31・32・33)をそれぞれ選出した。

そして、これら20点の試料に対する実際の分析作業は、(株)第四紀地質研究所の井上巌氏に委託することとした。井上氏には試料提出に先立ち、前掲の分析目的と以下の考古学的な所見を伝えてある。

①分析委託した試料は、柳町遺跡の2軒の住居跡(第57号、第107号)から出土したものである。
②これらの土器は、ほぼ古墳時代後期(鬼高期)初頭に位置付けられる。
③器種は壺・甕・碗・高坏・脚付碗・坩の7種で、当該期に特徴的なものである。
④搬入品や特異と思われるものは見られず、いずれも典型的なものばかりである。

なお、提供する試料は井上氏の指示により、3㎝四方ほどを各土器から切り取った。その部位はまったくの任意で、胴部が中心ではあるものの統一性はない。

2　分析の結果

井上氏からは実験結果をふまえ、本文・図表・写真からなる大部の報告書が提出された。しかし、本書にそれをすべて掲載することは不可能である。また、内容も実験の条件や方法論にまで及んでいる。確かに、明示しなければならないことばかりではあろうが、ここでは前項に掛かる部分を中心に要約することとした。そのため、科学的な記述やデータの大半は、これを割愛した。もし、科学者としての氏の立場が損なわれるようなことがあれば、それは編集担当者である飯持の責任である。

(1)　実験

井上氏の分析は、実験段階として次の二つがまず行なわれる。第一は土器胎土中の粘土鉱物、および造岩鉱物同定のためのX線による回折試験である。第二は土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合についての電子顕微鏡観察である。そしてこれらの実験結果は、「胎土性状表」に細かく記入される。

(2)　実験結果の取り扱い

a　組成分類

三角ダイヤグラム…これはモンモリロナイト、雲母類、角閃石のX線回折試験における、チャートの強度を％で表示するもので、各胎土についての位置分類が行なわれる。

菱形ダイヤグラム…これはモンモリロナイトと緑泥石、雲母類と角閃石の組み合わせを表示するもので、やはり各胎土についての位置分類が行なわれる。表示内容は四つの鉱物それぞれについて、X線回折試験のチャートの強度を各々の組み合わせ毎に％で表わしている。

b　焼成ランク

区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量で行なわれ、これをⅠ～Ⅴの5段階に分けている。

c　タイプ分類

各々の土器胎土の組成分類に基づき、三角ダイヤグラム、菱形ダイヤグラムの位置分類による組み合わせから行なわれる。そこには「同じ組成を持った土器胎土は、位置分類の数字組み合わせも同じはずである。」という、分析にあたっての基本的な見解がある。

(3)　実験結果

a　タイプ分類

柳町遺跡出土土器の胎土は、これまでに分析の実施された深谷市上敷免遺跡(瀧瀬・山本 1993)、樋詰遺跡(岩瀬 1991)、新屋敷東遺跡(田中 1992)、熊谷市北島遺跡(中村 1989)、行田市小敷田遺跡(吉田 1991)とともにタイプ分類されている。以上の遺跡から出土した土器はA～Sまでの19タイプが認められるが、最も多い土器のタイプはJタイプで、S・K・Eタイプがこれに続く。柳町遺跡のものは次の8タイプに分類されている。各タイプ中の数字は、後掲の石英一斜長石相関図に示した土器番号である。

第20表　胎土性状表

試料 No.	タイプ分類	焼成ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物									ガラス
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Ka01	Qt	Pl	Cr	
1	J	III	7	9		123	92	172			2824	378		中粒
2	K	III	7	20		118	80				2648	560	138	中粒
3	C	III	1	16	190	135	98				2399	375	135	中粒
4	K	III	7	20		109	89				2923	361		中粒
5	M	III	8	20		105					1680	518	237	中粒
6－1	J	III	7	9		166	114	218			1931	871		中粒
6－2	K	III	7	20		154	113				2041	609	164	中粒
7－1	P	III	12	14	239		158		100		923	724		中粒
7－2	B	III	1	15	174	124	138				991	691		中粒
8	K	III	7	20		125	124				3151	687	138	中粒
9	P	III	12	14	104		69				2502	532		中粒
10	I	II－III	6	20		114	198				1280	902		粗～中粒
11	C	III	1	16	166	120	80				2787	520		中粒
12	K	III	7	20		107	85				2903	406		中粒
13	J	III	7	9		124	87	176			2744	692		中粒
14－1	I	III	6	20		136	162				3220	956	176	中粒
14－2	A	III	1	1	167	141	95	166			2952	544	175	中粒
15－1	J	III	7	9		108	81	121			3046	498		中粒
15－2	I	III	6	20		148	158				3448	1357		中粒
16－1	J	III	7	9		229	188	228			1577	449		中粒
16－2	J	III	7	9		234	220	226			1306	572	133	中粒
17	K	III	7	20		119	85				2739	1149		中粒
18－1	K	III	7	20		153	126				3412	1927	207	中粒
18－2	K	III	7	20		96	85				3389	1264		中粒
19	J	III	7	9		133	125	180			1453	666		中粒
20	B	III	1	15	166	113	116		67	84	1973	843		中粒

焼成ランク　Mu：I　Mu-Cr：II　Cr-glass：III　glass：IV

Mont：モンモリロナイト　Mica：雲母類　Hb：角閃石　Ch：緑泥石　Ka：カオリン　Hy：紫蘇輝石　Qt：石英　Pl：斜長石　Cr：クリストバーライト　Mu：ムライト

Aタイプ…14(第107号住居跡の甕5)。胎土中にモンモリロナイト、緑泥石、雲母類、角閃石を含むもの。

Bタイプ…7(第57号住居跡の甕4)と20(第107号住居跡の壺2)。モンモリロナイト、雲母類、角閃石を含み、緑泥石に欠けるもの。

Cタイプ…3(第57号住居跡の椀17)と11(第107号住居跡の椀33)。Bタイプとは組成的に類似しており、同じグループに入るとされるもの。

Iタイプ…10(第107号住居跡の椀31)、14(同甕5)、15(同甕7)。雲母類、角閃石を含み、モンモリロナイトと緑泥石に欠けるもの。

Jタイプ…1(第57号住居跡の椀18)、6(同甕1)、13(第107号住居跡の高坏23)、15(同甕7)、16(同坩16)、19(同壺4)。雲母類、角閃石、緑泥石を含み、モンモリロナイトに欠けるもの。

Kタイプ…2(第57号住居跡の椀19)、4(同脚付椀12)、6(同甕1)と8(同坩5)、12(第107号住居跡の脚付椀20)、17(同坩15)、18(同壺3)。Iタイプに類似するが、強度が異なるため、位置分類は異なるもの。両タイプを合わせると、前記した遺跡の土器の40%がここに含まれる。このことから、最も在地あるいは在地近傍の可能性が高いとされる。

Mタイプ…5(第57号住居跡の高坏10)。雲母類を含み、モンモリロナイト、角閃石、緑泥石に欠けるもの。

Pタイプ…7(第57号住居跡の甕4)と9(第107号住居跡の椀32)。モンモリロナイト、角閃石を含み、雲母類、緑泥石に欠けるもの。

以上の結果からは、「柳町遺跡の土器においてもJとKの2タイプの胎土が主流である。Jタイプ、Kタイプのいずれも第57号住居跡と第107号住居跡の土器が混在し、器種も椀、高坏、甕、坩、壺と混在していることがわかる。この様なことから推察して、第57号住居跡と第107号住居跡の土器は関連性が高いと判断される。」ことが示されている。

また、二つのタイプに重複する土器があるが、これは「褐色のよく焼成された部分と暗灰色～黒色の幾分焼成の低いと考えられる部分の2箇所について分析した。…中略…土器におけるガラスの生成状況はほとんど同じで、大きな差を判別できなかった。黒色の部分は地面と直接接触している部分であるが、褐色部分との間には有為な差は判別できない。このことは土器焼成において全体に温度が多きな差なく回っていることを物語っているのではなかろうか。すなわち、ある一定温度領域を長時間継続しているのではないかと推察される。」と説明されている。

b　石英(Qt)―斜長石(PI)の相関について

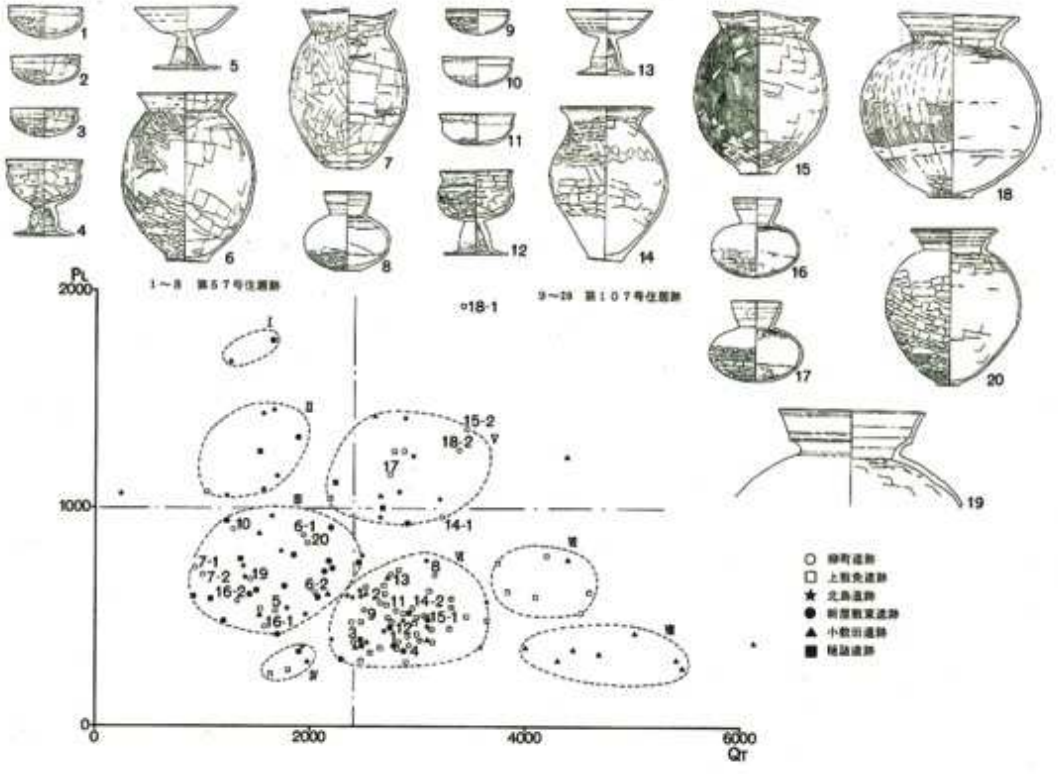
前段までの分析に加え、胎土中に混ぜられる砂、つまり石英と斜長石の比率も計測されている。これは「自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々固有の石英―斜長石比を有しているといえる。」という前提のもと、「土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。」という理由から実施されている。

そして、石英(Ｑｔ)―斜長石(Ｐｌ)の強度を図化したものが第349図である。タイプ分類に用いられた６遺跡は八つのグループに分けられるが、柳町遺跡のものはそのうちの三つのグループに属する。

Ⅲグループ…５(第57号住居跡の高坏10)、６(同甕１)、７(同甕４)、10(第107号住居跡の椀31)、16(同坩16)、19(同壺４)、20(同壺２)。石英の強度が2200より小さく、斜長石の強度が100より小さい領域に属するもの。壺や甕など大きい土器が集中し、胎土としてはＪタイプが最も多い。

Ⅴグループ…14(第107号住居跡の甕５)、15(同甕７)、17(同坩15)、18(同壺３)。石英の強度が2200より大きく、斜長石の強度が100より高い領域に属するもの。壺、甕、坩などの大きい土器で構成される。胎土はＫタイプが特徴的である。

Ⅵグループ…１～３(第57号住居跡の椀17～19)、４(同脚付椀12)、８(同坩５)、９・10(第107号住居跡の椀32・33)、12(同脚付椀20)、13(同高坏23)、14・15(同甕５・７)。石英の強度が2200より大きく、斜長石の強度が100より小さい領域に属するもの。坏と高坏が主体となるもので、小型の土器が集中する。胎土のタイプとしてはＪとＫの２タイプが主体で、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。



第349図　石英(Ｑｔ)―斜長石(Ｐｌ)相関図

(4) まとめ

上記のような分析結果をふまえ、柳町遺跡の土器については次のようにまとめられている。

- 土器胎土は9タイプに分類されたが、試料20点の内12点はJとKタイプに属する。個体数の多いことから判断して、この2タイプは在地あるいは在地近傍の可能性が高い。
- IIIとVグループは壺、甕、坩などの大きい土器で構成されるグループ、VIグループは碗と高坏などの小型の土器で 構成されるグループというように比較的明瞭に分かれている。
- 第57号住居跡と第107号住居跡はIIIとVIグループにおいてともに共存し、同じ傾向を示していることから判断して、関連性は高い。
- VIグループに属する上敷免遺跡の土器の胎土はJとKタイプのものが多く、柳町遺跡の土器と類似する傾向を示しており、関連性が高いと推察される。

以上が井上氏より提出された報告書の概要である。これを分析の目的で述べた3点の事柄について、補足的に触れてみることとする。

まず、**土器作りの方法は集団内に共通しているのか**という点である。これに関しては井上氏の論拠するところでもあり、単一遺跡を越えた次元での扱いとなっている。すなはち、柳町遺跡の2軒はいうに及ばず、周辺の上敷免遺跡や新屋敷東遺跡などをも対象とし、その総体的な関係で論じられているのである。こうした場合、遺跡毎の分析試料には時期的な差が見られるため、集団の輪郭がやや不鮮明になるのではないかとの印象を受ける。いずれにせよ、柳町遺跡の2軒には個々に際立った特徴や相違はなく、関連性の高いものと報告されている。

「この器種」には「この胎土」といったような、用途に応じた作り方が存在するのかという点については、石英と斜長石の相関関係において、大型の土器(壺・甕・坩)と小型の土器(碗・高坏・脚付碗)が集中するグループのあることが指摘された。その理由については述べられていないが、後日伺ったところによると、可能性としては土器自体の大きさに起因するとのことであった。それは製作上の問題で、使用状態の違いによるものではないとのことである。

三番目は**搬入品といえるものがあるか**という点である。しかし、報告書では試料20点の内12点がJとKタイプに属し、在地あるいは在地近傍の土器である可能性が高いとされているにとどまる。残る8個についても、石英と斜長石の相関を加味すれば、特異な存在は認められていない。第107号住居跡の壺3が唯一、石英一斜長石相関図において異質である。ところが、壺3は褐色と黒色の部分2点を分析しており、斜長石の強度が突出しているのは黒色の部分である。石英の強度は同様であることから見れば、粗砂粒を多く混入していた影響と考えられるものである。このように分析した20点の試料の中には、搬入品と鑑定されたものは存在しない。

今回の胎土分析では、住居跡ごとの土器には相違が見られず、逆に関係の深いものであること、大型の土器と小型のそれでは砂の混合比に差のあること、主体的となる胎土のタイプがそれぞれ判明した。これを『在地の同一集団による、土器の作りわけ』と捉えることも可能であろう。

さらなる検証や、より具体的な内容を明らかとしていくには、分析依頼者が確たる目的意識を持ち、分析者と意志の疎通を強く図ることが重要である。

Ⅶ　結語

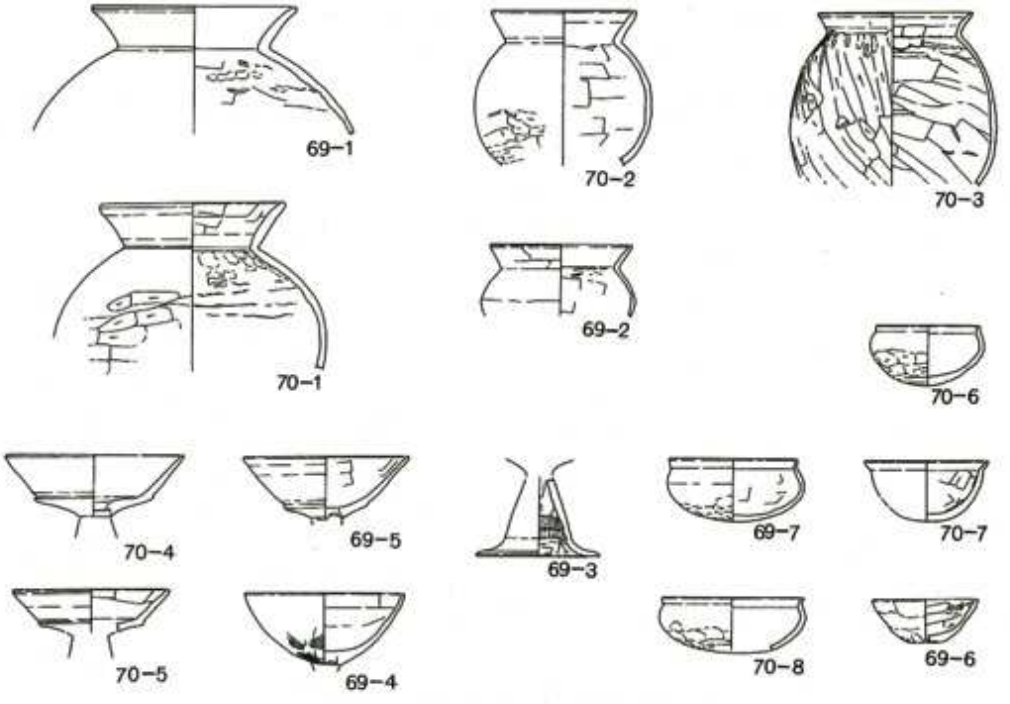
1　砂田・柳町遺跡の出土土器について

砂田および柳町遺跡からは大量の土器を伴い、合わせて118軒もの住居跡が検出されている。これらは古墳時代の中期から平安時代まで、集落としての盛衰はあるものの、おおよそ連続して営まれている。その中心になるのは古墳時代の後期(鬼高期)で、全体の8割近くはこの時期に属するものである。柳町遺跡の南側に展開する城北遺跡や居立遺跡をはじめ、周辺に存在する多くの遺跡も同様の傾向が指摘できる。妻沼低地への進出は最高潮を迎える。

砂田・柳町遺跡の出土土器を通観すると、そこにはいくつかの画期を見いだすことができる。特に、鬼高期のいわゆる有稜模倣坏が出現、やがて主流となっていく過程の認められることは、深谷市域において看過できないものである。初現期の模倣坏やカマドについては、児玉地方に多くの例が報告されている。しかし、近年は妻沼低地においてもこれらの波及が明らかとなりつつある。

そのため、本項では砂田・柳町遺跡出土土器のうち、集落の出現から模倣坏の成立に係る時期のものをⅣ期に区分し、その変遷を略示することとした。加えて、住居跡もそれぞれの時期毎に特徴が備わるため、これを併記した。

なお、Ⅴ期となるべきもの以降は、力量不足からここではまったく触れることができなかった。近接する新屋敷東遺跡・本郷前東遺跡の分類(田中　1992)に準拠すれば、同書の第Ⅲ期以降に相当することになろう。



第350図　砂田・柳町遺跡　第Ⅰ期の土器

(1)　第Ⅰ期(第350図)

柳町遺跡の第69・70号住居跡出土土器が挙げられるにすぎない。両住居跡(本来的には1軒の拡張)の出現をもって、砂田・柳町遺跡における集落形成の嚆矢とする。住居跡の平面はきれいな方形を呈し、各隅部はおよそ直角をなす。第70号住居跡の面積は両遺跡を通じて最大である。カマドは既に備わるものの、形状は後出の住居跡が重複するために明確ではない。袖や粘土、煙道の存在は確認できなかった。燃焼部は大きく楕円形に窪み、その一部は壁外へ突出している。貯蔵穴は長さに比べて幅のかなり狭い長方形で、カマドとは反対の壁際、向かって右側の隅部寄りに設けられている。

土器の組成は壺・小型壺・甕・高坏・椀・坏からなる。出土量が少ないうえ、器形全体の判明するものもほとんどないが、砂田・柳町遺跡を通じて最も古く位置付けられる土器群である。他に特徴的な遺物としては、滑石製模造品の勾玉(第69号住居跡)と剣形(第69号住居跡1点、第70号住居跡2点)がある。

壺　大型(第69号住居跡―1、第70号住居跡―1)と小型(第69号住居跡―2、第70号住居跡―2)の2種があるが、口縁はともに素口縁である。胴部は球形であり、最大径はその中位にある。ただし、小型の第69号住居跡―2は算盤玉状を呈し、器肉も薄い。口縁は「く」字状に強く屈曲し、大型のものはやや外彎する。器面調整は内面に横方向のヘラなで、外面に同じくなで状のヘラ削りが観察される。

甕　わずかに1点が出土したのみである。下半を欠失するものの、胴部は球形となり、最大径も中位にくるものと思われる。口縁部は短く、外反はさほど強くない。残存範囲での外面は、縦方向に2段のヘラ削り、内面は横から斜方向のヘラなでが施される。

高坏　第69号住居跡から3点(3・4・5)、第70号住居跡からも2点(4・5)出土している。いずれも破片であり、全体の窺えるものはない。坏部は段を有するものと、柱状部から滑らかに立ち上がるものとが見られる。前者はさほど深さがなく、口縁は直線的ながらも、長さにばらつきがある。端部は先細り、尖鋭的となる。第69号住居跡―5は段の表現が弱く、屈曲が緩やかである。脚の柱状部はわずかに膨らみ、内面下位に粘土紐の接合痕と指頭痕を残す。裾部は低平に延び、柱状部との境は横なでによって凹面気味となる。裾径はあまり大きいとはいえず、口径を上回ることはないと推測される。後者の第69号住居跡―4は深みのある坏部となり、器壁は緩やかに内彎して立ち上がる。外面には縦方向に施された刷毛なでが残る。

椀　第69号住居跡―7、第70号住居跡―6・8のように、体部の張りが強く胴径が口径を上回るもの(Aタイプ)と、第70号住居跡―7のように、体部の彎曲が弱く最大径が口縁にあるもの(Bタイプ)とに分けられる。さらに前者は器高の高さで二分できる。前者の口縁は短く屈曲が強い。後者のそれはやや長めで内彎気味となっている。

坏　第69号住居跡―6の破片1点のみである。平底で比較的小型のものである。器壁は底部より内彎気味に立ち上がり、口縁は大きく開いている。内外面ともに横方向のヘラなでが施されるが、外面は摩耗のためはっきりしない。

(2)　第II期(第351図)

第II期は砂田遺跡第５・７号住居跡の出土土器に代表される。第４・６号住居跡からの出土は少ないが、これらも本期に属するものである。これらの住居跡はほぼ円形の配置を取り、住居跡群として独立している。一単位集団と捉えることができよう。柳町遺跡には本期に属するものは認められない。住居跡の平面形は第Ⅰ期同様、整った方形を呈している。隅部は文字どおり直角で鋭く、壁も膨らみをまったく持たない。カマドには壁より削り出された袖が備わり、焚き口部にも低い突堤が巡る。奥壁は著しく焼けながらも、煙道の設けられた様子は認められない。燃焼部はほぼ平坦に成形され、きれいな灰が厚く堆積している。また、カマドの脇に存在する浅い掘り込みも特徴的である。貯蔵穴は大型の方形で、より隅部へは寄るものの、前期の位置を踏襲している。

出土土器には壺・甕・小型甕・甑・坩・高坏・椀・坏がある。第７号住居跡は焼失住居であり、機能時の状況をとどめているものと考えられる。この場合、第７号住居跡が保有した土器の内訳は壺２、甕８、小型甕１、坩１、高坏２(ただし破片)、椀６、坏２となる。第５号住居跡も同様であるが、煮沸具である甕の多いことが注意を引く。

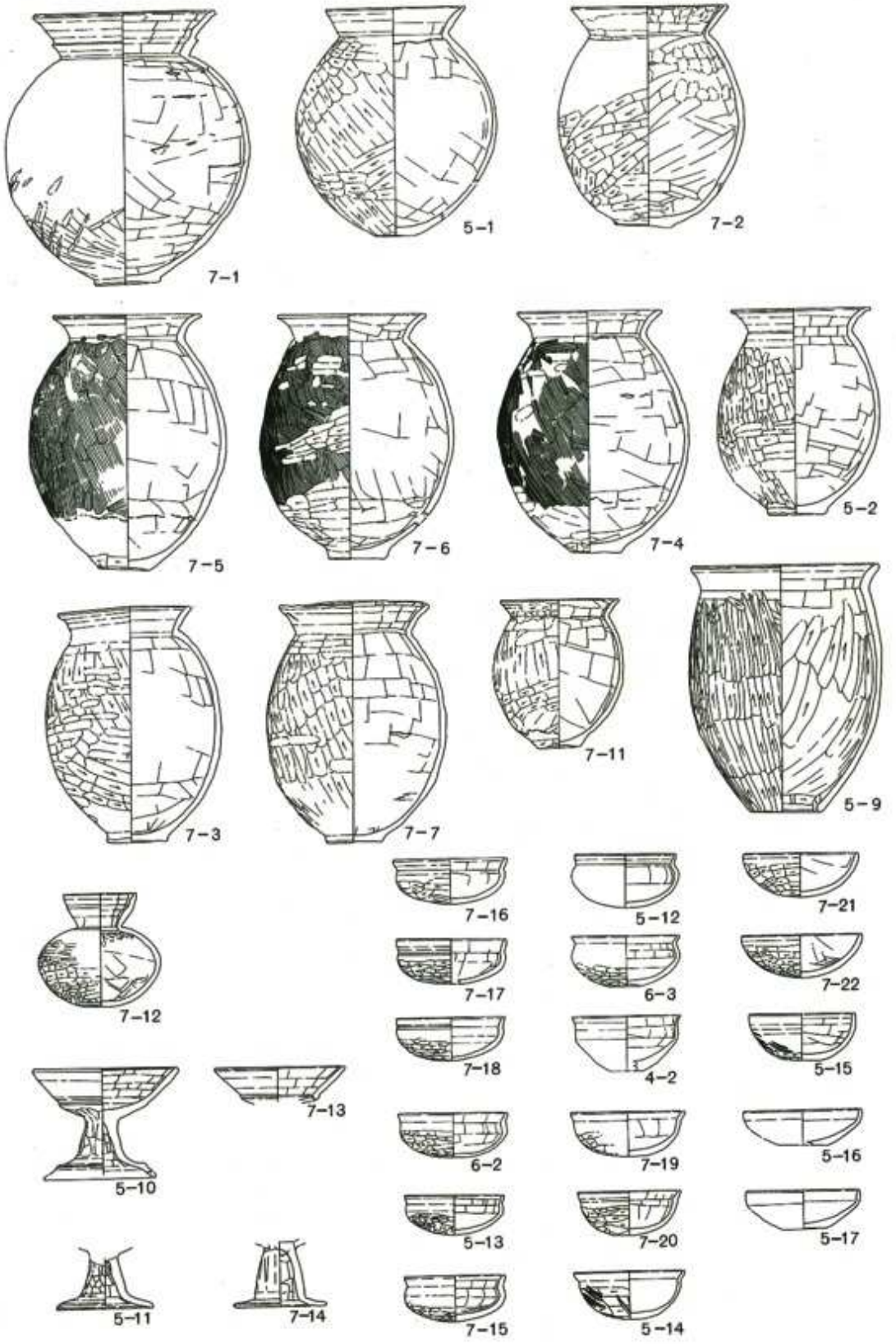
壺　第Ⅰ期のものに比べて胴部はやや長くなり、肩の張りも弱くなる。口縁は段を持つもの(第７号住居跡―１)が現れる。段部は鋭く、頸部で強く屈曲する。口縁端部は平坦に仕上げられ、角頭状を呈する。素口縁のものは第Ⅰ期よりも口縁が短くなり、外反は緩くなる。

甕　第Ⅰ期には比らぶべきものが乏しいが、全体的には長胴化の進行していることは看取できる。最大径は胴中央部からそのわずか下にあり、ために器体の安定度は高い。径部のくびれはいまだ強く、口縁の外反も強さを保っている。外面は縦から斜め方向の刷毛調整を主体としたもの(第７号住居跡―４～６)と、同じくヘラ削りを主体としたもの(第５号住居跡―２、第７号住居跡―３・７)が見られる。口縁の外反や胴部の張りは、前者のほうが優るようである。小型の甕(第７号住居跡―11)は少ない。

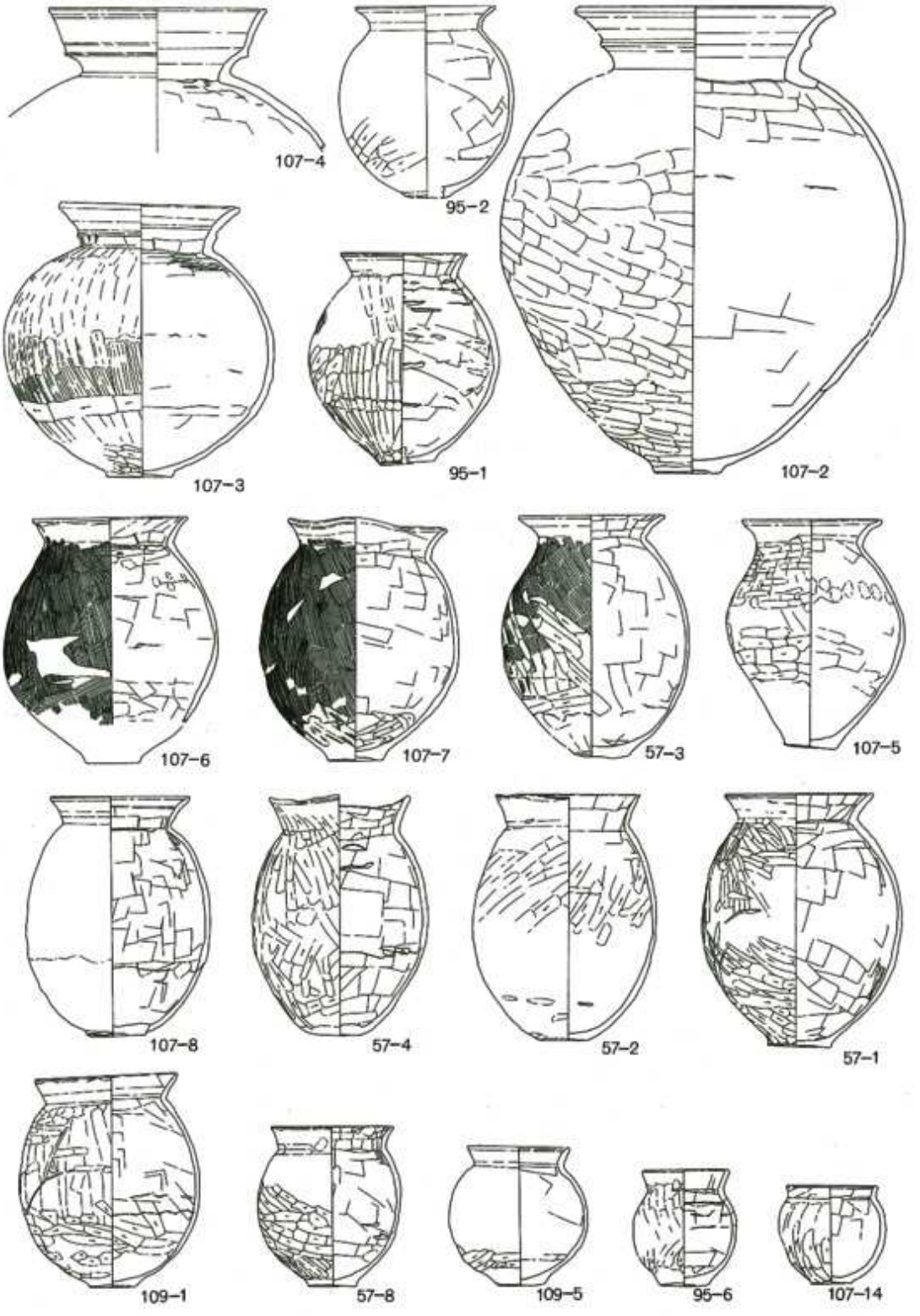
甑　第５号住居跡から１点出土したのみである。第III期のものとはタイプが異なるが、明らかに第IV期へと引き継がれていく大型の甑である。器肉は厚めで、かなり堅牢な作りとなっている。胴部の膨らみは強く、胴径と口径がほぼ一致する。径部のくびれや口縁部の外反はあまり大きくない。口縁は肥厚し、端部は丸く仕上げられる。器表面は下から上へ向け、４段に細かく丁寧なヘラ削りが施される。

坩　第７号住居跡から１点出土している。胴部は楕円状を呈し、径部は強くくびれる。口縁は内彎して立ち上がり、端部は先細って尖り気味となる。口部縁中位には弱い稜を有し、これを境に内側へ屈曲している。胴部外面は上位にヘラ磨き、下位にヘラ削りが施される。底部はヘソ状にわずかな窪みが残る。

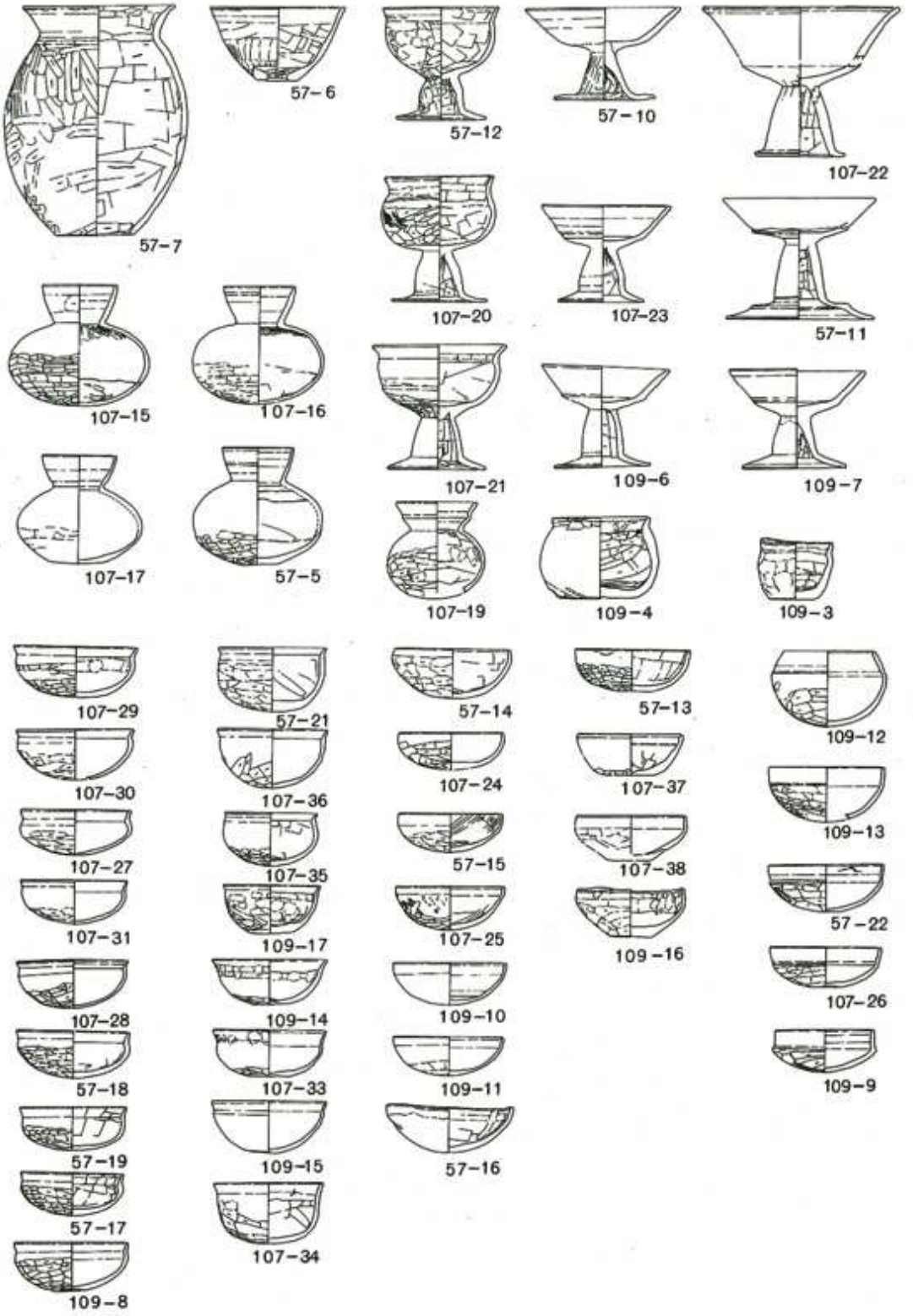
高坏　第５号住居跡―10・11、第７号住居跡―13・14の４点が挙げられる。坏部には段を有してはいるが、第Ⅰ期のものよりも表現が弱く、稜に近くなっている。内面の屈曲は消え、全体に緩やかな彎曲となっている。口縁端部は平坦に成形される。脚には有段のもの(第５号住居跡―10)も残るが、裾の広がりは小さいと思われる。段を持たないものも裾は短く、第５号住居跡―11のように内彎気味に踏ん張るもの、第７号住居跡―14のように外彎して反り気味になるものがある。第Ⅰ期に見られた坏部が丸く深いものは、第II期までに姿を消すようである。



第351図　砂田・柳町遺跡　第II期の土器



第352図　砂田・柳町遺跡　第Ⅲ期の土器(1)



第353図　砂田・柳町遺跡　第Ⅲ期の土器(2)

塊　第Ⅰ期Aタイプの後続するものでは、第5号住居跡―13、第6号住居跡―2、第7号住居跡―15～18が挙げられる。いずれも体部の膨らみが弱くなり、最大径は口縁部に移動している。口縁部はやや長く延び、端部の厚さを増している。体部外面にはヘラ削りがなされるものの、第Ⅰ期のものよりもより上位まで及んでいる。第5号住居跡―12と、第6号住居跡―3もこのタイプに含まれようが、体部の張りは比較的強い。前者は器高が高く、くびれた口縁は受口状に内彎している。その端部は平坦となり、わずかに内傾する。また、後者は口縁が強く内彎し、底部はヘラ削りによって円形の窪みとなっている。

Bタイプのものには第5号住居跡―14、第7号住居跡―19・20がある。第Ⅰ期に比べれば、器高に対して口径が広くなり、器壁の立ち上がりは緩やかである。口縁は肥厚し、内彎的とはいえなくなっている。このほか、第4号住居跡―2のように平底で体部が屈曲し、直立して外反する口縁に至るものも見られる。

坏　坏には次の3タイプが認められる。Aタイプ…丸底で器壁は緩やかに内彎するもの。口縁端部はやや尖り加減となる。内面はヘラなで、外面は細かいヘラ削りが施される。第7号住居跡―21・22が相当する。Bタイプ…平底で器壁の彎曲は大きく、口縁は直立気味となるもの。器高はやや高く、底部外縁はヘラ削りされる。第5号住居跡―15のみ。Cタイプ…平底で器壁は直線的に広がり、口縁は強く屈曲して直立するもの。口径に対して、器高はかなり低い。口縁端部は丸味を帯びる。底部は広く、安定度は高い。器面は荒れているが、なで調整を基調としているようである。第5号住居跡―16・17が相当する。

(3)　第Ⅲ期(第352・353図)

柳町遺跡第57・95・107・109号住居跡出土土器に代表される。第52・104号住居跡も本期に含まれよう。これらの住居跡の分布は調査区の南半部に限られ、北半部には及んでいない。しかも位置的には調査区中央部の埋没河川、および城北川と仮称した南端の埋没河川に沿っている。住居跡の平面は長方形を呈することで、第Ⅱ期までと一致はするが、隅部はかなり丸くなっている。壁もわずかながらも膨らむ傾向があり、全体的に鋭さが鈍っている。カマドはすべての住居跡で確認されている。袖は壁より舌状に削出されたもので、概して燃焼部の幅は狭い。焚き口部には第Ⅱ期のカマドに見られたような突堤は巡らず、火床面はいくぶん窪んでいる。煙道は第104・107・109号住居跡で検出されている。第109号住居跡の燃焼部奥壁は立ち上がりが緩やかであり、それまでのものとは異なる。定形化カマドの初現と捉えても良いのであろうか。貯蔵穴は第95・104号住居跡がカマドの左側隅部、他はカマドとは反対側、左側隅部に備わる。後者の場合も位置的には第Ⅱ期までとは逆になる。いずれの場合も隅部に寄っていることに変わりはないが、対象位置への移動は注意されよう。あるいは、入口部の移動をはじめとする居住空間の転換など、この時期に至って住居の機能に変化が生じたのであろうか。平面形はともに楕円が基本となり、(長)方形のものは認められない。

1軒あたりの土器出土量は豊富で、その組成は壺・小型壺・甕・小型甕・甑・小型甑・坩・脚付椀・高坏・椀・坏などである。

壺　基本的には第Ⅱ期の形態や技法を踏襲している。ただし胴部は長胴化、ないしは第107号住居跡―3のように潰れて扁平化している。口縁はやや短くなり、頸部の屈曲も緩くなる。有段口縁の壺

のうち、第107号住居跡―4は口縁部が受口状となり、端部は凹状を呈している。他のものとは系譜を異にするものである。

甕　総じて長胴化が進行する。それも器面がヘラ削りされたものに顕著である。胴部最大径は定まらず、上位にあって安定を欠くもの(第107号住居跡―5)、下位にあって下膨れとなるもの(第107号住居跡―6・7)などが見られる。肩の張りや頸部のくびれは弱く、口縁の外反度も低くなっている。ヘラ削りはかなり雑となり、方向は不揃いである。第57号住居跡―2や第107号住居跡―8のように、丁寧になで消されたものもある。小型の甕は形態や大きさが多様で、この時期での発達が窺われる。

甑　出土はさほど多くない。大型のもの(第57号住居跡―7)はいわゆる甕形を呈している。第II期から繋がるものではないが、古い特徴を残していると考えられる。ちょうど甕の底部を切り取ったような形で、製作の技法もなんら変わることはない。第57号住居跡―6の小型の甑は、断面が逆三角形となる鉢状のものである。底部は平坦にヘラ削りされ、器肉は厚い。体部は大きく開き、口縁はほとんど外反しない。

坩　第II期のものに比し胴部は潰れて扁平になり、径はかなり大きくなる。頸部は強くくびれるが、口縁の開きはわずかながら小さくなる。その口縁は内彎して立ち上がり、第II期のものほどではないにせよ、端部は尖り気味となる。中位の段(稜)はほとんど認められなくなっている。底部は第107号住居跡―15・16が丸底、第57号住居跡―5(やや凹面)と第107号住居跡―17(広い凸面)が平底である。

脚付埦　第I・II期での出土は確認できなかったが、もちろん本期に至って出現する器形ではない。埦部は深く、脚よりも高さが優る。口径は裾径を凌ぐが、第107号住居跡―20のみは最大径を埦体部に有する。口縁の外反は第107号住居跡―21が強く、内面には稜を持つ。他はS字状に緩やかなものとなっている。脚の柱状部は膨らみ、裾はやや外彎する。この器種は第IV期を待たずに姿を消すようである。

高坏　第II期から継続するタイプとしては、第57号住居跡―11、第107号住居跡―23、第109号住居跡―6・7がある。このうち裾部に段を持つ第57号住居跡―11は、その表現がしっかりしており、裾の延びも長い。坏部は失うものの、やはり段は鋭く、古相が認められる。

他のものは坏部の段が退化し、「稜」程度となっている。脚の柱状部はいずれも膨らみを有し、強く屈曲して裾部へ至る。最大径は口縁にあり、裾径を上回っている。第107号住居跡―22は大型品で、緩やかに外彎する坏部は深い。裾は極度に短く図示したが、残存部がわずかであるため確信が持てない。第57号住居跡―10は坏部の段が不明瞭で、単なる屈曲となっている。脚部も膨らまず、裾は折れ曲がって反り上がり気味となっている。

埦　第I・II期のA・B両タイプが主流である。Aタイプのものとしては第57号住居跡―17～20、第107号住居跡―27～32、第109号住居跡―8が挙げられる。形態的には第II期のものとほとんど変わらないが、体部の張りはより弱まるようである。

Bタイプのものには第107号住居跡―33、第109号住居跡―14・15がある。いずれも平底で、口縁の外反は弱い。他に第57号住居跡―21、第107号住居跡―34～36、第109号住居跡―17などのように、体部が深めで口縁の短いものも多く出土している。

壺　器形全体の窺えるものは少ないが、いくつかのタイプが認められる。第一は第38号住居跡―2・3、第106号住居跡―1のように、第II・III期に見られた口縁に段を持つタイプのものである。段の表現は弱くなり、口縁端部は角頭状で凹面気味になる。第55号住居跡―1、第65号住居跡―1もここに含まれようが、頸部のくびれは弱く、口縁は短い。

第二のタイプは第33号住居跡―1、第38号住居跡―4、第110号住居跡―8のような小型の甕形を呈するものである。胴部はやや潰れた球形で、最大径をその中位に持つ。口縁はあまり外反せず、内彎して立ち上がる。中程に凹線状の段を有し、模倣坏を乗せたような形となる。第65号住居跡―2は口縁部に段をもたないものの、形態的には同様である。

これらのほかに、第38号住居跡―1のような広口で素口縁のものも存在する。

甕　長胴化はさらに進行し、ほとんど楕円形となる。頸部ではあまりくびれず、口縁の外反もより弱い。器面を刷毛調整するものは本期にも見られるが、ヘラ削りのものに比べれば、その数は極めて少ない。次期までは残らず、すべてヘラ削りに置換するようである。

甑　大型品のみで、小型のものは見られなかった。第33号住居跡―8は胴部が膨らみ、頸部のくびれが強い。第III期の甕形甑に系譜を求められよう。孔径は大きく、器面調整は外面が縦方向のヘラ削り、内面が同じく削り状の強いなでとなっている。

第65号住居跡―7、第106号住居跡―2は上記とは異なり、第II期のものの延長上にある。胴部は張らず、頸部からなだらかに底孔部に至る。

坩　胴部はやはり潰れて扁平ではあるが、胴部の最大径がかなり小さくなり、全体的に第II期のものより小ぶりである。口縁は長く内彎せずにまっすぐ延び、端部は細まって尖っている。底部はすべて丸底で、外面のヘラ削りは粗い。

高坏　第38号住居跡―5、第56号住居跡―6は第III期の系譜を引くもので、ともに坏部は深く、口縁は外彎して開く。体部の段は比較的しっかりしている。脚の柱状部はわずかに膨らみ、裾部との境は屈曲が弱い。裾は短く、口径に比してかなり小さい。このタイプは次期には見られなくなる。これらとは別に第38号住居跡―6、第55号住居跡―4、第106号住居跡―4のように、模倣坏に脚を付けたものも認められる。全体の判明するものはないが、脚はかなり低いようである。裾は外反し、接地面は端部よりも内側になっている。第IV期になって出現する特徴的な器種である。

椀　第50号住居跡―12・13、第106号住居跡―9が挙げられるにすぎない。第50号住居跡―13は第III期までのAタイプのもので、口縁の外反が弱く、腰だかとなっている。第106号住居跡―9も先行するものがあるが、小型で潰れたようになっている。これまで食膳具の主流であった椀は、本期に至り、模倣坏にその地位を完全に逆転されている。

坏　上記のように、第IV期では模倣坏が食膳具の主流となる。口径は15cmを越える大型品から10cm以下の小型品まで見られるが、主体となるのは13cm前後のものである。口縁部は内傾、ないしは直立している。その端部は小さく内彎するものと、同様に外彎するものとがある。体部は総じて浅く、口縁部とほぼ同じ程度である。体部と口縁部を分ける段は次期のものより鋭く、上部の沈線は深く引かれている。

須恵器　第53号住居跡―11は坏である。口縁は内傾して立ち上がり、端部内面には段を持つ。蓋受

部の先端は尖鋭である。体部のヘラ削りは時計回りで、4段にわたっている。底部は平坦に仕上げられ、同じく時計回りにヘラ削りされている。第55号住居跡―5は無蓋高坏の坏部破片であるが、全体については不明確である。

(5) まとめ

ごくおおまかではあるが、以上が砂田・柳町遺跡より出土した第Ⅰ期～第Ⅳ期までの土器の概要である。関東地方における古墳時代の土器編年でいえば、これらは和泉期の終末段階から鬼高期の古い段階に相当することになる。ここでは各時期の特徴を重ねて述べ、他遺跡の編年観と年代について愚考を示して終わることとしたい。なお、対比する編年は深谷市の新屋敷東遺跡(前掲　田中)、岡部町の六反田遺跡(梅沢・石岡・浅野　1981)、本庄市・児玉町の後張遺跡(立石　1983)のものを用いた。

第Ⅰ期　砂田・柳町遺跡に集落が出現する時期である。住居跡には袖が不明確ながらも、既にカマドを備えている。周辺では深谷市の新屋敷東遺跡、上敷免遺跡(瀧瀬・山本　1993)、城北遺跡(現在整理中)、六反田遺跡などに併行関係の土器群がある。そして、これらを伴う住居跡にはいずれもカマドが設けられている。妻沼低地を中心とした大里地域では、先進地帯である児玉地域にさほど遅れることなく、この時期にはカマドが出現するものと考えられる。

第Ⅰ期は資料が少なく明言できないが、六反田遺跡の第Ⅲ期、後張遺跡のⅣ期とⅤ期の間に相当しよう。

第Ⅱ期　土器の変化に加え、特徴的なカマドの姿をもって第Ⅰ期と分けた。第Ⅲ期の土器とは形態上の変化は小さいが、いわゆる模倣坏を持たない点を重視し、敢て細分を行なった。カマドの成立に伴う甕の長胴化も既に顕著となっている。

これら第Ⅱ期の土器は六反田遺跡の第Ⅳ期、後張遺跡のⅤ期、新屋敷東遺跡の第Ⅰ期に併行するものであろう。

第Ⅲ期　模倣坏の出現がエポック・メーキングとなる。また、脚付甕が本期を持って消失することも軌を一にしている。模倣坏の存否を指標とするならば、砂田・柳町遺跡では第Ⅲ期からが鬼高期ということになる。須恵器の出土は見られないが、埼玉県北部の遺跡では初期のものを伴出する例が多く報告されている。住居の数は急増し、カマドに完成した煙道の備わるものも現れる。

第Ⅲ期の併行関係は第Ⅱ期と同様である。

第Ⅳ期　圧倒的な模倣坏の存在によって特徴づけられる。甕がほとんど存在しなくなることや、各器種の目立った形態変化を見ると、第Ⅲ期との時間差は大きいように感じられる。おそらく1時期、砂田・柳町遺跡では未検出の土器群が入るのであろう。

第53号住居跡から伴出した須恵器の坏は、TK―23型式の範疇で捉えられるものである。焼成はやや鈍く、産地は不明である。第55号住居跡の無蓋高坏は全体の形状が不明ではあるが、TK―47型式の段階を下らないものと思われる。

第Ⅳ期は六反田遺跡の第Ⅴ期、後張遺跡のⅥb期、新屋敷東遺跡の第Ⅰ・Ⅱ期との併行関係が認められる。砂田・柳町遺跡では後張遺跡のように、体部の深い模倣坏がほとんど見られない。この点を考慮すれば、第Ⅲ期と第Ⅳ期の間には、後張遺跡でⅥa期とされた一群の存在が想定できるの

かもしれない。

後続する第Ⅴ期となるべき土器群とは、模倣坏口縁部の形態によって分化した。第Ⅳ期のそれは内傾、ないしは直立であるが、次期では大半が外反である。これらは後張遺跡のⅦ期、新屋敷東遺跡の第Ⅲ期に併行する。

年代的には、第Ⅳ期の須恵器坏がＴＫ—23型式のものであることから、同期を５世紀の第Ⅳ四半期に比定することができよう。第Ⅱ・Ⅲ期は併行関係にある後張遺跡Ⅴ期にＴＫ—208型式の須恵器が共伴することから、５世紀の第Ⅲ四半期が想定される。

「Ⅱ　遺跡群の立地と環境」などでも触れたように、砂田・柳町・城北・居立・前の５遺跡は同一の埋没河川(仮称　城北川)沿いに連続する遺跡群で、住居跡は検出されただけでも400軒以上に達している。現在整理中の城北遺跡をはじめ、居立・前遺跡の報告でもそれぞれ出土土器の分析が行なわれると思うが、集落群の消長や県北地方における位置づけなど、総合的な検討は調査担当者へのその後の課題となってこよう。

参　考　文　献

梅沢太久夫・石岡憲雄・浅野晴樹　1981『六反田』六反田遺跡調査会

大屋道則・中村倉司　1992「出現期模倣坏の検討(一)」『研究紀要』第９号　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

柿沼幹夫・小久保徹1979『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書　第21集　埼玉県教育委員会

坂口　一　1987「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』４　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

立石盛詞　1983『後張』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第26集

田中広明　1992『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第111集

田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

中村倉司　1979『宇佐久保遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書　第38集

坂野和信　1992「和泉式土器の成立過程とその背景」『埼玉考古学論集』財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

大和　修・小川良祐　1983『若宮台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第28集

写真図版扉の土器

右：柳町遺跡第53号住居跡出土の須恵器坏

左：城北遺跡祭祀跡出土の赤彩坩